島　根　県　松　江　市

松江東工業団地内発掘調査報告書

文化財愛護
シンボルマーク

池ノ奥A遺跡・池ノ奥窯跡群

1990年3月

松　　江　　市
松江市教育委員会

島　根　県　松　江　市

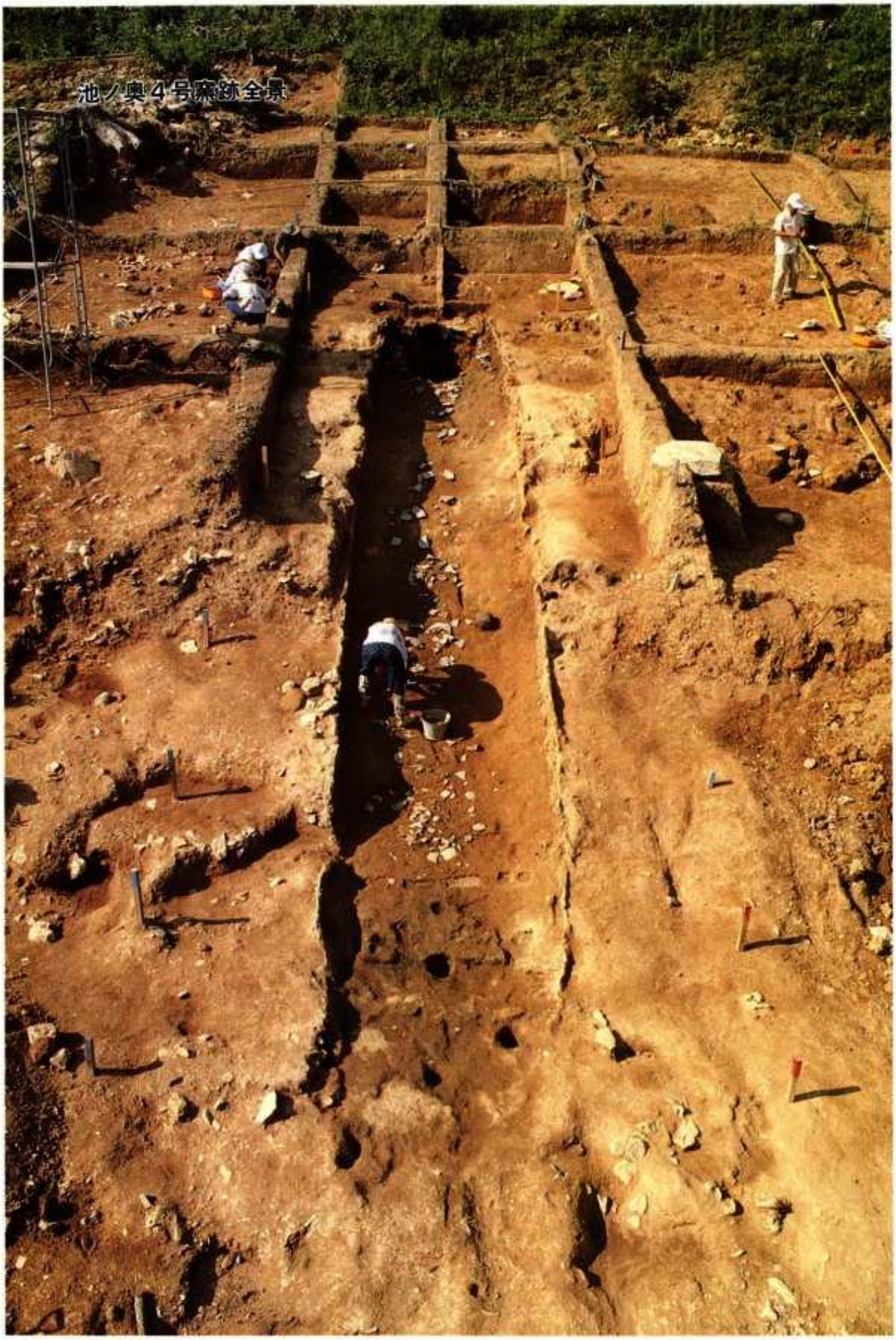
松江東工業団地内発掘調査報告書

池ノ奥A遺跡・池ノ奥窯跡群

1990年3月

松　　江　　市

松江市教育委員会


池ノ奥4号窯跡全景

❶

池ノ奥窯跡３号土壙出土・土馬(赤色塗彩)

池ノ奥Ａ遺跡出土・須恵質土製支脚(左)・円面硯(右)

第3章　各遺跡の調査概要－Ⅱ

池ノ奥A遺跡
池ノ奥窯跡群

目　　次

第7節　池ノ奥A遺跡 …… Ⅱ－ 5

1．調査に至る経緯 …… Ⅱ－ 7

2．調査の概要 …… Ⅱ－ 7

3．遺物の検討 …… Ⅱ－ 54

4．小結 …… Ⅱ－ 57

附編　池ノ奥A遺跡G区出土(第5層)の黒曜石片の性質とその産地の同定 …… Ⅱ－ 59

第8節　池ノ奥窯跡群 …… Ⅱ－ 91

1．調査の経過について …… Ⅱ－ 93

2．遺跡の立地と周辺の窯跡について …… Ⅱ－ 97

3．調査の概要 …… Ⅱ－100

4．小結 …… Ⅱ－234

第4章　自然科学的考察 …… Ⅱ－383

第1節　松江東工業団地内遺跡群出土の土器に塗布された赤色顔料物質26試料の微量化学分析 …… Ⅱ－385

武庫川女子大学薬学部　安田　博幸，森　眞由美

第2節　池ノ奥窯跡群，および，その周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 Ⅱ－391

奈良教育大学　三辻　利一

第3節　池ノ奥窯跡の熱残留磁気による年代測定 …… Ⅱ－419

島根大学理学部　伊藤　晴明，時枝　克安

第4節　朝酌地区釜田遺跡出土鉄滓の調査 …… Ⅱ－427

日立金属㈱ 安来工場　清永　欣吾

第5節　地質・鉱物学的にみた大井周辺出土の土師器および須恵器片

―その原料土をめぐって― …… Ⅱ－445

島根大学教育学部　三浦　清

第5章　ま と め（総括） …… Ⅱ－457

池ノ奥A遺跡

池ノ奥A遺跡

1. 調査にいたる経緯

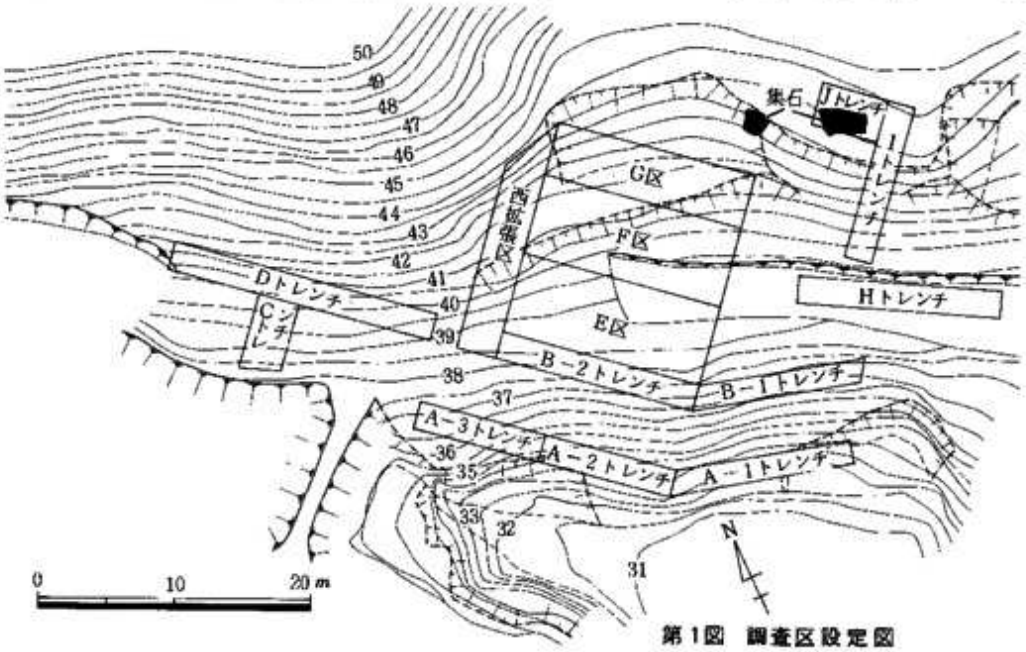
本遺跡は，大井町の大谷川水系上流部に位置する北西から南東に伸びる小さな谷間の西方南向き斜面に所在する。標高は32～45mを測り，原状は雑木林である。

当初（昭和57年度）の分布調査では，須恵器片が点々と散布しているのが認められた。また，この谷間の東方入口にある溜池西側に存する開墾地跡の谷底平坦地および南向き緩斜面には，池ノ奥窯跡が所在し，本遺跡も窯跡の可能性があるのではと思われた。したがって，調査は南向き斜面に4本のトレンチ（A－1・2・3，B－1・2，C，D）を設けて，窯の有無を確かめることから開始した。

2. 調査の概要

調査は，昭和62年4月2日から昭和62年8月31日までのうち，計92日間を要して実施した。

B－2トレンチ以外では，遺物も極わずかしか出土せず，遺構も確認されなかった。しかし，B－2トレンチ北端からは，土師器片がまとまって出土し，窯以外の遺構があるのではと考えられた。よって，B－2トレンチ北側の緩斜面に新たに2本のトレンチ（E，F）を設け，遺物の出土状況により拡張し，3つの区（E，F，G）に設定し直した。さらに東側池ノ奥窯跡との間の平坦面（山林伐開時の重機による削平），および，その北側の斜面に3本のトレンチ（H，I，J）を設定した。また，B－2トレンチ，E，F，G区については，



第1図　調査区設定図

西側に拡張区を追加して調査を行なった。（第１図）

＜A－１トレンチ＞

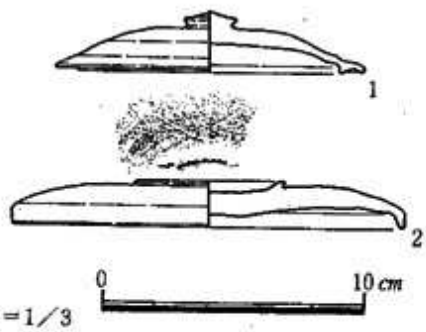
旧堤の北側急斜面に設定した14×２mのトレンチである。遺構は検出されなかった。

土層について（第３図）

表土層９～72cm，第２層明茶褐色土７～54cm，第３層やや暗い褐色土20～62cm，第４層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）15～64cm，第５層暗褐色土８～40cmを測り，第６層赤褐色土で地山に至る。

各層出土の遺物について

出土遺物は第３層より須恵器の甕，坏身，高台付坏，輪状つまみ及び擬宝珠状つまみの坏蓋の破片が発見された。



第２図　出土遺物実測図

この内，図に示したものは坏蓋で，天井部はやや丸味を持ち，擬宝珠状つまみを有し，口縁部内側にかえりを有する。色調は灰色，胎土は密である。柳浦編年[註1]１式に属する。（第２図　１）

＜A－２トレンチ＞

10×２mのトレンチである。遺構は検出されなかった。

土層について（第３図）

表土層15～40cm，第２層明茶褐色土15～38cm，第３層やや暗い褐色土４～30cm，第４層黒色土18～36cm，第５層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）27～51cm，第６層暗褐色土８～21cm，第７層暗紫褐色土９～30cmを測り，第８層赤褐色土で地山に至る。

各層出土の遺物について

出土遺物は第２層より土師器の甕，第５層より須恵器の高台付坏，第６層より土師器の甕，須恵器の口縁部内側にかえりを有する坏蓋の破片が発見された。

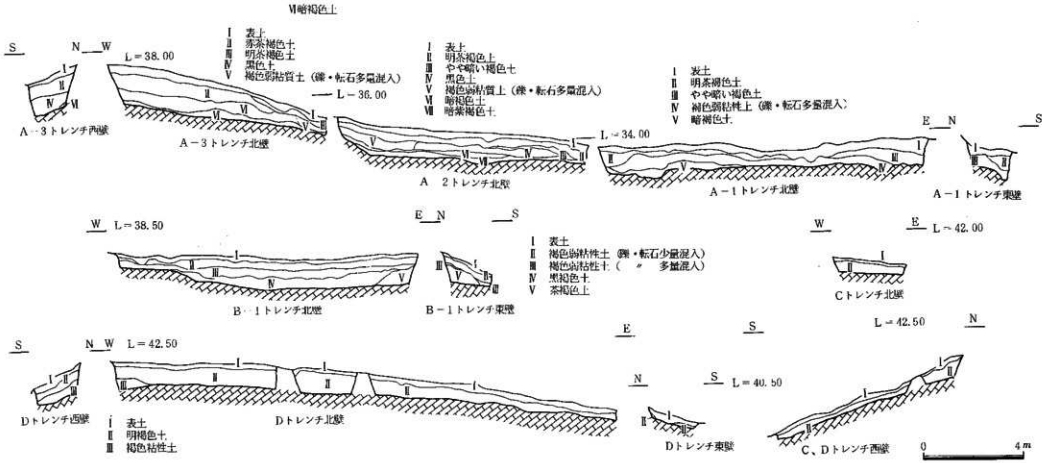
＜A－３トレンチ＞

９×２mのトレンチである。遺構は検出されなかった。

土層について（第３図）

表土層10～40cm，第２層赤茶褐色土21～74cm，第３層明茶褐色土４～27cm，第４層黒色土24～63cm，第５層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）18～32cm，第６層暗褐色土４～36cmを測り，第７層赤褐色土で地山に至る。

各層出土の遺物について



第3図　A、B、C、Dトレンチセクション図

出土遺物は第3層より須恵器の坏蓋の破片が発見された。坏蓋は天井部は静止糸切りでほぼ平ら，輪状つまみを有し，口縁部付近で屈曲して下る。外面天井部にヘラ記号有り。内外面に重ね焼き痕有り。柳浦編年3式に属する。（第2図　2）

＜B－1トレンチ＞

旧堤の北側斜面の裾に設定した12．5×2mのトレンチである。遺構は検出されなかった。

土層について（第3図）

表土層10～30cm，第2層褐色弱粘性土(礫，転石少量混入）9～43cm，第3層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）4～46cm，第4層黒褐色土12～56cm，第5層茶褐色土63cmを測り，第6層赤褐色土で地山に至る。

＜B－2トレンチ＞

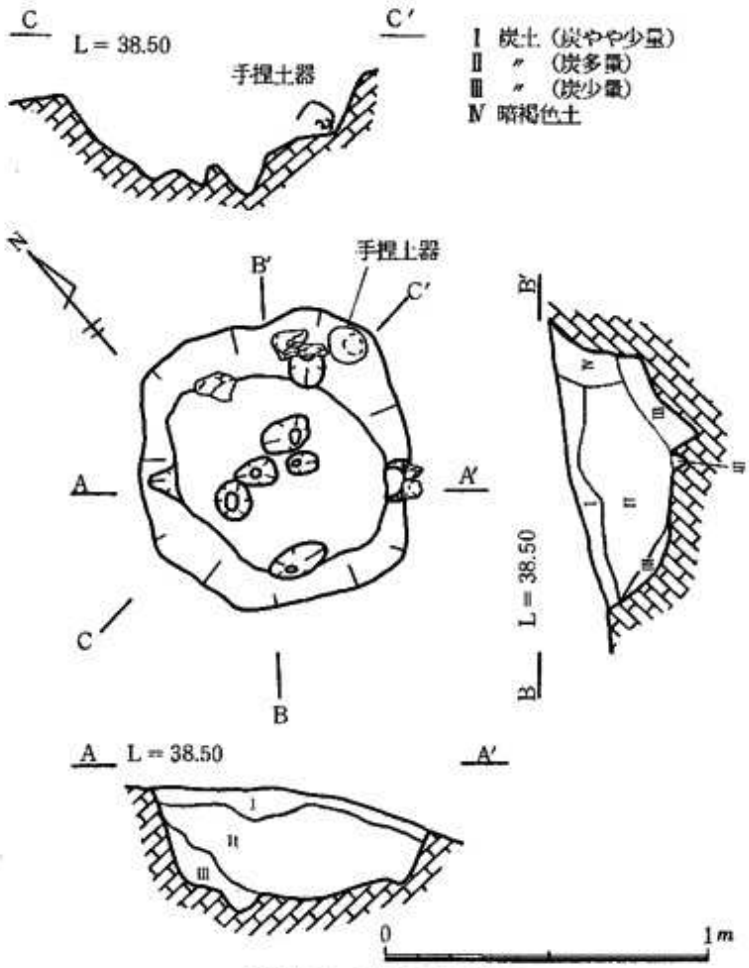
15×2mのトレンチである。

土層について(第21図)

表土層7～25cm，第2層褐色弱粘性土(礫，転石少量混入）11～28cm，第3層やや暗い褐色土4～18cm，第4層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）10×35cmを測り，第5層赤褐色土で地山に至る。

遺構について

ＳＫ０３(第4図)：第4層上面の西端で西拡張区と接して検出された。平面プラン略方形で上端95×90cm，下端65×60cm，深さ33cmを測る。断面は逆台形をしており，土壙の床面はほぼ平らで，直径10～19cmのピットが5穴あった。堆積土は炭土で，壁面は茶褐色土で焼けてはいなかった。



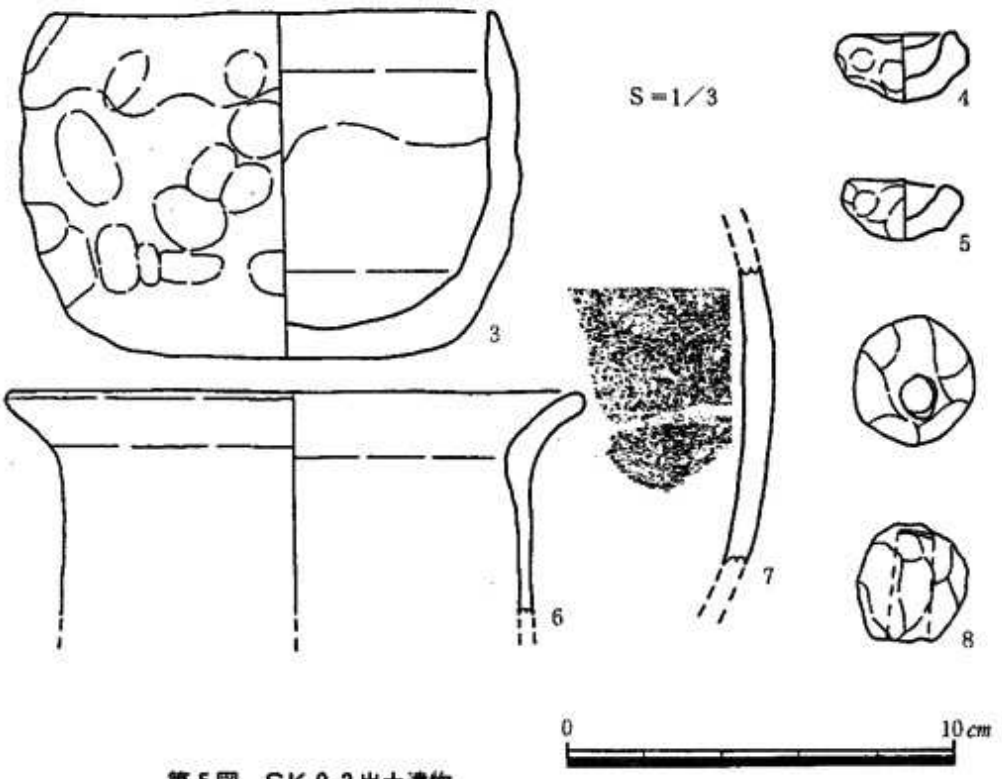
第4図　ＳＫ０３平面図

遺物は下端東側より小形粗製手捏土器２点を盤型手捏土器が覆い隠すように俯伏せた状態で出土した。上端南側より土師器の甕の破片，同じく東側より土師器の壺の細片，その下より土玉が出土した。盤型手捏土器（３）は口径11.4cm，器高8.8cmを測り，底部は深く，平らであり，僅かに内彎して口縁部に至り，端部は鋭い。内外面に粘土継目痕と焼け痕が認められる。色調は黄褐色，胎土は密である。小形粗製手捏土器（４，５）は口径2.8cmと2.6cm，器高1.7cmと1.6cmを測る。色調は淡赤褐色，胎土は密。甕片（６）は磨耗が激しく調整は不明，口径15cm，残存高5.7cmを測る。壺片（７）は磨耗が著しく，調整は判明しなかったが，内面に爪を押しつけた痕を２箇所確認できた。色調は内面淡黄褐色，外面淡赤褐色。土玉（８）は直径3.1cm，器高3cm，重量24.75ｇを測り，色調は黄褐色。

出土遺物より判断して，自然神の鎮魂の祭祀を行った土壙と思われる。その時期は不明である。

各層出土の遺物について

出土遺物は第２層より須恵器の坏蓋の破片，第４層より土師器の甕，竈，黒曜石片が出土した。９は甕の口縁部であり，内面ヘラ削り，外面調整不明，他は横ナデ。黒曜石片（10）には加工痕は見当たらなかった。またE区出土の高台付坏（90）とセット関係になるものと



第５図　ＳＫ０３出土遺物

思われる坏蓋を表採。坏蓋（11）は天井部に丸味を持ち，輪状つまみを有し，口縁部内側にかえりを有す。つまみ付近に棒状工具による刺突痕有り。

＜Cトレンチ＞

池の北側急斜面にT字形に設定した中の縦部分で5.5×3mのトレンチである。遺構は検出されなかった。

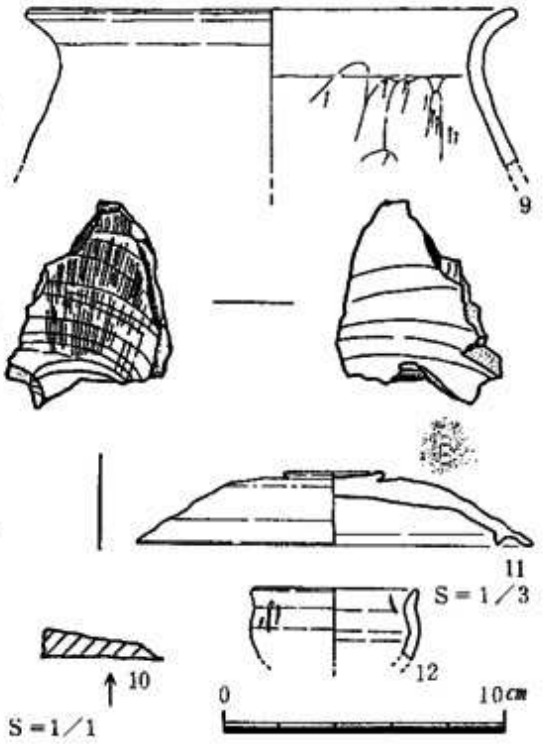
土層について（第3図）

表土層11～20cm，第2層明褐色土25～45cmを測り，第3層赤褐色土で地山に至る。

＜Dトレンチ＞

T字形に設定した中の横部分で20×2mのトレンチである。遺構は検出されなかった。

土層について（第3図）



第6図　B－2、Dトレンチ出土遺物

表土層12～36cm，第2層明褐色土12～88cm，第3層褐色粘性土52cmを測り，第4層赤褐色土で地山に至る。

各層出土の遺物について

出土遺物は第2層より須恵器の甕，坏蓋，坩の破片である。

この内，図に示したものは口径5.8cm，残存高2.8cmを測り，内外面にヘラ傷を有する坩（12）である。色調は暗灰色，胎土は密である。

窯の存在を想定して設定したA，B，C，Dトレンチであったが，残念ながら検出できなかった。

＜E　区＞

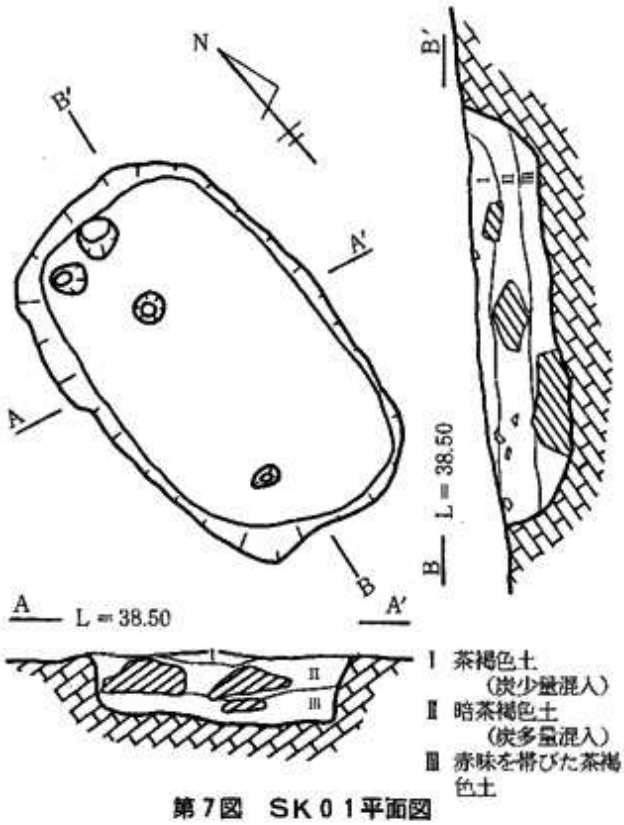
B－2トレンチ北側の緩斜面に設定した15×6mのグリッドである。

土層について（第21図）

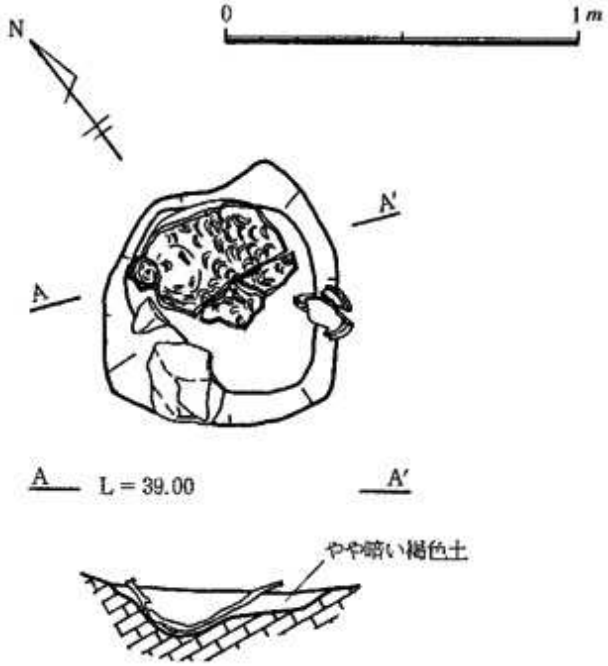
表土層9～40cm，第2層明茶褐色土12～30cm，第3層褐色弱粘性土（礫，転石少量混入）10～32cm，第4層やや暗い褐色土8～30cm，第5層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）14～56cm，第6層明黄褐色土8～18cmを測り，第7層赤褐色土で地山に至る。

遺構について

検出した遺構は，土壙2基（SK01，02），焼土2，土器群2であった。



第7図　SK01平面図

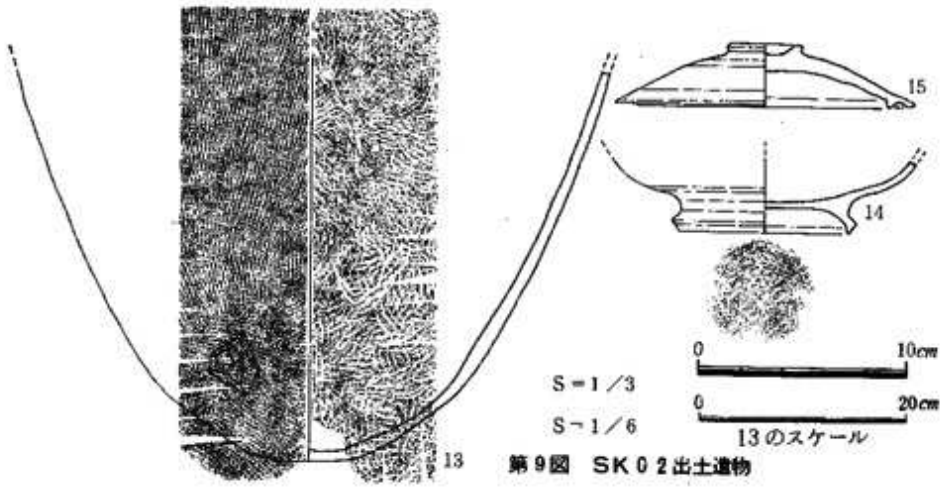


第8図　SK02平面図

SK01（第7図）：第4層上面で検出された。平面プラン隅丸長方形，上端で120×75cm，下端で102×68cm，深さ24cmを測る。断面は逆台形で床面はほぼ平らである。直径8～12cmのピットが4穴あった。堆積土は上層茶褐色土（炭少量混入）9cm，中層暗茶褐色土（炭多量混入）4.5～10cm，下層赤味を帯びた茶褐色土5～10cm，壁面床面共に焼け痕はなく，焼土もなかった。遺物は出土しなかった。この土壙がどういう性格のものかは不明である。

SK02（第8図）：第4層上面で検出された。平面プラン略長方形，上端で75×66cm，下端で55×54cm，深さ10～18cmを測る。堆積土は，やや暗い褐色土である。出土遺物は須恵器の甕，高台付坏，坏蓋である。甕（13）は残存高31.9cmを測り，下4分の1を残している。内面円弧叩き，外面体部平行叩き，外面底部叩きの後カキ目調整。色調は青灰色，胎土は密である。高台付坏（14）は底部静止糸切り，外八の字形の高台を付す。外面底部にヘラ記号有り。柳浦編年4式に属する。坏蓋（15）は天井部に丸味を持ち，輪状つまみを有し，つまみ周辺にヘラ削りを施し，口縁部内側にかえりを有す。色調は灰色，やや軟質である。柳浦編年1式に属する。

この土壙の性格は不明であるが，出



第9図　SK02出土遺物

土遺物から7世紀中より8世紀後半に埋納されたものと思われる。

焼土：第4層下面で2箇所検出された。大きさ1.4×1.1m，1×0.7m，厚み3～8cm，2～8cmであり，焚火をした可能性も考えられるかもしれない。

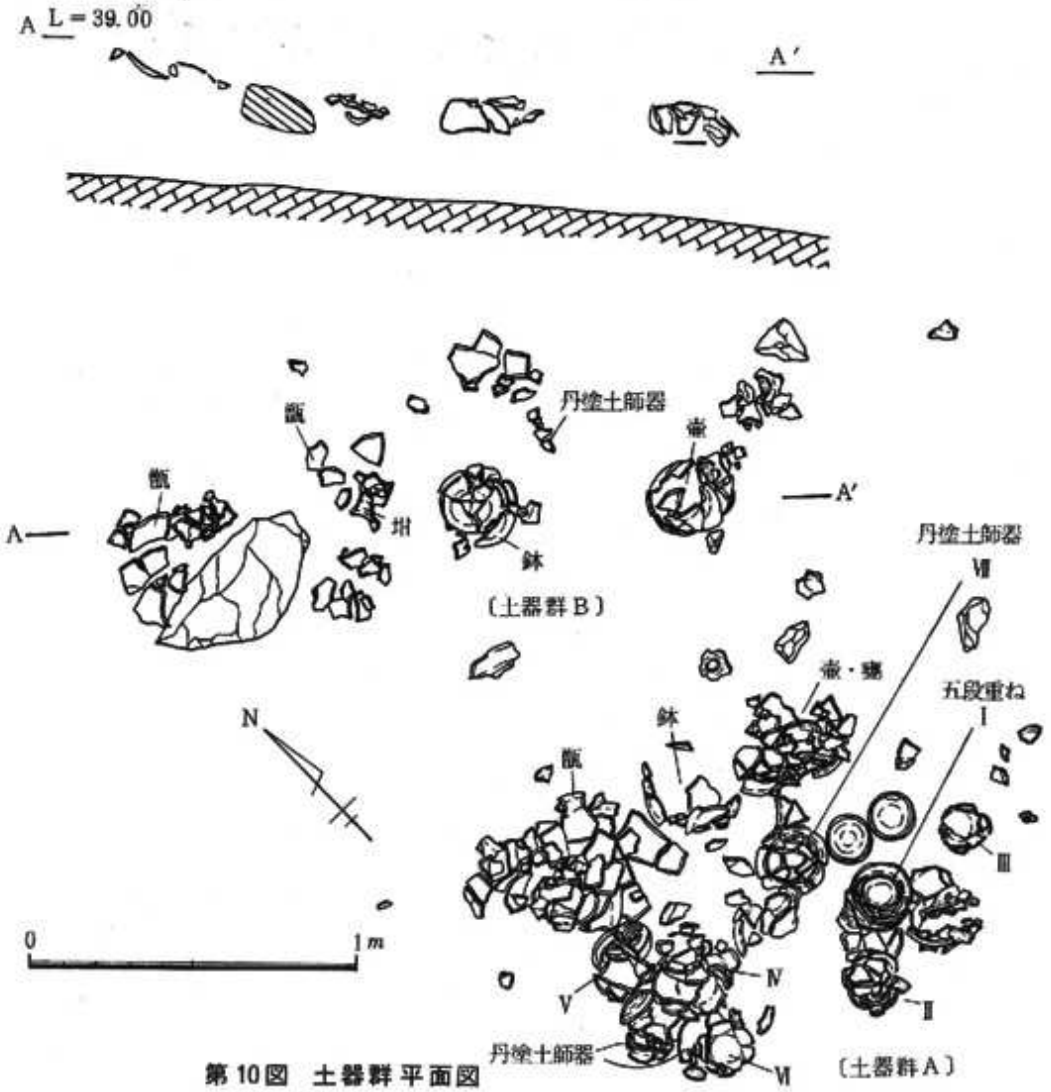
土器群（第10図）：第4層上面，調査区中央北側寄りから2箇所検出した。

（A）1.7×1.3mの範囲に集中した状態で，ほぼ水平に遺物が検出された。出土遺物は須恵器の盤（35）を下にして鉢（29），坏身3点（23，22，16）の順で5段に重ねたもの（Ⅰ）。坏身2段重ね（17，27）の上に盤（36）をのせた3段重ね（Ⅱ）。坏身の2段重ね（18，28）（Ⅲ）。鉢（30）の内に爪痕をつけた坏身（19）を置いたもの（Ⅳ），鉢の2段重ね（33，31）の内に坏身（20）を立懸けたもの（Ⅴ）。丹塗土師器の盤（37）の上に須恵器の坏身（24）を置いた2段重ね（Ⅵ）。俯伏せた丹塗土師器の盤(38)と接するように並んだ坏身2点（26，25）（Ⅶ）。丹塗土師器の坏身。大小2点の甕。鉢2点。甕，壺である。

坏身（16～21）は底部静止糸切り，22は底部回転糸切り，口縁部付近にくびれを有す。23は底部静止糸切り，24は底部回転糸切り，口縁部はほぼ垂直に上り，口縁部内側に微かな稜を成す。25は底部静止糸切り，26は底部回転糸切り，口縁部は内傾する。柳浦編年4式に属する。27は底部静止糸切り後ナデ，口縁部付近にくびれを有す。28は底部回転糸切り後ヘラ状工具でナデ調整，口縁部付近に薄い沈線あり。柳浦編年3式に属する。鉢（29）は底部回転ヘラ削り，内彎して上り，口縁部付近にU字形の沈線，口縁端部付近に薄い沈線を施す。30は口縁部は内彎し，端部付近に1条の沈線を施す。31，32は底部回転ヘラ削り，内彎して上り，口縁部付近で内傾する。33は底部回転ヘラ削り，内彎して伸び，口縁部はほぼ垂直に上る。34は平底で，底部周辺にヘラ削りを施し，内彎して伸び，口縁部はゆるやかに外反する。盤（35）は底部静止糸切り後回転ナデ，高台はほぼ垂直に下り，口縁部付近より徴かに外反して端部に至る。36は焼成不良で底部の調整不明，外八の字形の高台を付し，体部は内

彎して伸びる。丹塗土師器の盤（37）は底部ヘラ切り後回転ナデ，外八の字形の高台を付し，内彎して伸び，口縁端部に至る。38は底部静止糸切り，垂直に下る高台を付し，内彎して伸び，口縁端部に至る。国庁３形式[註2]に属する。丹塗土師器の坏身（39）は底部静止糸切り，底部付近に削りを施し，ほぼ直線的に伸び，口縁端部に至る。甑（40）は底部に円孔が４穴穿れ，体部中央に外上方に伸びる１対の把手を有し，口縁部はゆるやかに外反する。内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ。41は底部に角孔が穿れている。内面ヘラ削り，外面ハケ目調整。壷（42）は磨耗のため内面の調整不明，外面はハケ目調整，他は横ナデ。外面に煤付着。43は壷の底部である。内面ヘラ削り，外面調整不明。内外面に焼け痕有り。44は甕である。内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ。外面に煤付着。

（B）2.1×1ｍの範囲に横一列に大小の甑，坩，俯伏せにした鉢と壷を人為的に並べられ



第10図　土器群平面図

た状態で検出された。その他の出土遺物は須恵器の高台付坏，丹塗土師器の坏身である。

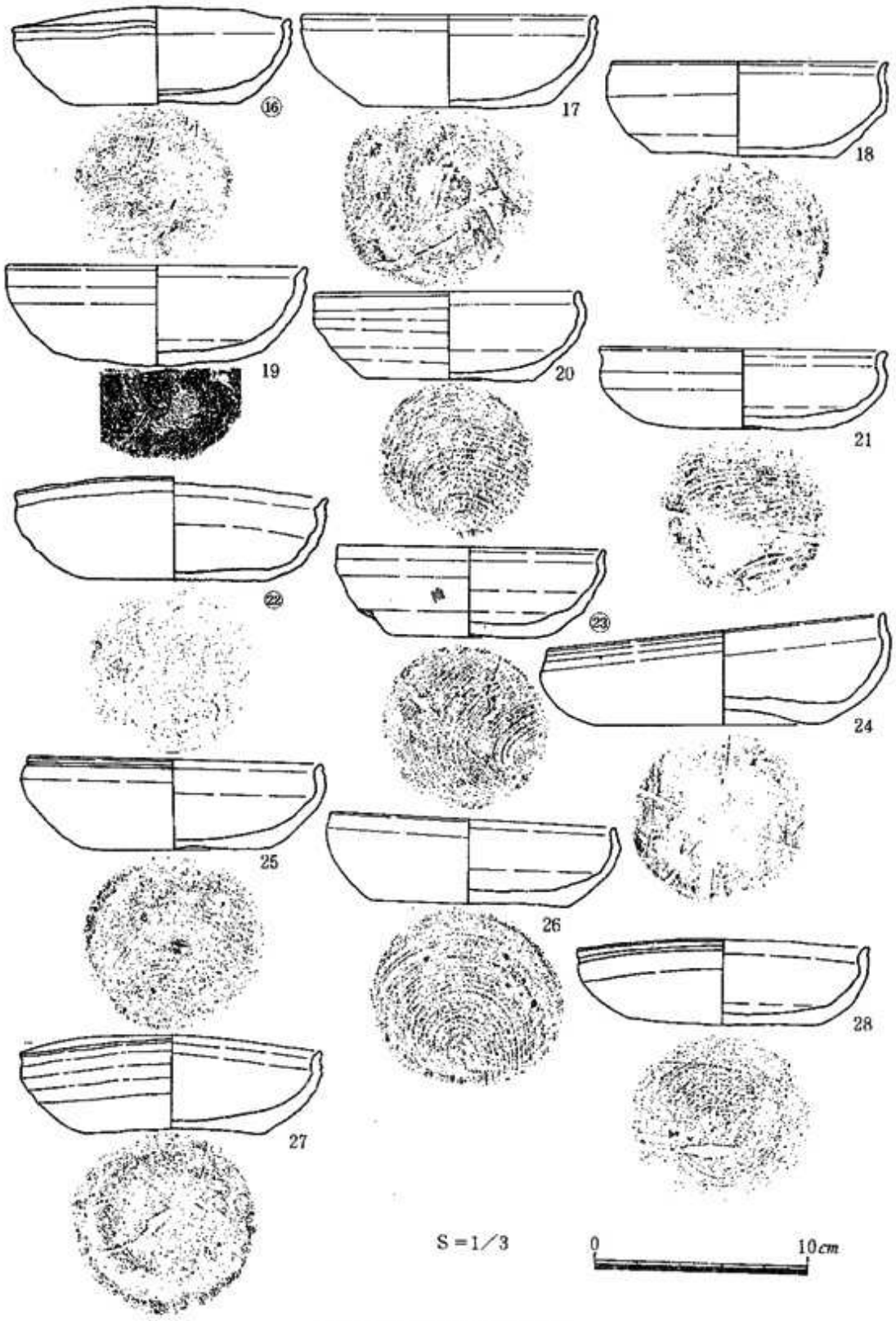
45，46は甑である。45は底部に円孔が4穴穿れている。内面ヘラ削り，外面磨耗のため調整不明。46は内外面磨耗のため調整不明。坩（47）は口頸部は外傾して伸び，口縁端部に至る。口縁部付近にヘラ状工具による波状紋が1条施されている。鉢（48）は底部回転糸切り，内彎して伸び，口縁端部に至る。49は底部回転糸切り，底部周辺にヘラ削りを施し，内彎して伸び，口縁部付近で内傾する。壷（50）は底部平行叩き後カキ目調整，体部は平行叩き，但し最大径付近は叩き後横ナデ，肩部は平行叩き，内面下半分は円弧叩き，その他は横ナデ。底部に焼き台付着。高台付坏（51）は底部ヘラ切り，外八の字形の高台を付し，外上方に伸び，口縁部は垂直に上る。色調は青灰色，胎土は密で3㎜までの白色砂粒を多量に含む。柳浦編年1式に属する。丹塗土師器の坏身（52）は底部糸切り，外上方に伸び，口縁部付近で微かに外反して端部に至る。53は糸切りを施した平底である。国庁3形式に属する。

出土状態から埋納と，窯跡に近接しているため，土器の仕分け場とを想定したが，精査した結果その痕跡は認められなかった。これらの土器群の性格としては，祭祀遺構が考えられるが，如何なる祭祀を行ったものかは不明である。また出土状態を検討すると祭祀の執り行われた場所はこの地点で，土器群は祭祀終了後に置き捨てられたものと思われる。時期は（A）8世紀前より末まで，（B）7世紀中より8世紀末までである。

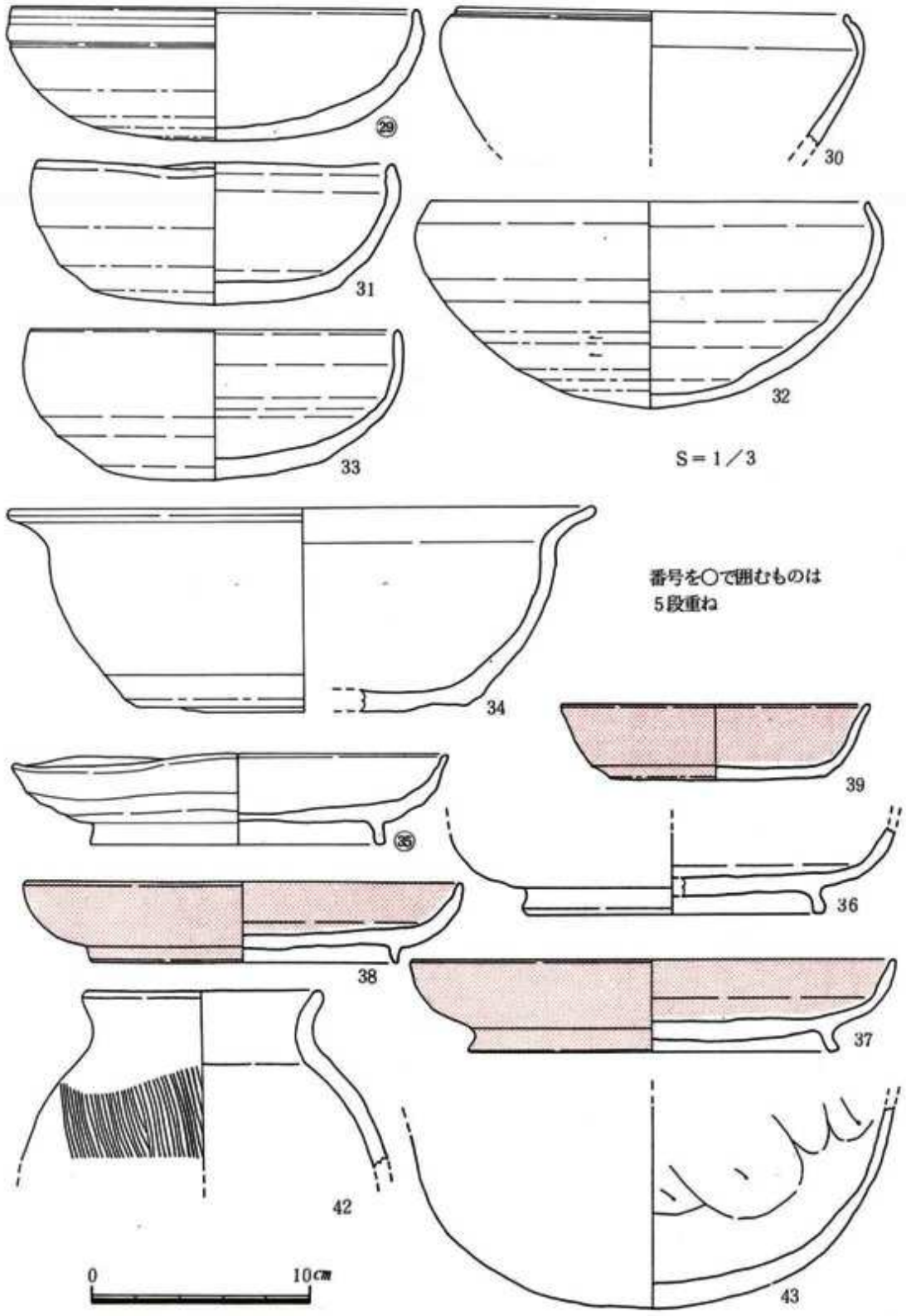
各層出土の遺物について

出土遺物は第2層より須恵器の坏蓋，坏身，高台付坏がある。第3層より須恵器の坏蓋，小壷，土師器の土製支脚，把手，寛永通宝がある。第4層より須恵器の坏蓋，坏身，高台付坏，低脚坏，高坏，鉢，壷，甕，甑，土師器の壷，甕，土製支脚，竈，把手，土玉がある。

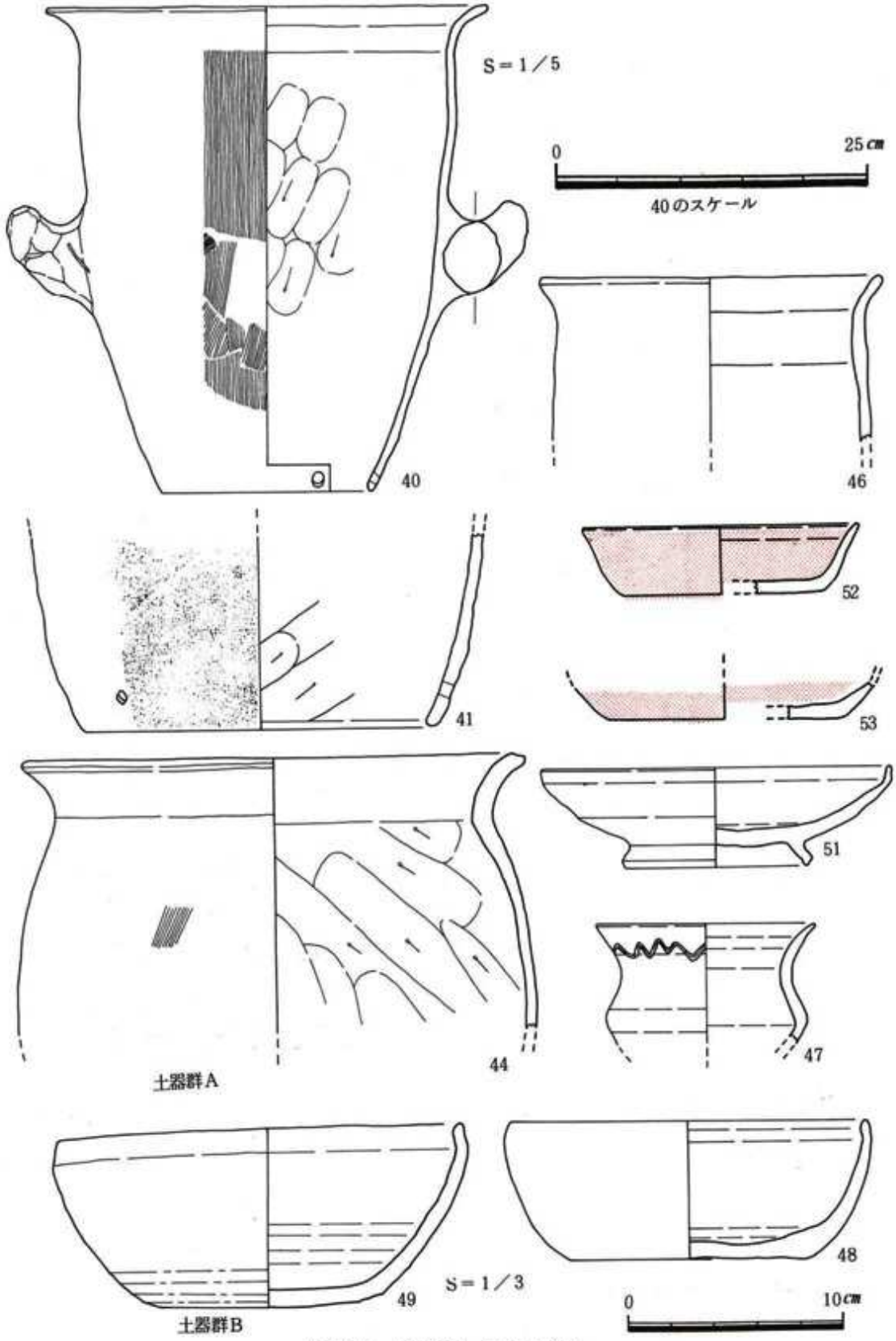
坏蓋（54）は天井部と口縁部の中間にわずかな稜を成し，稜の上下に沈線を施す。口縁端部にかすかな段を有す。山本編年Ⅲ期[註3]に属する。55，56は天井部は平らで，輪状つまみを有し，口縁部内側にかえりを有す。55は高く，しっかりした輪状つまみである。56は天井部内面に爪痕有り。57は天井部ヘラ切り，平らで中央に粘土塊が貼付いている。口縁部内側にかえりを有す。58～62は天井部に輪状つまみを有し，口縁部は屈曲して下る。60はつまみ中央にヘラ記号有り。61はつまみの端部は平坦，つまみ中央にヘラ記号有り。62はつまみ中央に静止糸切り痕有り。63～69は天井部に輪状つまみを有す。69は内面に「－」外面に「×」のヘラ記号を有す。70は口縁部内側にかえりを有する。71は天井部ヘラ切り，体部は直線的に下り，口縁端部に至る。口縁部に歪み有り。坏身(72)の受部は外上方に伸び，端部はやや角ばっている。立ち上りは内傾し，端部は鋭い。山本編年Ⅲ期に属する。 73，74は底部ヘラ切り，内彎して伸び，口縁部付近にくびれを有す。74の内面底部にヘラ記号有り。75は底部



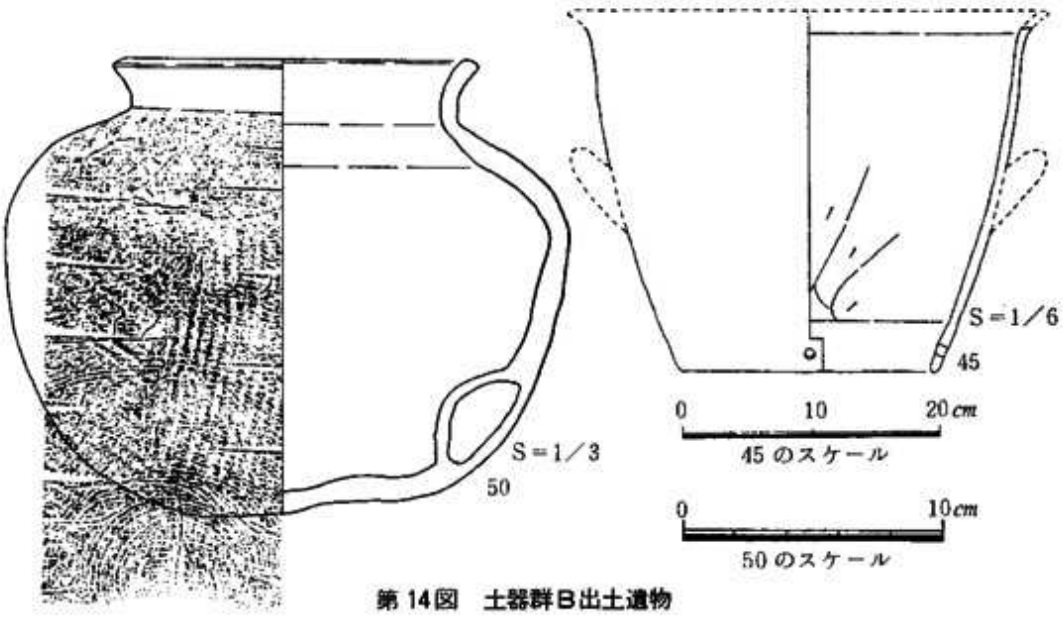
第11図　土器群A出土遺物



第12図　土器群A出土遺物



第 13図　土器群A・B出土遺物



第14図　土器群B出土遺物

ヘラ切り後ナデ，底部付近に4条の沈線を施す。体部は内彎して伸び，口縁部はほぼ垂直に上る。76は底部ヘラ切り後ナデ，内彎して伸び，口縁端部に至る。口縁部内側にくびれを有す。外面底部にヘラ記号有り。77は底部静止糸切り，内彎して伸び，口縁部は内傾する。外面底部に指痕有り。78は底部静止糸切り，内彎して伸び，口縁端部に至る。口縁部に1条の沈線を施す。79，80は底部回転糸切り，内彎して伸び，口縁部付近にくびれを有す。高台付坏（81，82）は底部ヘラ切り後回転ナデ，外八の字形の高台を付し，内彎して伸び，口縁端部に至る。83，84は底部ヘラ切り後ナデ，外八の字形の高台を付し，内彎して伸び，口縁部はほぼ垂直に上る。84は外面底部にヘラ記号有り。85，86の内面底部にヘラ記号有り。87は底部ヘラ切り後ナデ，外八の字形の高台を付し，体部は直線的に伸び，口縁端部に至る。88は底部ヘラ切り，短い高台を付す。89，90は底部ヘラ切り後ナデ，ほぼ垂直に下る高台を付す。89は外面底部にヘラ記号有り。90は外面底部に櫛状工具による刺突痕有り。91は底部ヘラ切り，高台は欠損，内彎して伸び，口縁端部に至る。92はいびつである。底部はヘラ切り後回転ナデ，ほぼ垂直に下る高台を付し，内彎して伸びる。体部に薄い沈線を1条施す。93～96は底部静止糸切り後ナデ，外八の字形の高台を付し，内彎して伸びる。96の口縁部はほぼ垂直に上る。内面底部にヘラによる掻き痕有り。93の外面底部にヘラ記号「七」有り。95の外面底部にヘラ記号有り。97は底部回転糸切り，ほぼ垂直に下る高台を付し，体部はほぼ直線的に下る高台を付し，体部はほぼ直線的に伸び，口縁端部に至る。内外面底部にヘラ記号「七」「七」有り。98～100は底部静止糸切り，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸びる。101～103は低脚坏である。101の坏部はいびつである。底部はヘラ切り後ナデ，

脚付近にヘラ状工具による横ナデ。高坏（104，105）は脚部の2方向にヘラによる切込みが貫通しており，105は裾部付近で外方に長く伸び屈曲して下る。106は脚部に2条の薄い沈線を施す。短頸壷（107）は底部ヘラ切り後ナデ，ほぼ平坦で，体部は内彎して伸び，口縁部はほぼ垂直に上る。108，109の底部は静止糸切り，110の底部に糸切り痕を残す。111は短頸壷の蓋である。天井部ヘラ切り，周辺をヘラ削り，内彎して下り，口縁部はかすかに外反する。112は丸底の壷である。内面底部に円弧叩き，外面底部に平行叩き，体部にハケ目調整，他は横ナデ。全高の3分の2付近に把手痕あり。113は内面円弧叩き，外面平行叩き，底部は叩き後ハケ目調整，他は横ナデ。114，115は壷の底部である。114の外面にはヘラ記号有り。甕（116）は内面円弧叩き，外面平行叩き調整。甕（117）の口頸部は直線的に伸び，口縁部は外反する。口頸部に2条の沈線を施す。118～121は丹塗の土師器である。118は盤である。底部はヘラ切り後ナデ，ほぼ垂直に下る高台を付し，内彎して伸び，口縁端部に至る。119は坏身で平底，体部は直線的に伸び，口縁端部に至る。120の底部は静止糸切り，内彎して伸び，口縁端部に至る。121は坏身の底部である。122～125は甕の口縁部である。126，127は壷の口縁部である。127の外面に焼け痕有り。128～132は土製支脚である。133～135は竈である。136～138は丸形の土玉である。139は円筒形の土玉である。寛永通宝は140である。

＜F　区＞

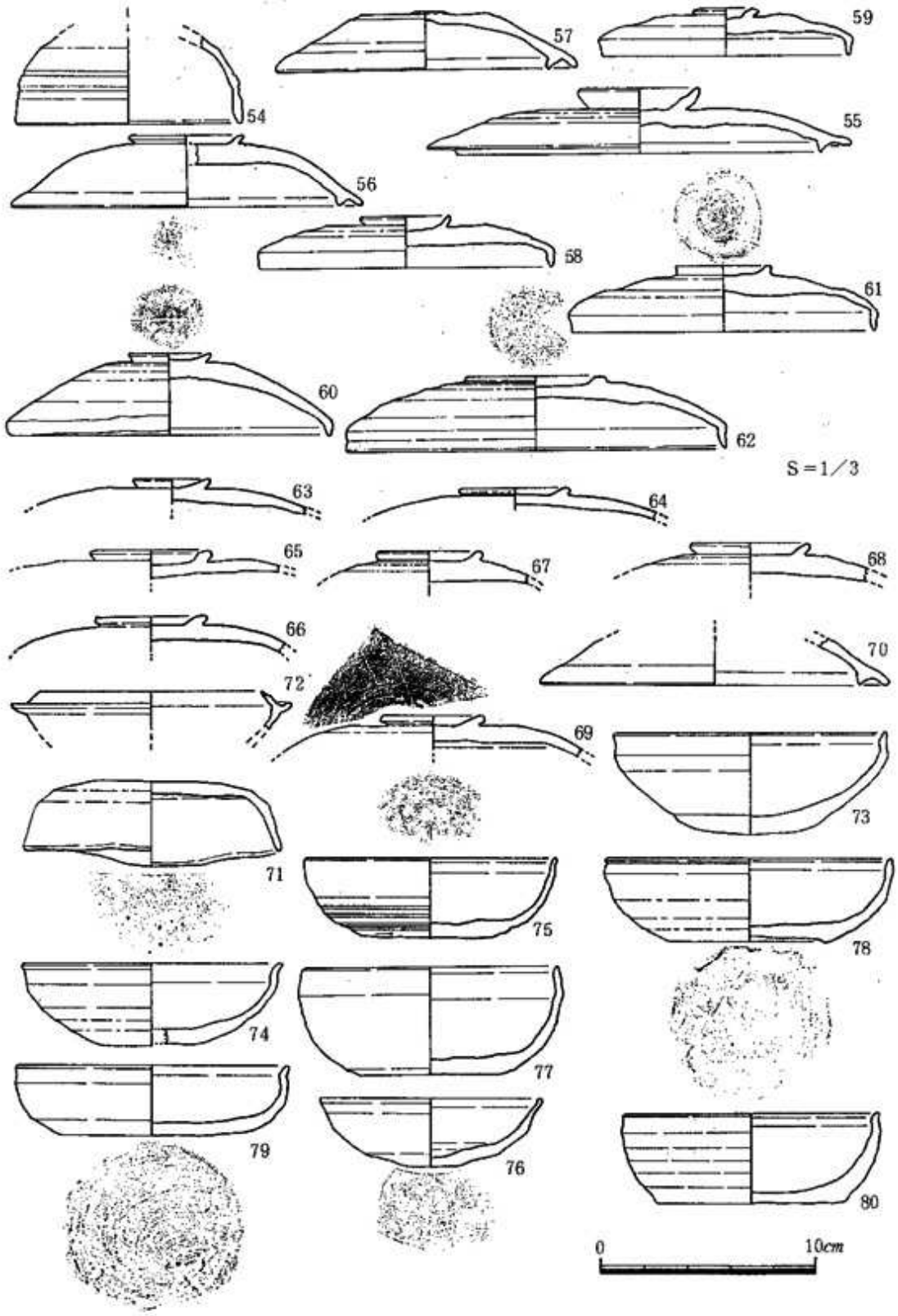
緩斜面に設定した15×3mのグリットである。

土層について（第21図）

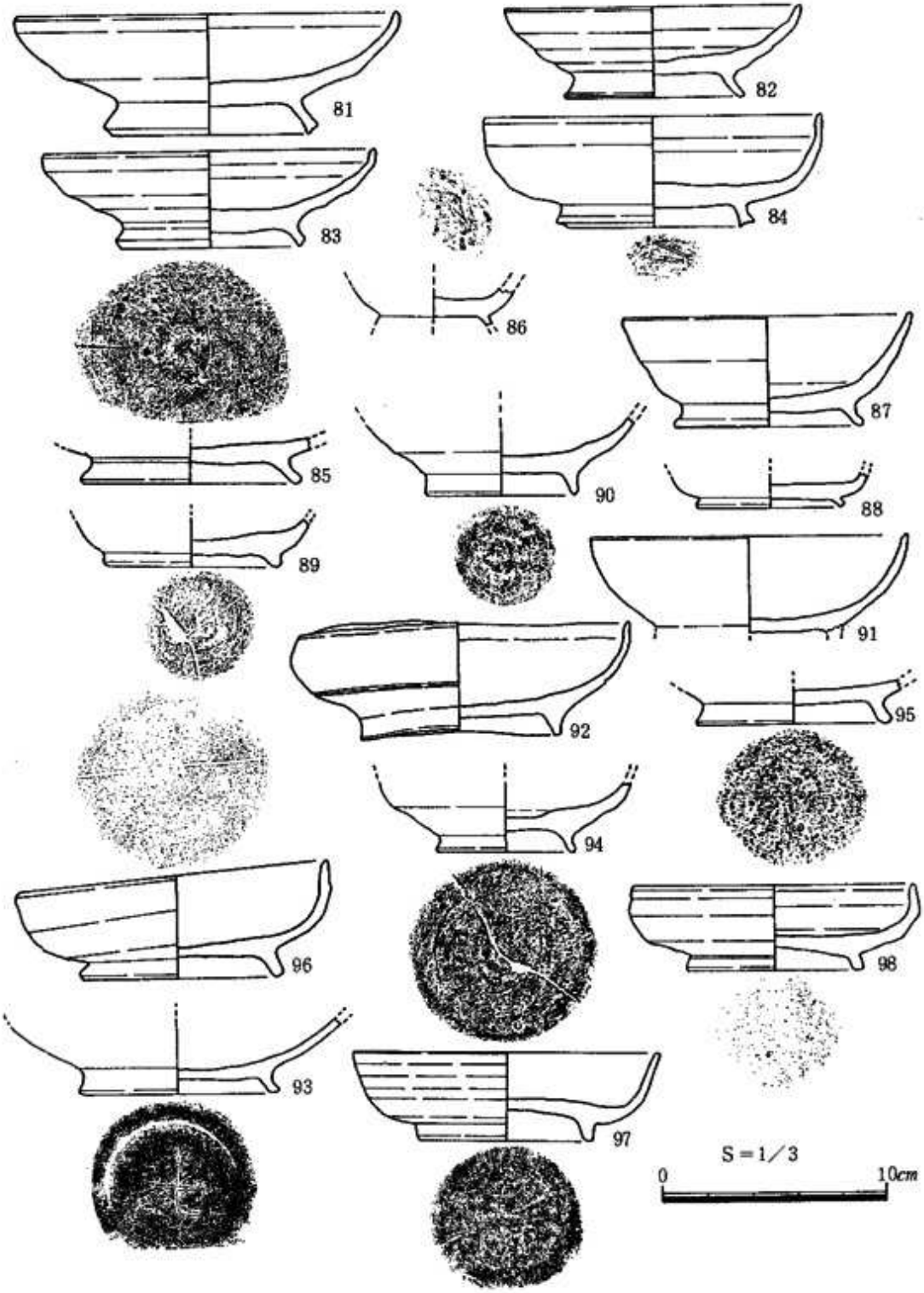
表土層6～30cm，第2層やや明るい褐色土10～22cm，第3層炭土11～25cm，第4層暗褐色土6～25cm，第5層明茶褐色土14～30cm，第6層明茶褐色土（礫，転石多量混入）61～85cm，第7層褐色弱粘性土（礫，転石少量混入）12～37cm，第8層やや暗い褐色土10～40cm，第9層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）38～70cm，第10層明黄褐色土11cmを測り，第11層赤褐色土で地山に至る。

遺構について

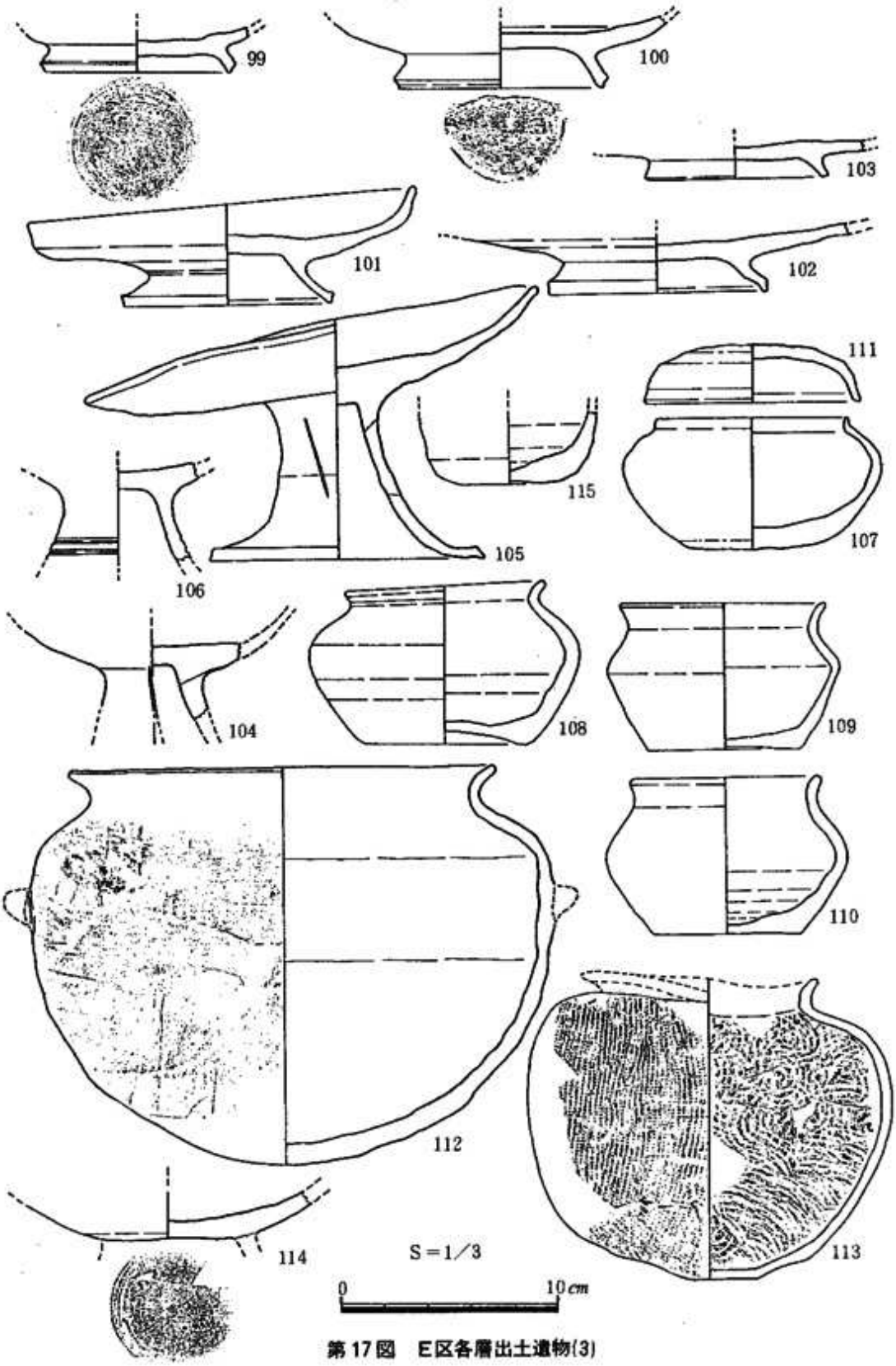
調査区北東部，第5層より須恵器の輪状つまみの坏蓋が6点，ほぼ南北の方角に並んで出土した。北から順に141～146となる。141は口径15．8cm，器高2.8cmを測り，天井部は平たく，周辺をヘラ削りし，口縁部は屈曲して下る。色調は青灰色，胎土は密である（柳浦編年3式）。142は口径19cm，器高3cmを測り，天井部は平たく，周辺をヘラ削りし，口縁部内側にかえりを有す。色調は濃青灰色，胎土はやや粗い（柳浦編年1式）。143は口径17．4cm，器高3.5cmを測り，天井部は丸味を持ち，天井部から口縁部付近までヘラ削りし，



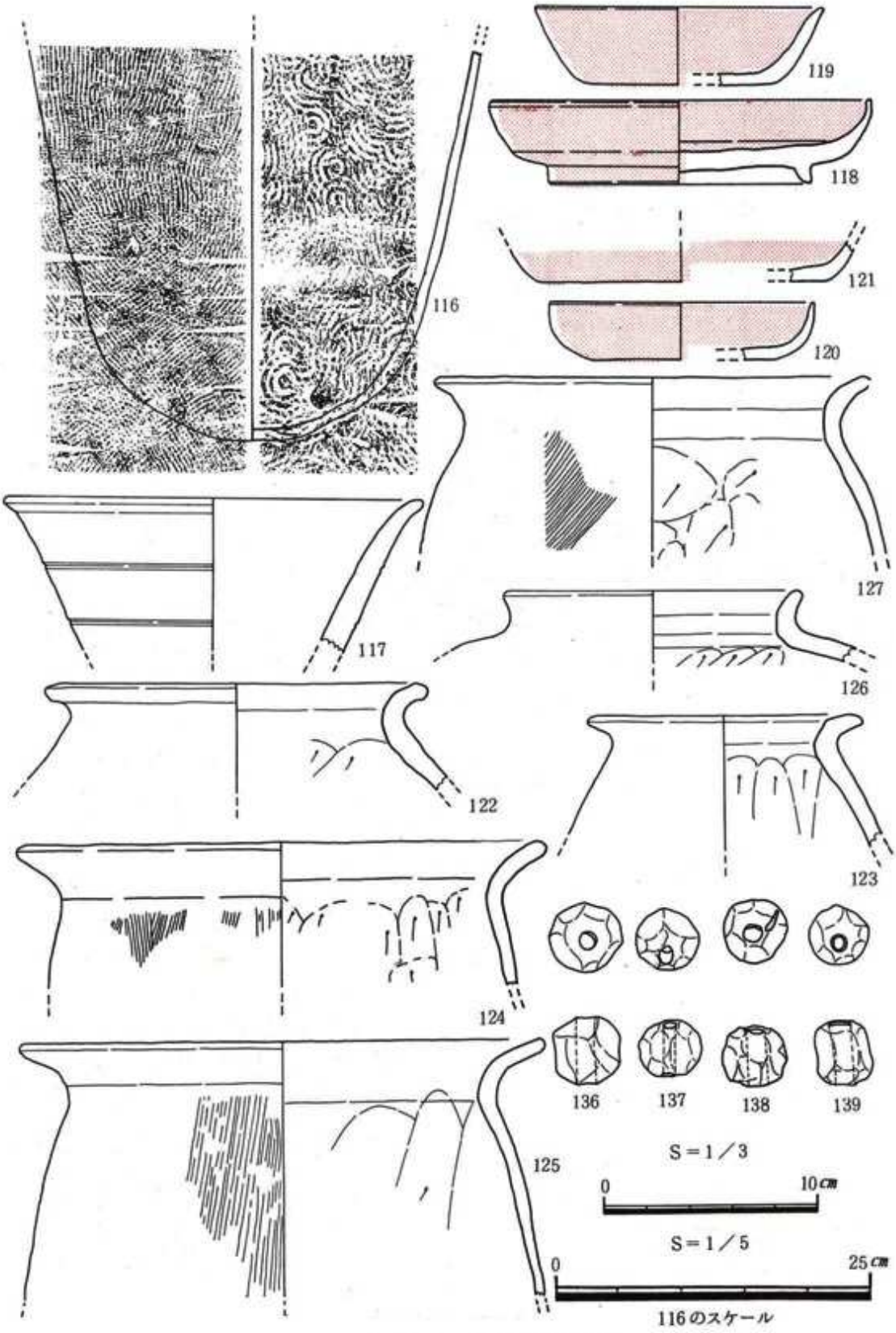
第15図　E区各層出土遺物(1)



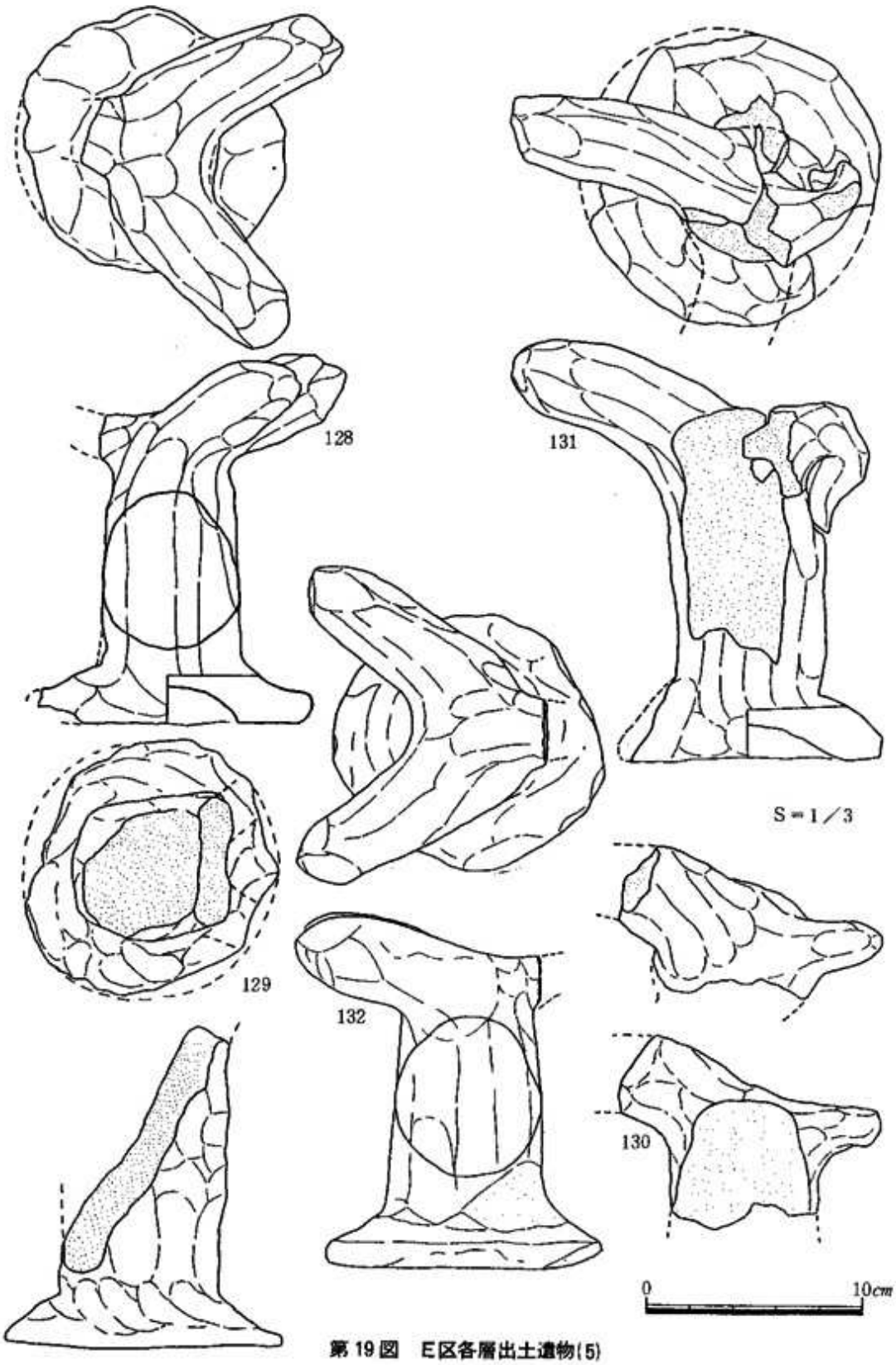
第16図　E区各層出土遺物(2)



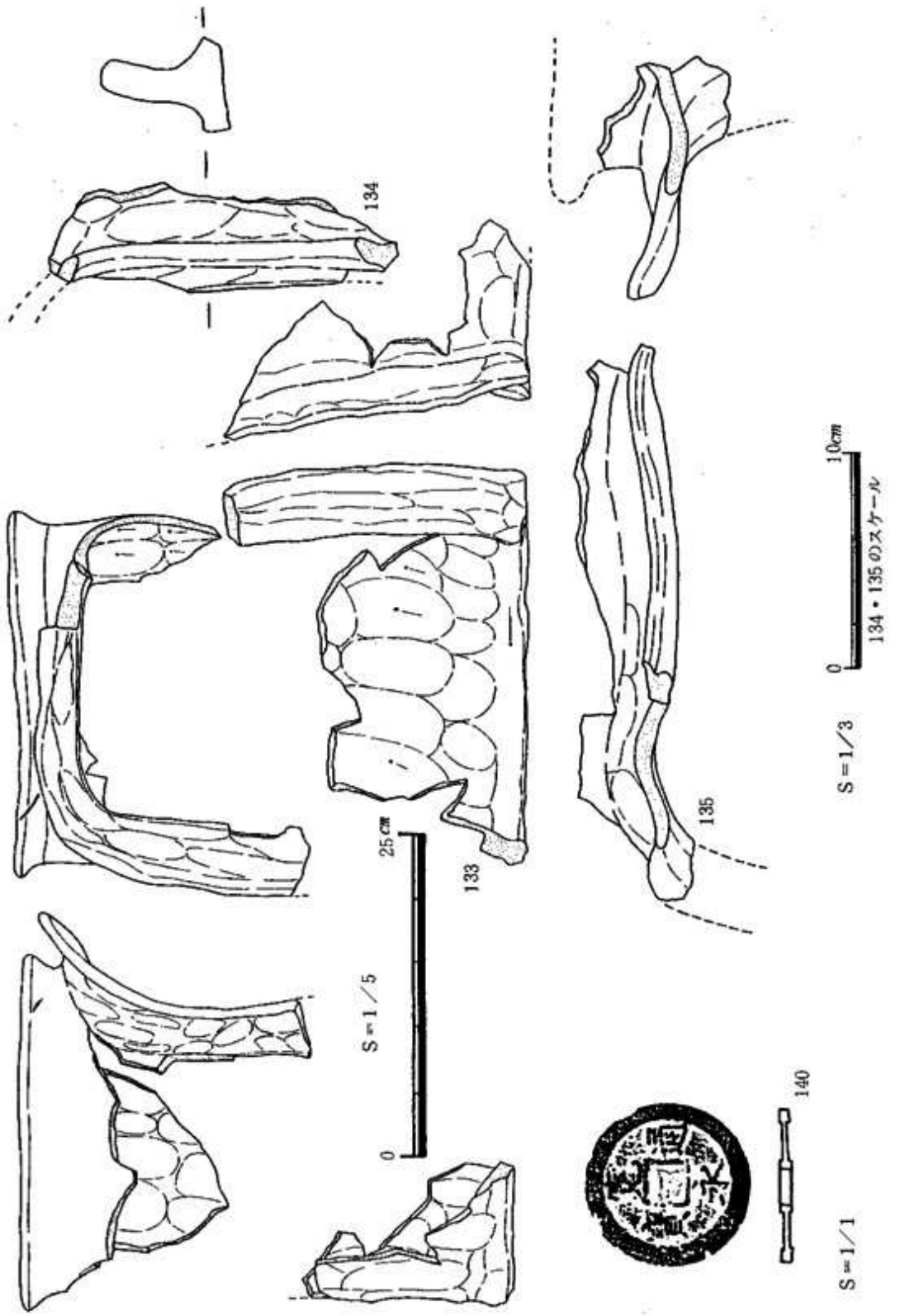
第17図　E区各層出土遺物(3)



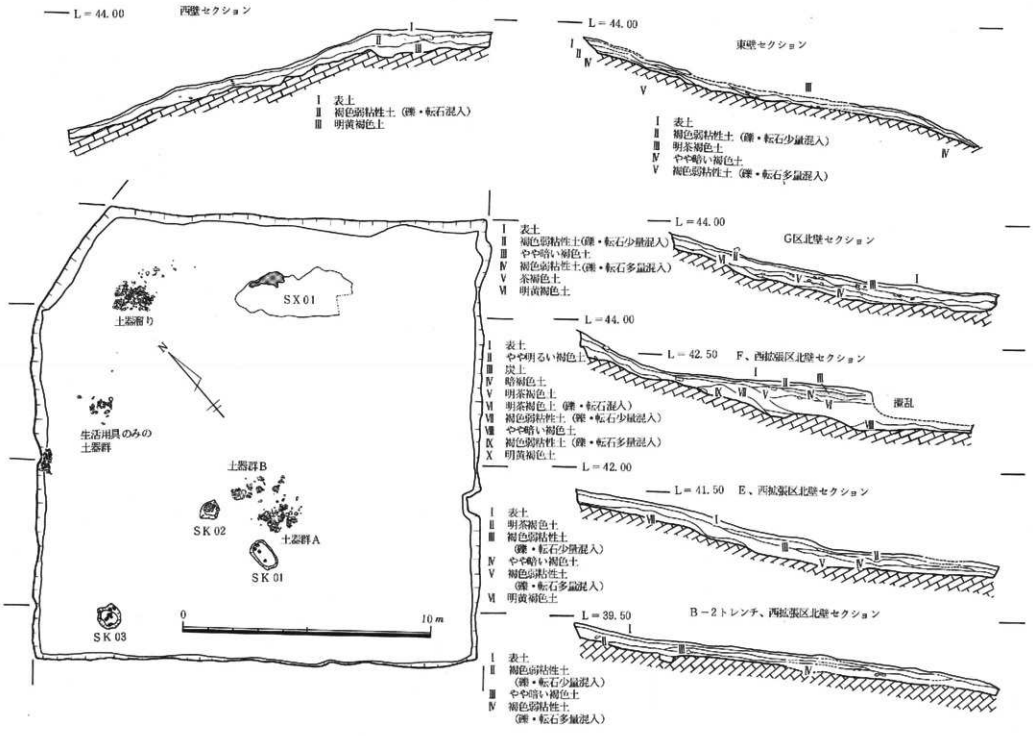
第18図　E区各層出土遺物(4)



第19図　E区各層出土遺物(5)

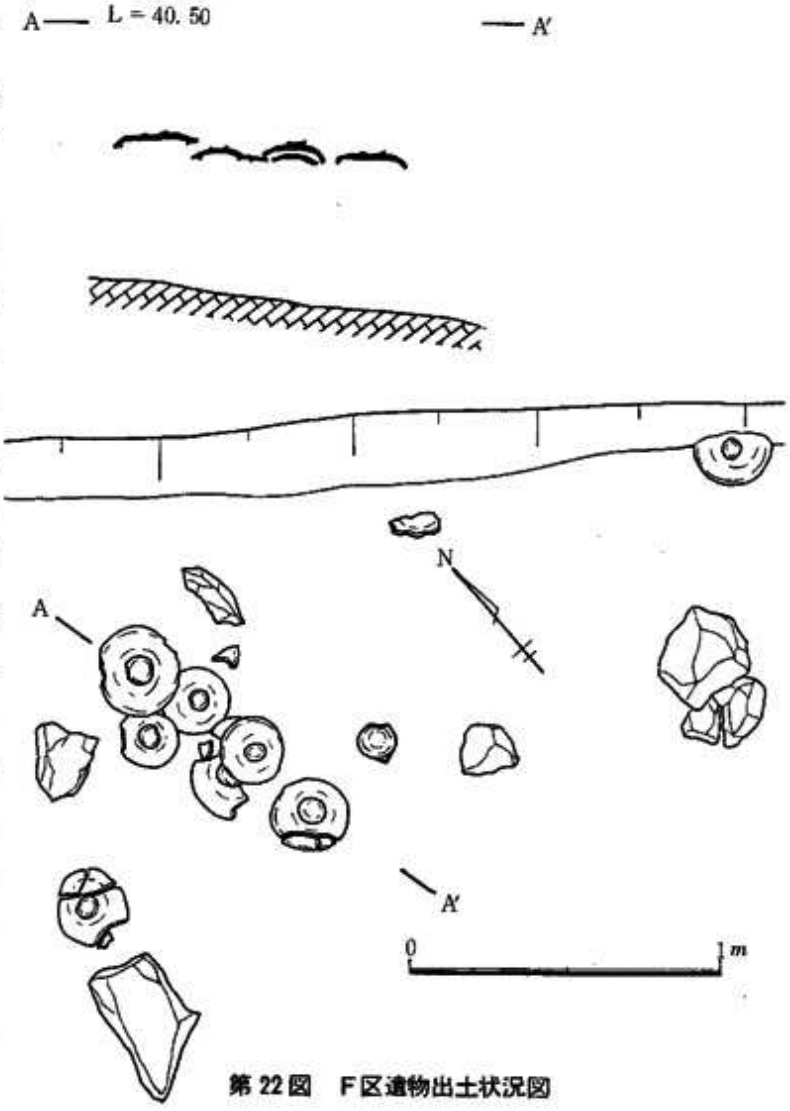


第20図　E区各層出土遺物(6)



第21図　B－2、E、F、G、西拡張区、東壁、西壁セクション図・平面図

口縁部内側にかえりを有する。外面に自然釉付着。色調は灰色，胎土は密である（柳浦編年1式）。144は口径13.4cm，器高2.7cmを測り，天井部は丸味を持ち，周辺をヘラ削りし，口縁部内側にかえりを有す。色調は淡黄褐色，胎土はやや粗く，焼成不良品である（柳浦編年2式）。145は口径15cm，器高3.2cmを測り，天井部は丸味を持ち，周辺をヘラ削りし，口縁部内側にかえりを有す。色調は淡青灰色，胎土はやや粗く，軟質である（柳浦編年1式）。146は口径14.6cm，器高3.1cmを測り，天井部は平たく，周辺をヘラ削りし，口縁部は屈曲して下る。重ね焼き痕有り。色調は内面紫灰色，外面濃青灰色，胎土は密である（柳浦編年3式）。周辺からの出土遺物は須恵器の高台付坏2点，輪状つまみの坏蓋2点である。147，148は高台付坏の底部である。147は静止糸切り後ナデ，ほぼ垂直にドる高台を付す。148はヘラ切り後ナデ，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸びる。149，150の天井部は丸味を持ち，周辺をヘラ削りし，口縁部内側にかえりを有す。



第22図　F区遺物出土状況図

遺構の性格については不明である。時期は7世紀中より8世紀中までと思われる。

各層出土の遺物について

出土遺物は，第2層より須恵器の坏蓋，盤，壷，鉢，紡錘車，土師器の小型土製支脚，甕，竈，土玉がある。第5層より須恵器の坏蓋，高台付坏，坏身，盤，甕，壷，鉢，土師器の壷，

竈，土玉，黒曜石片がある。第６層より須恵器の鉢，土師器の竈，土玉がある。

紡錘車（151）は上端径2.8cm，下端径5cm，器高3.3cmを測り，ナデ調整が施されている。高台付坏（152）は底部静止糸切り後回転ナデ，短い高台を付し，体部は直線的に伸びる。153は底部静止糸切り後丁寧なナデ，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸び，口縁部付近で垂直に上る。154は底部ヘラ切り，長めの外八の字形の高台を付し，体部はゆるやかに内彎して伸び，口縁端部付近で屈曲する。外面体部にヘラ記号有り。155は底部ヘラ切り，外八の字形の高台を付し，体部はゆるやかに内彎して伸び，口縁部はほぼ垂直に上る。外面底部にヘラ記号有り。坏蓋（156）は天井部に輪状つまみを有し，口縁部は屈曲して下る。盤（157）は底部ヘラ切り，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸びる。坏身（158）は底部ヘラ切り後ナデ，体部は内彎して伸び，口縁部付近に薄い沈線を１条施す。内面底部に刺突旗有り。159は底部静止糸切り，内彎して伸び，口縁部付近にくびれを有す。甕（160）は底部ヘラ切りで平ら。体部最大径付近に１条の沈線を施し，円孔透しを有す。口頸部は外傾して伸び，１条の沈線を付す。壺（161）は底部ヘラ切り後ナデ，器高の２分の１までをハケ目，その上４分の１を平行叩き，内面を叩き後ヘラ削り，他は横ナデ。162は小形壺型土器である。底部ヘラ切り，周辺をヘラ削りし，内彎して伸び，口縁部付近にくびれを有す。163は鉢の底部である。底部周辺を横ナデ後，格子状叩きを施している。164の鉢は口縁部が内傾している。165は土師器の壺の口縁部である。166，167は，竈である。166の口縁部はゆるやかに外反して開き，焚口部の廂は大きく外上方に伸びる。小形土製支脚（168）の底部は平らで，中心軸は一方に傾いている。三枝は欠損している。169～175は丸形の土玉である。176は黒曜石片である。

＜G　区＞

急斜面からやや平坦な面に移る場所に設定した15×６ｍのグリッドである。

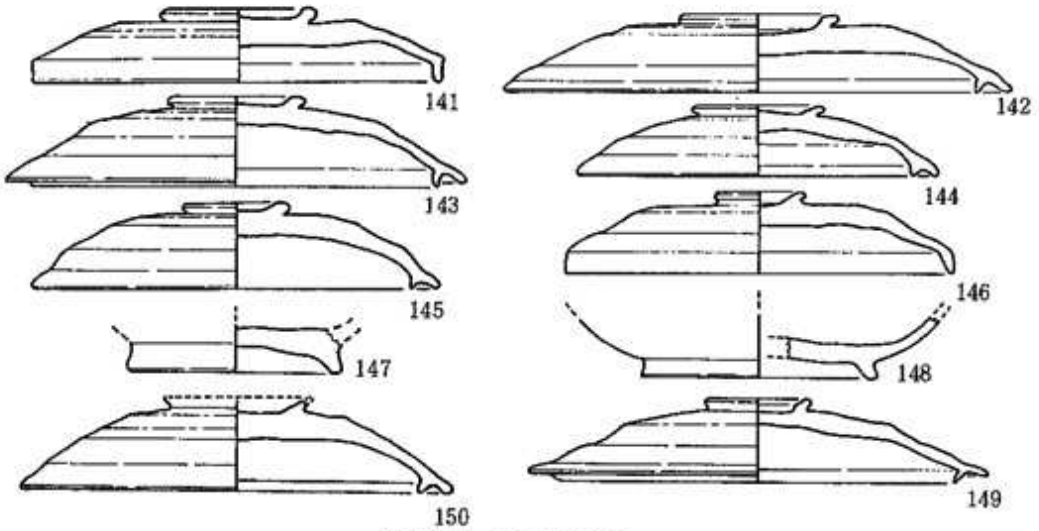
土層について（第21図）

表土層８～25cm，第２層褐色弱粘性土（礫，転石少量混入）14～36cm，第３層やや暗い褐色土10～34cm，第４層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）７～29cm，第５層茶褐色土８～17cm，第６層明黄褐色土６～31cmを測り，第７層赤褐色土で地山に至る。

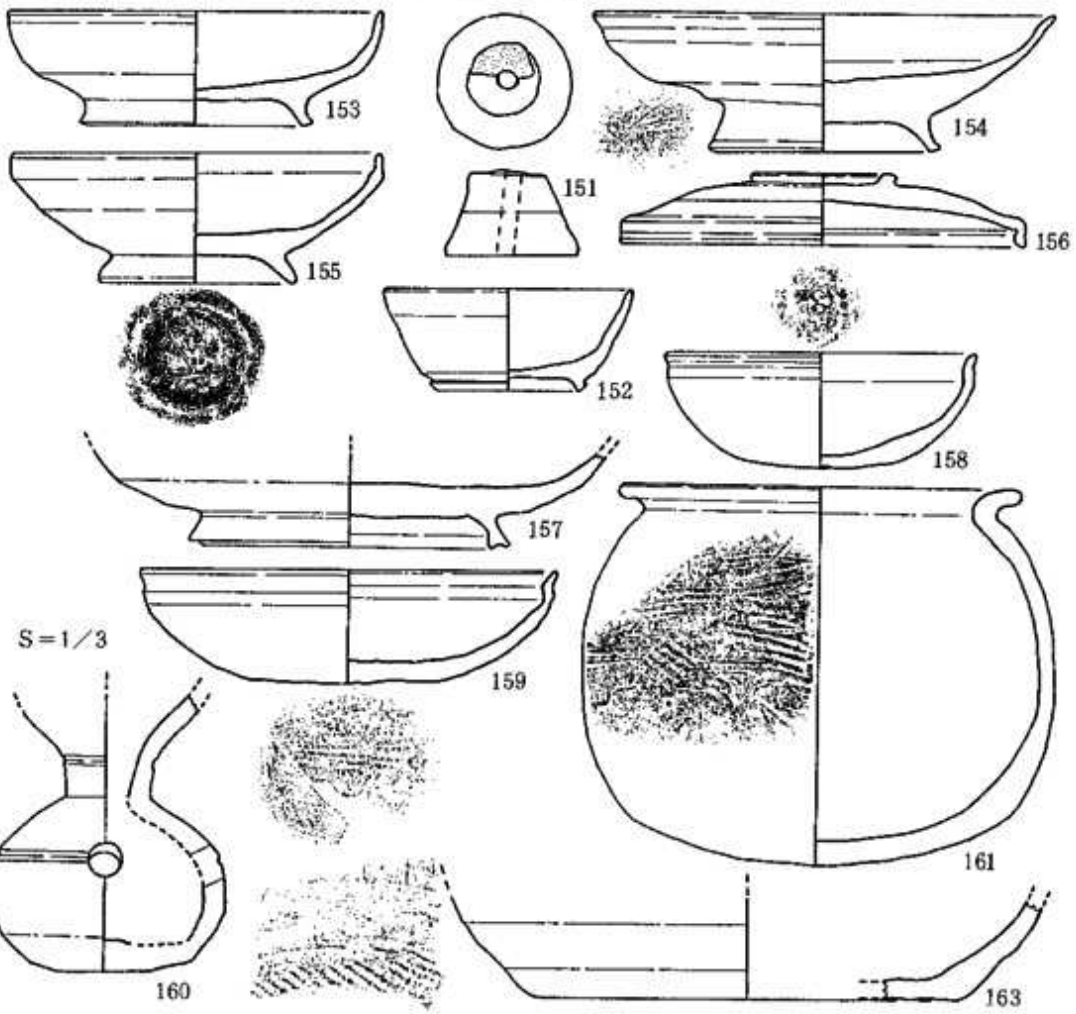
遺構について

検出した遺構は，焼土（ＳＸ０１），土器溜りであった。

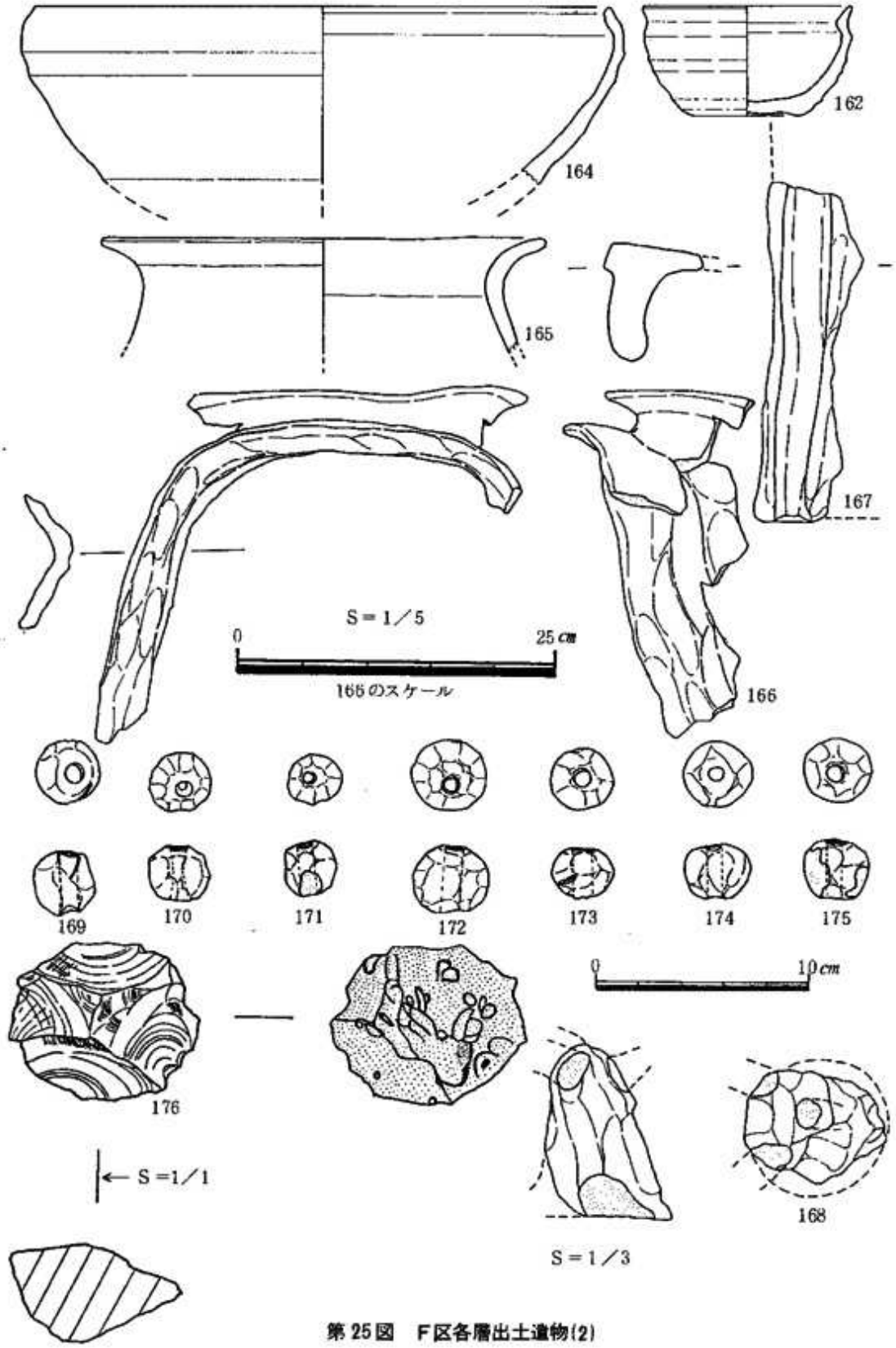
ＳＸ０１（第26図）：第３層で，調査区南端にＦ区と接して範囲4.8×2.1ｍ，厚さ６～23cmの炭土混りの焼土の塊が堆積していた。但し東端は撹乱を受けていたため，その先は検出できなかった。焼土の塊は１層下をやや掘り窪めた後に堆積した状況を示すことから，何ら



第 23 図　F 区出土遺物



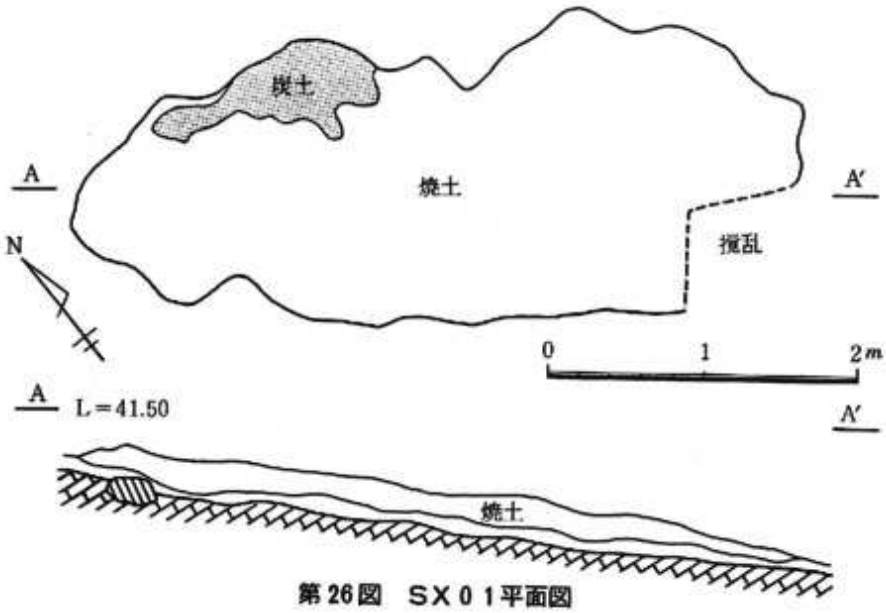
第 24 図　F 区各層出土遺物(1)



第25図　F区各層出土遺物(2)

かの意図を以ってこの場で火を焚いたものと思われる。遺物は検出されなかった。

土器溜り（第27図）：第4層上面



第26図　SX01平面図

で，急斜面と平坦面との境に流れ込みによると見られる遺物の堆積があった。出土遺物は須恵器の高坏，鉢，高台付坏，坏蓋，坏身，壺，土師器の土玉があった。高坏（177）の脚部は八の字に開き，裾部付近で屈曲して下り端部に至る。脚部には2方向に台形の2段透しがあり，下の透し上部付近に薄い沈線を1条施す。色調は青灰色，胎土は密である。178の脚部は八の字に開き，裾部で外方向に伸びた後，鋭い稜を成し，屈曲して垂直に下る。脚部には1方向にヘラによる切込みが貫通している。179の脚部は八の字に開き，裾部でやや短く外方向に伸び，屈曲して下る。180は鉢の口頸部である。高台付坏（181）は底部静止糸切り後回転ナデ，短い高台を付し，体部はほぼ直線的に伸び，口縁端部に至る。182は底部静止糸切り後回転ナデ，ほぼ垂直に下る高台を付し，体部は内彎して伸び，口縁部はほぼ垂直に上る。183は底部ヘラ切り後回転ナデ，外八の字形の高台を付し，体部はほぼ直線的に伸び，口縁部は垂直に上る。184は底部ヘラ切り，外八の字形の長い高台を付し，体部は内彎して伸び口縁端部に至る。外面底部にヘラ記号有り。185は内面底部にヘラ記号有り。輪状つまみの坏蓋は口縁部内側にかえりを有するもの（186，187）と口縁部付近で屈曲するもの（188）がある。188は内面天井部にヘラ記号有り。189の天井部は丸味を持ち，口縁部内側にかえりを有し，内面天井部にヘラ記号有り。190の天井部は平らで，口縁部内側にかえりを有す，つまみ内にヘラ記号有り。191は内面天井部にヘラ記号有り。坏身（192）の底部はやや丸く，粘土塊付着。口縁部付近に薄い沈線を4条施し，口縁端部付近で外反する。193の底部はやや丸く，内彎して伸び，口縁部にくびれを有す。外面底部にヘラ記号有り。壺（194）の口頸部は外反して伸び，口縁端部付近でやや垂直に上る。端部は鋭い。195～206は直径，器高ともに3㎝前後，重量14～36ｇの丸形の土玉である。207，208は径3.6

第27図　G区4層上面遺物出土状況図

段総図

cm，2.6cm，器高3cm，3.4cm，重量35.2g，20.7g，色調淡黄褐色の円筒型の土玉である。

第4層下面で南西隅に自然流水の経路と思ぼしき窪みに土器溜りが検出された。出土遺物は須恵器の土製支脚，横瓶，坏蓋，高台付坏，土師器の甕，竈，把手，土製支脚，甕，土玉である。

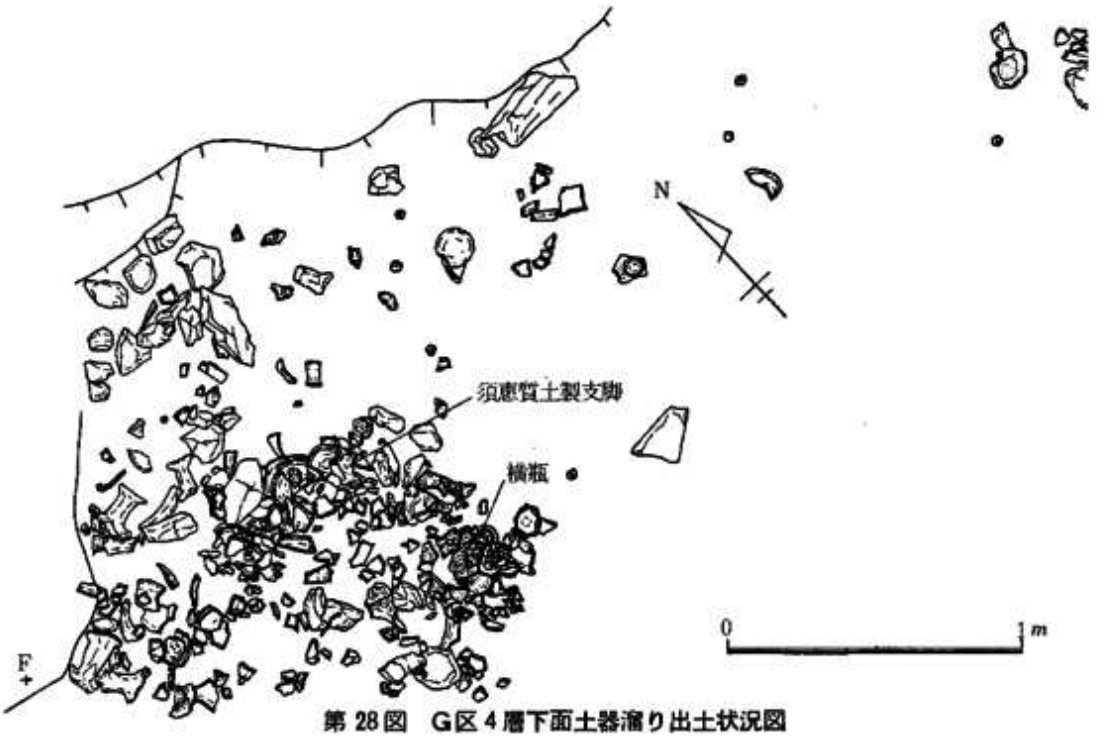
須恵質土製支脚(209)は器高9.5cm，頂部に三枝を有し，丸底である。横瓶（201）は内面円弧叩き，外面平行叩き，肩部は叩き後カキ目，口頸部は

横ナデ，色調は灰色，胎土は密である。坏蓋（211）は輪状つまみを有し，口縁部内側にかえりを有す。内面天井部にヘラ記号有り。高台付坏（212）は底部ヘラ切り後回転ナデ，外八の字形の高台を付す。内面底部にヘラ記号有り。213は底部ヘラ切り後回転ナデ，外八の字形の高台を付し，体部は直線的に伸び，口縁部付近で外反して端部に至る。内面底部に引掻き傷。214～219は甕である。220～225は土製支脚である。226は小型の甑の口縁部である。甕（227）は内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ。228～234は甕の口縁部である。壷（235）は内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ。236～241は直径，器高ともに3㎝前後，重量16～27ｇの丸型の土玉である。242は把手である。

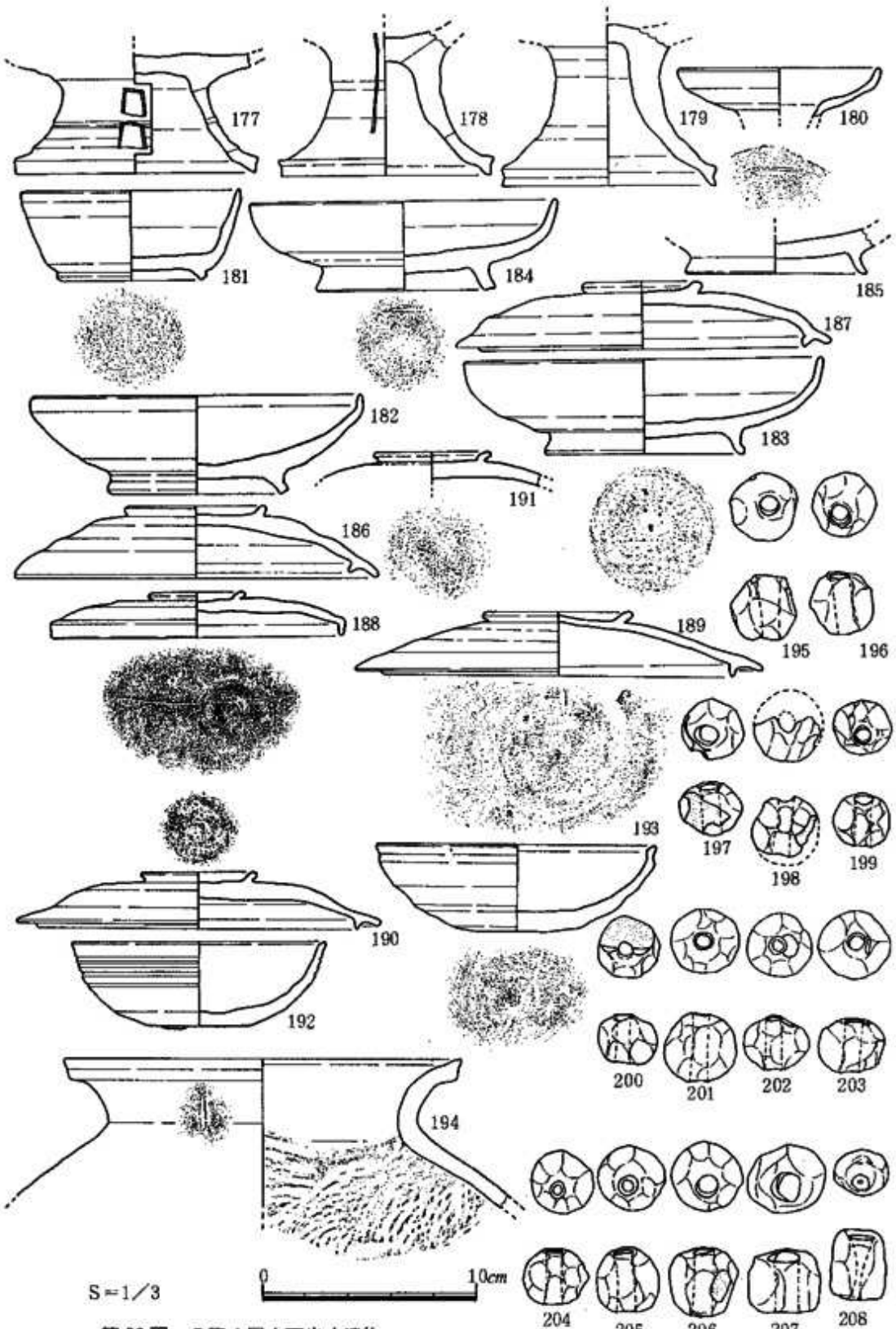
この遺構の性格としては，土器の出土状況及び土層の堆積状況からみて，斜面に投棄された土器が徐々に堆積していったと考えることには無理があり，上方斜面から土と共に出土位置へ流入してきたとみるのが自然であると考えられる。また，生活用具が相当数出土した内に非実用的な須恵質土製支脚，横瓶，甑，高坏，土玉といった祭祀に関わる遺物が混っているということは，調査区域外の山の斜面に祭祀を行った生活集団の住居址群が近接していたものと推察される。

各層出土の遺物について

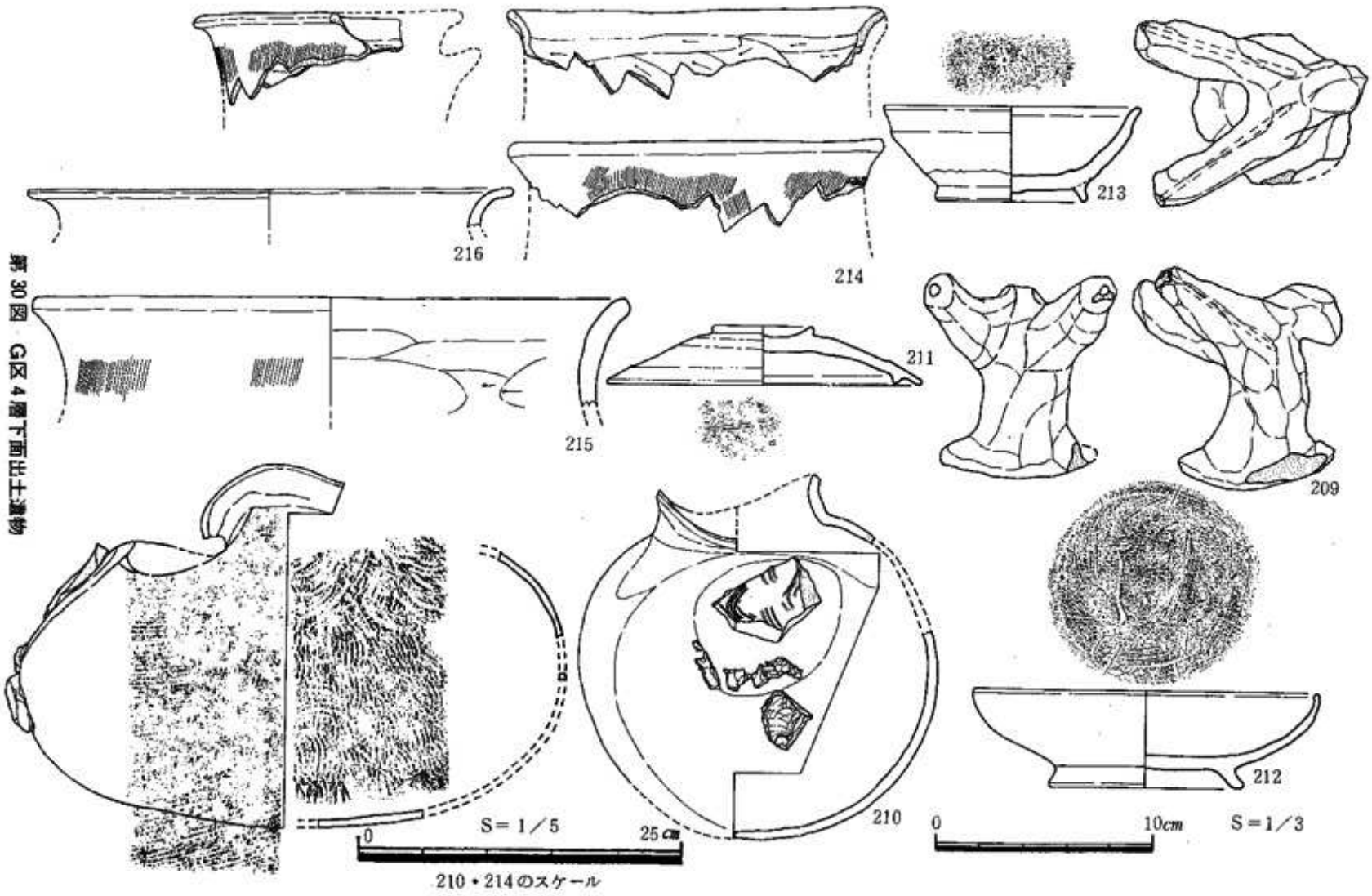
出土遺物は第2層より須恵器の坏身，坏蓋，土師器の甕，土玉がある。第3層より須恵器の坏蓋，高台付坏，土師器の甕がある。第4層より須恵器の坏身，坏蓋，高台付坏，高坏，



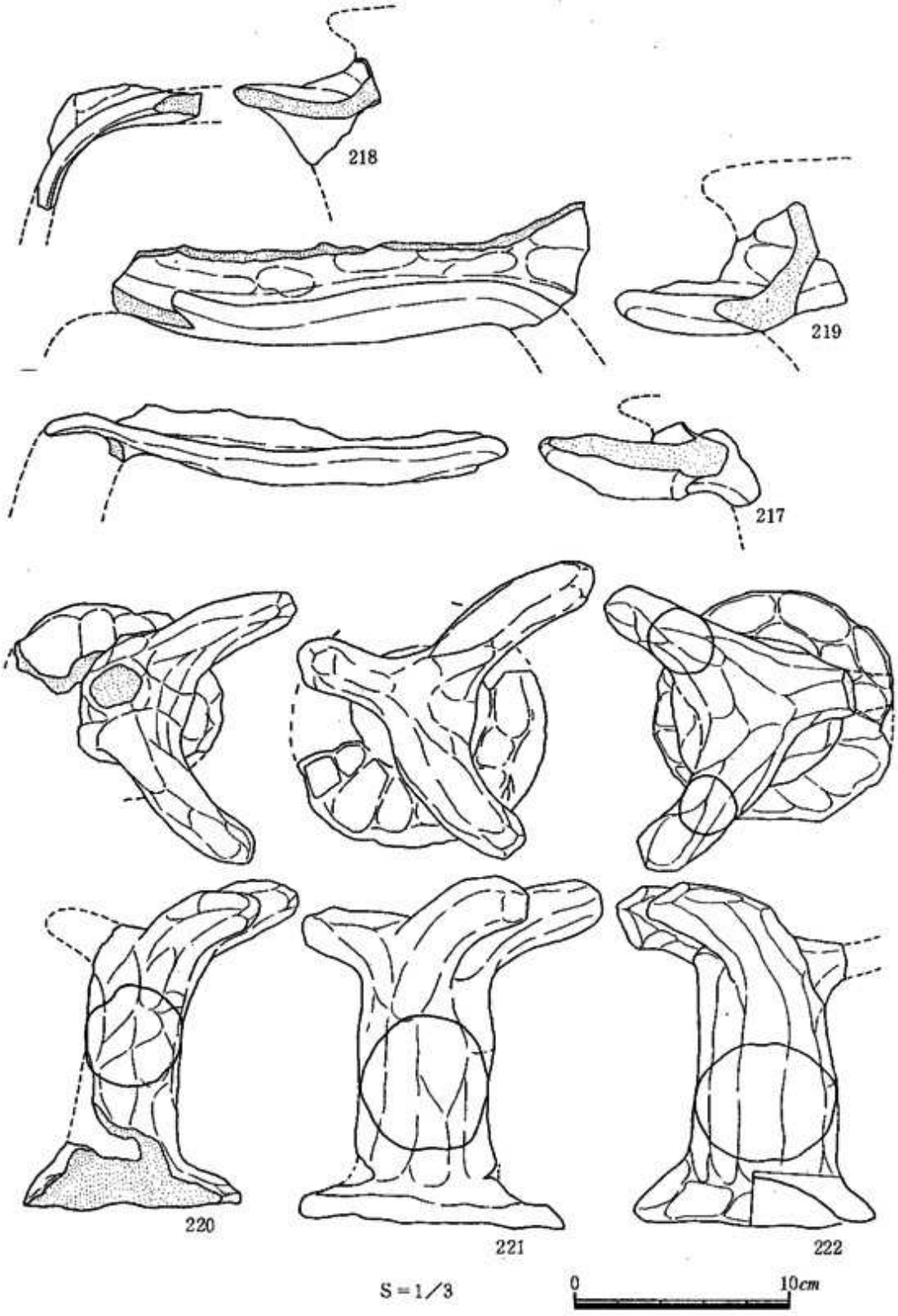
第28図　G区4層下面土器溜り出土状況図



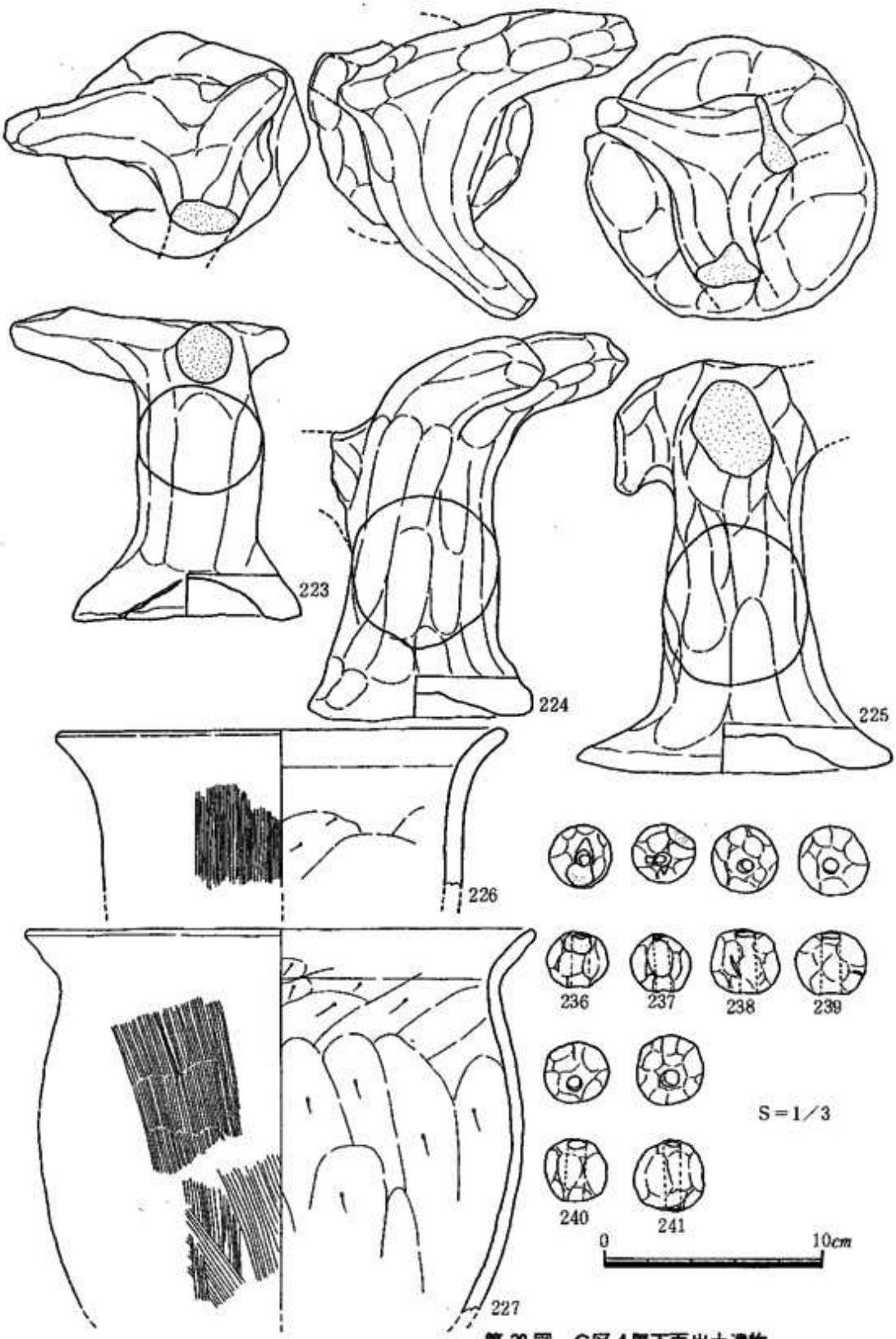
第29図　G区4層上面出土遺物



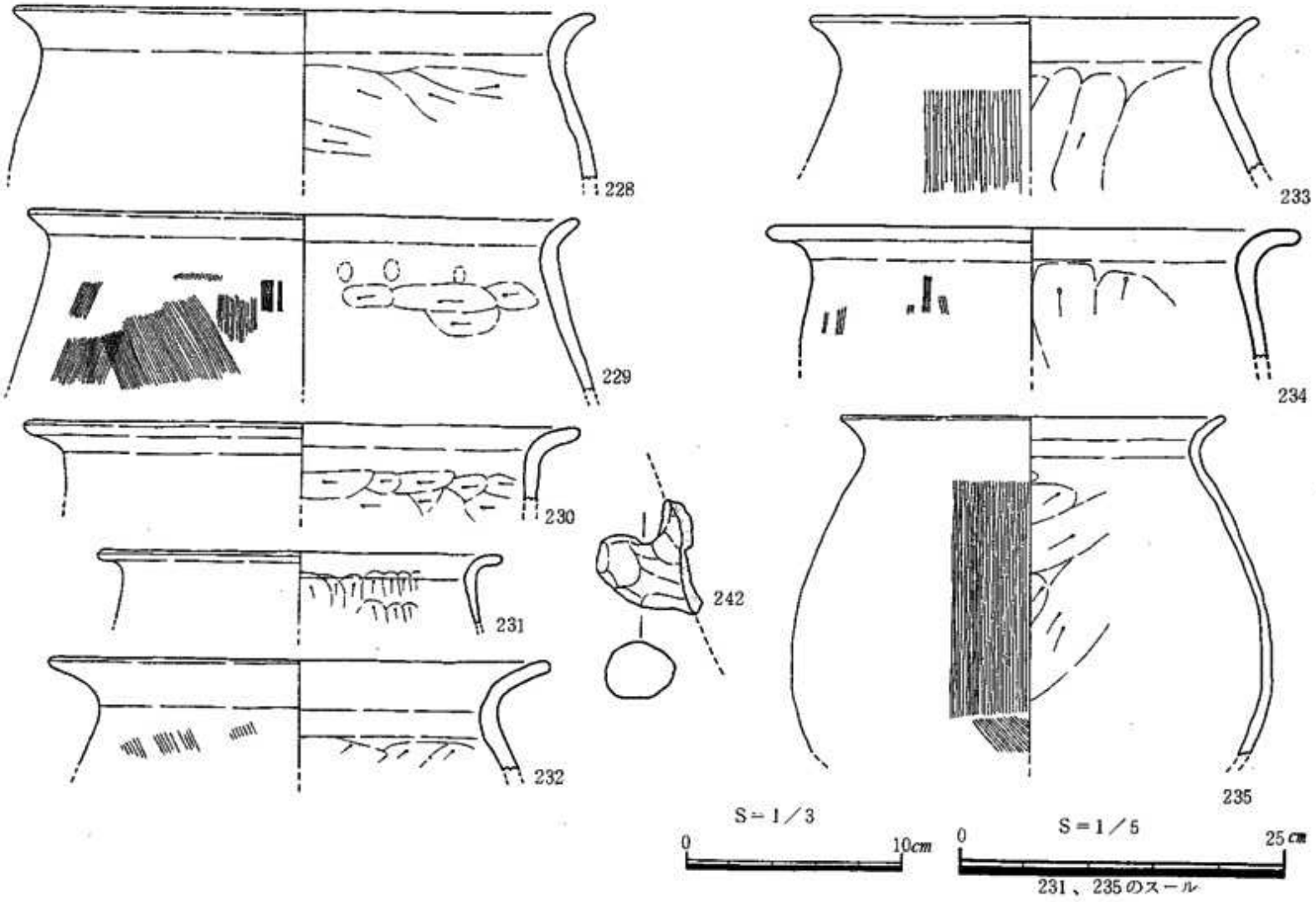
第30図　G区4層下面出土遺物



第31図　G区4層下面出土遺物



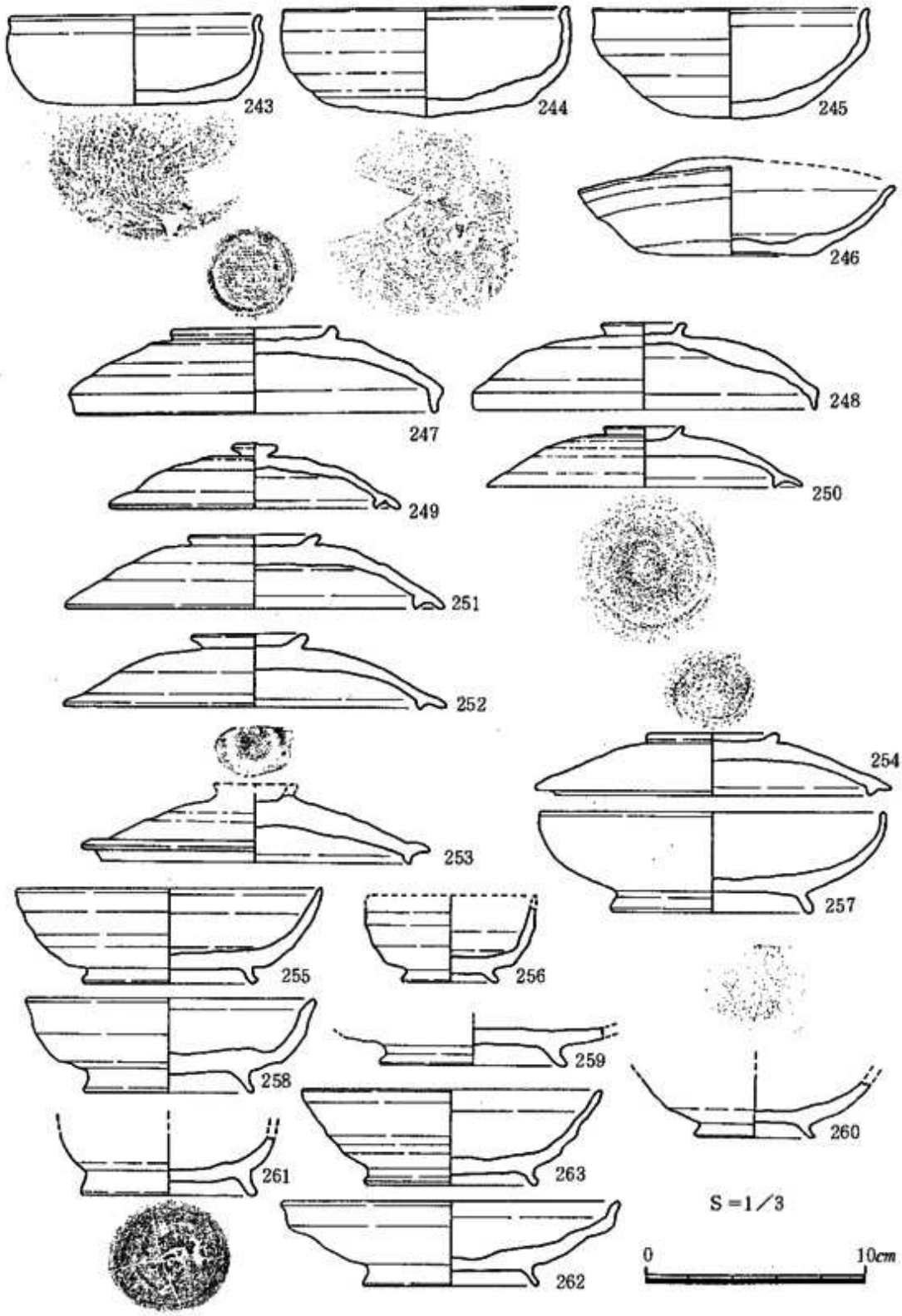
第 32 図　G区 4 層下面出土遺物



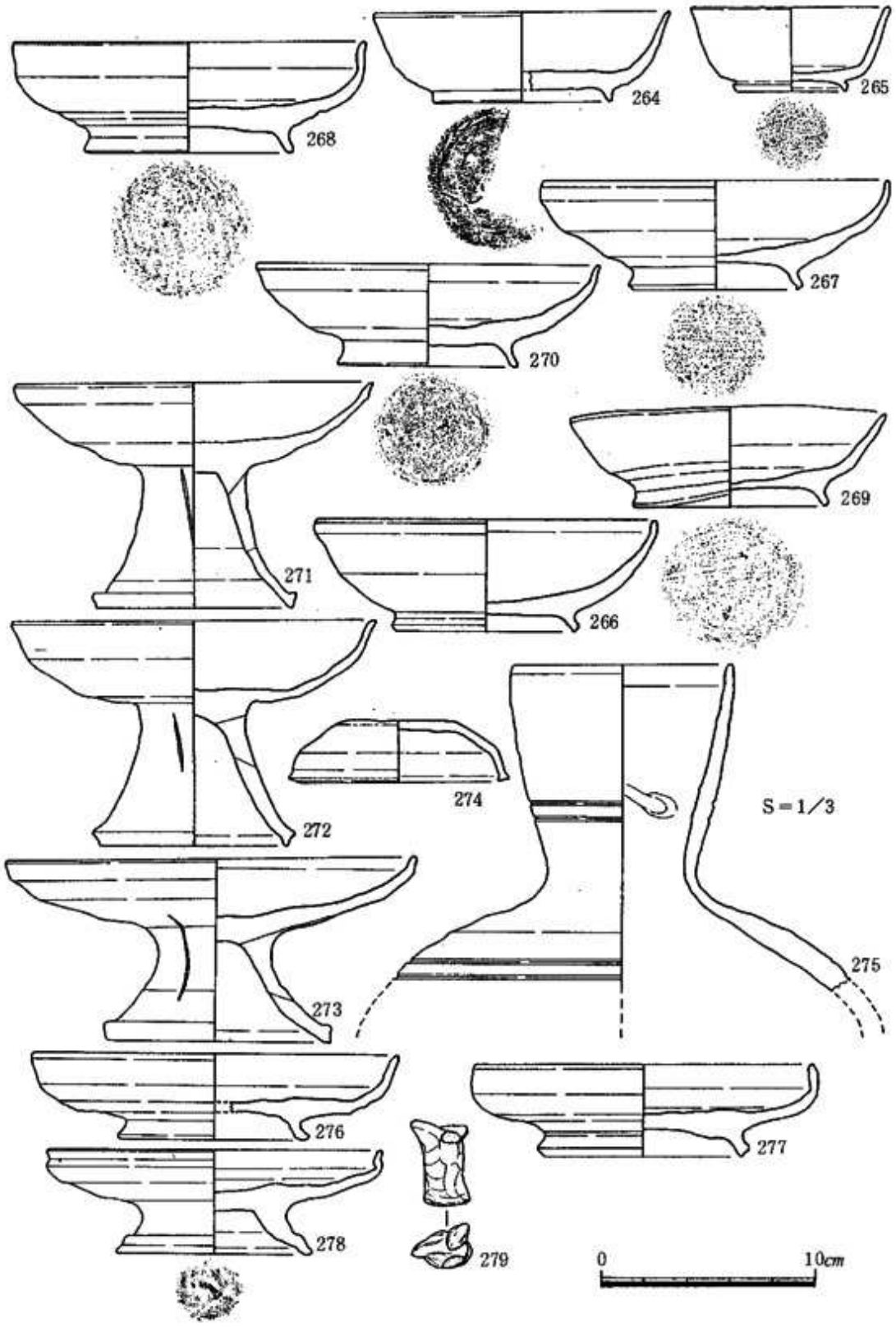
第33図　G区4層下面出土遺物

短頸壷の蓋，長頸壷，盤，低脚坏，模型支脚，土師器の竈，甕片がある。第5層より須恵器の円面硯，高坏，坩，鉢，高台付坏，鉢型土器，土師器の竈がある。

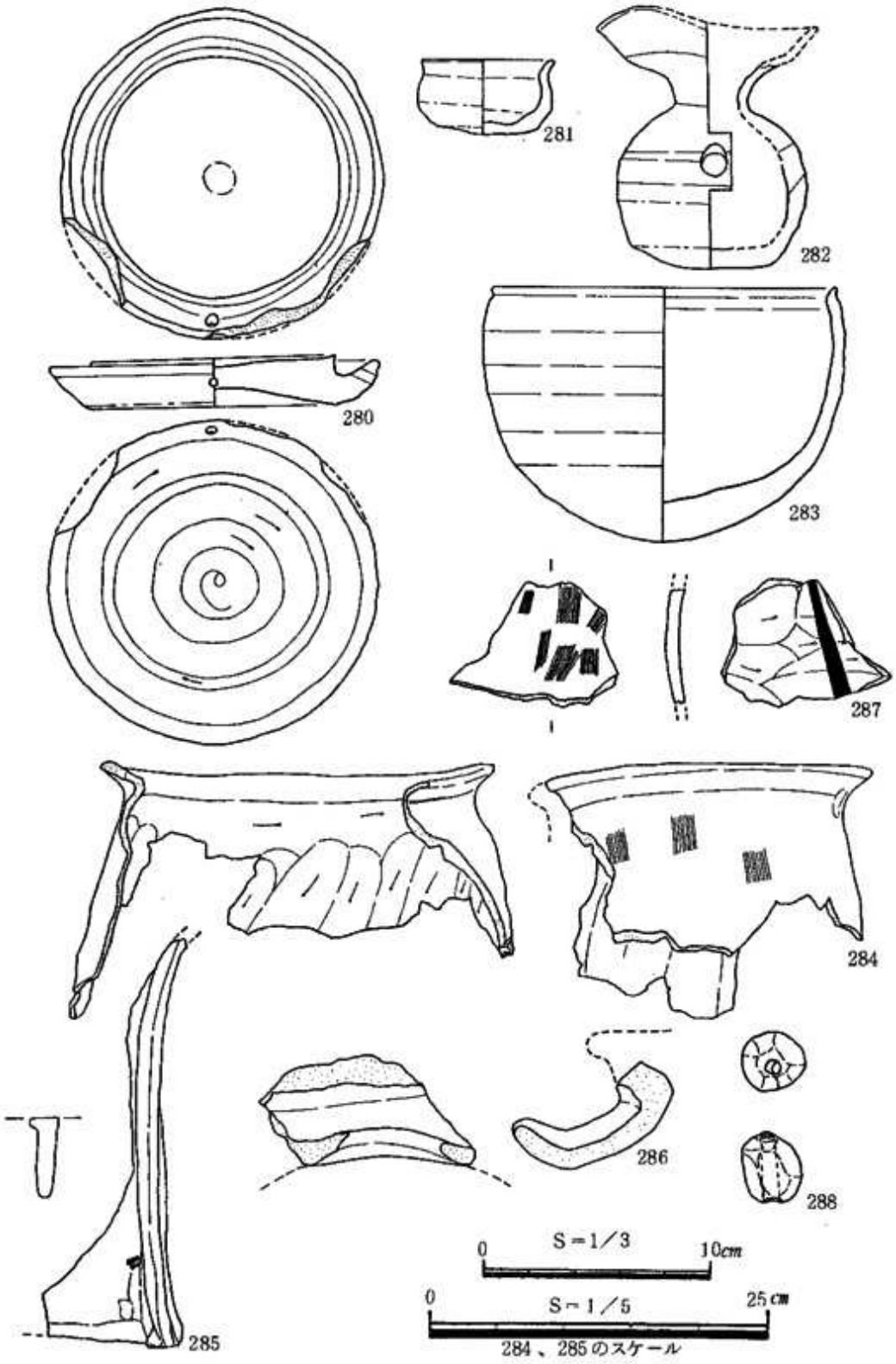
坏身（243，244）は底部回転糸切り，体部は内彎して伸び，口縁部付近にくびれを有す。245は底部ヘラ切り，内彎して伸び，口縁部付近にくびれを有す。246は底部ヘラ切り後ナデ，体部はほぼ直線的に伸び，口縁部付近で外反する。いびつである。坏蓋（247）は天井部静止糸切りでほぼ平ら，15.2㎝のつまみ径の輪状つまみを有し，口縁部は屈曲して下る。248は天井部は丸味を持ち，輪状つまみを有し，口縁部は屈曲して下る。249，250の天井部は丸味を持ち，249は擬宝珠状つまみを，250は輪状つまみを有し，周辺をヘラ削りし，口縁部内側にかえりを有す。250は内面天井部にヘラ記号有り。251～254は天井部に輪状つまみを有し，口縁部内側にかえりを有す。253はつまみ周辺にカキ目，つまみ内にはヘラ記号有り。254はつまみ内にヘラ状工具による刺突痕有り。高台付坏（255，256）は底部ヘラ切り後ナデ，やや内側に外八の字形の高台を付し，体部はほぼ直線的に伸びる。257は底部ヘラ切り後ナデ，底端部に外八の字形の高台を付し，内彎して伸び，口縁部付近で垂直に上る。258～261は底部ヘラ切り後ナデ，内側に外八の字形の高台を付す。260は内面底部に，261は外面底部にヘラ記号有り。262は底部ヘラ切り後回転ナデ，外八の字形の高台を付し，体部は直線的に伸び，口縁部付近で外反する。263～265は底部ヘラ切り後ナデ，やや垂直に下る高台を付し，体部はほぼ直線的に伸びる。外面底部に264は爪痕，265はヘラ記号有り。266は底部ヘラ切り後ナデ，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸び，口縁部は垂直に上る。267は底部静止糸切り後ナデ，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸び，口縁端部に至る。268は底部静止糸切り後ナデ，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸び，口縁部付近でほぼ垂直に上る。269は底部静止糸切り，外八の字形の高台を付し，体部は直線的に伸び，口縁端部に至る。270は底部静止糸切り，底部内側に外八の字形の高台を付し，体部はほぼ直線的に伸び，口縁部付近で屈曲して端部に至る。271～273は脚部の2方向にヘラによる切込みが貫通している高坏である。274は短頸壷の蓋である。天井部ヘラ切り，周辺ヘラ削り，他は横ナデ。長頸壷（275）の肩部と口頸部に各々2条の沈線を施す。276，277は盤である。底部静止糸切り，外八の字形の高台を付し，体部は内彎して伸び，276は口縁部付近でやや外反して端部に至る。277は口縁部付近で内傾する。低脚坏（278）の外面底部にヘラ記号有り。模型支脚（279）の底部は平坦，頂部の三枝のうち一枝が欠落。280は円面硯である。海部外堤に直径4.5㎜の円孔が1箇所焼成前に穿れている。底部回転ヘラ削り，他はナデ調整。陸部にやや滑沢有り。坩（281）は底部ヘラ切り後ナデ，周辺をヘラ削り，他は横ナデ。鉢（282）は底部ヘラ切り後ナデ，周辺をヘラ削



第34図　G区各層出土遺物(1)



第35図　G区各層出土遺物(2)



第36図　G区各層出土遺物(3)

り，体部最大径付近に円孔透しを有し，口頸部は外傾して伸びた後，屈曲して伸びる。283は丸底の鉢型土器である。284～286は，竈である。284は内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ，口縁部に指頭圧痕有り。287は内面に墨跡を残す甕片である。288は口径2.8cm，器高3.1cm，重量19.2g，色調は淡黄褐色～黒褐色の丸型の土玉である。

＜西拡張区＞

B－2～G区各々から3m拡張したグリッドである。

土層について（第21図）

B－2拡張区では，表土層7～15cm，第2層褐色弱粘性土（礫，転石少量混入）12～40cm，第3層やや暗い褐色土4～16cm，第4層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）3～18cmを測り，第5層赤褐色土で地山に至る。

E拡張区では，表土層7～16cm，第2層褐色弱粘性土（礫，転石多量混入）15～25cm，第3層明黄褐色土5～21cmを測り，第4層赤褐色土で地山に至る。

F拡張区では，表土層11～31cm，第2層褐色弱粘性土（礫，転石少量混入）15～44cm，第3層明黄褐色土9～41cmを測り，第4層赤褐色土で地山に至る。

遺構について

検出された遺構は，生活用具のみの土器群と土壙（ＳＫ０３）である。

生活用具のみの土器群（第37図）：F拡張区，第3層で東側の3×2.3mの平坦面に0.7×2mの範囲に土器が集中して検出された。出土遺物は，土師器の土製支脚，甑，壺，甕である。

甑（289）は底部に円孔が4穴穿れている。内面ヘラ削り，外面ハケ目調整。290は口縁部である。外面に焼け痕有り。壺（291，292）は内面ヘラ削り，外面ハケ目，他は横ナデ。293は内面ナデ，外面ハケ目調整。外面に焼け痕有り。甕（294，295）は内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ。296は土製支脚の頂部である。周辺より栃浦編年2式に属する坏蓋（297）が出土している。

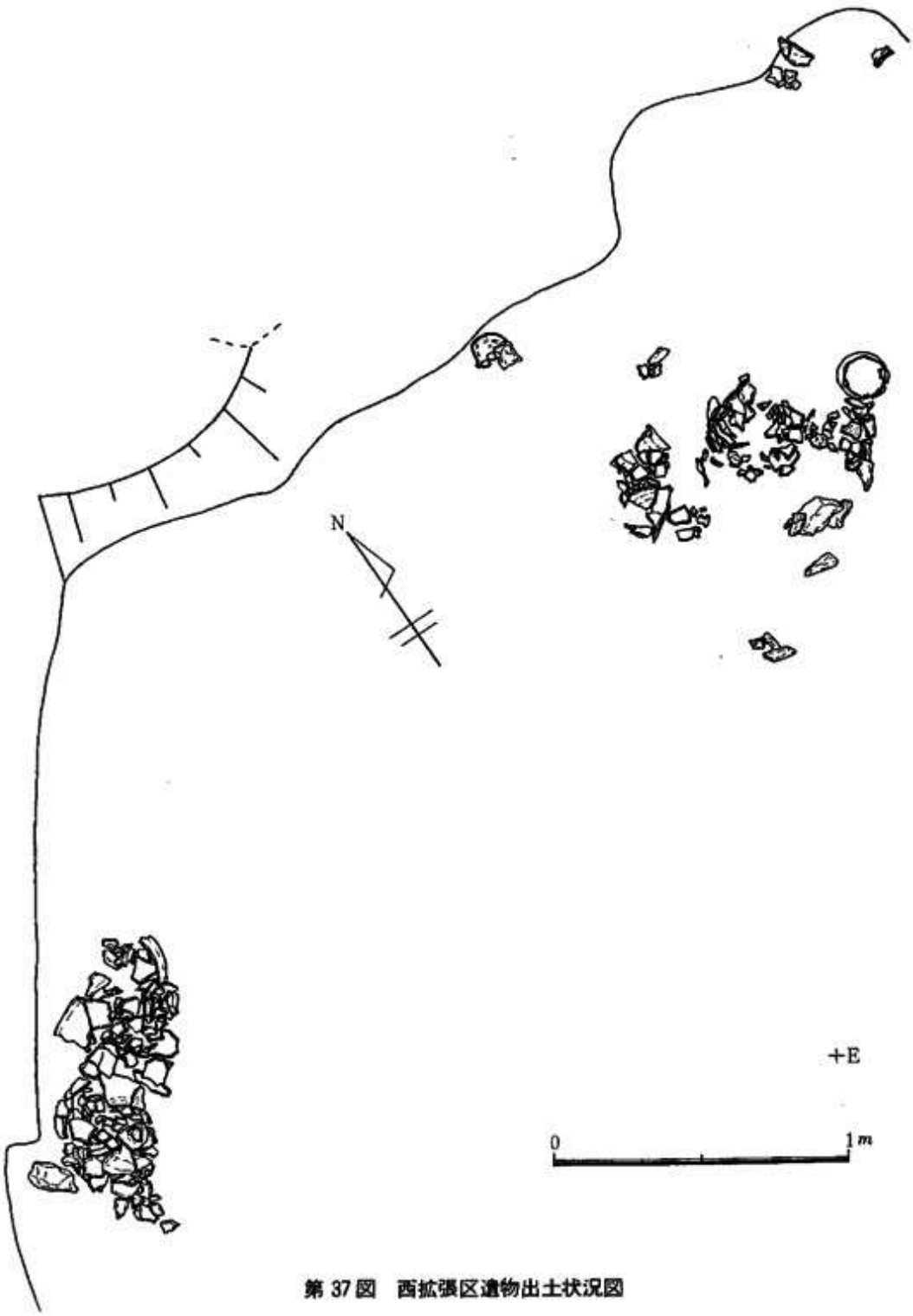
F拡張区とE拡張区の境，平坦面から斜面に変わる地点の0.7×1mの範囲に地山面から浮いた状態で遺物が集中して検出された。出土遺物は土師器の壺，甕，竈である。

甕（298）は内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，口縁基部に横のハケ目，他は横ナデ。壺（299）は内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ。外面に煤付着。竈（300）は内面ヘラ削り，外面ハケ目調整，他は横ナデ。

遺構の性格は，ピットの検出はなかったものの，平坦面での生活用具の出土から住居址の可能性が考えられる。時期は7世紀末から8世紀初めという幅が考えられる。

ＳＫ０３についてはＢ－２トレンチの項を参照されたい。

各層出土の遺物について



第 37 図　西拡張区遺物出土状況図

出土遺物は，Ｂ－２拡張区では第３層より須恵器の坏蓋，第４層より須恵器の鉢がある。Ｅ拡張区では第２層より須恵器の高坏，壺，甕，鉢，坏蓋がある。Ｆ拡張区では第２層より須恵器の鉢，壺，甕，第３層より須恵器の高台付坏，土師器の竈がある。

高坏（301）は脚部の２方向にヘラによる切り込みが貫通している。高台付坏（302）は底部ヘラ切り，外八の字形の高台を付す。外面底部にヘラ記号「四」有り。303は底部回転糸切り，外八の字形の高台貼付け後ヘラ状工具で調整。304は底部ヘラ切り後回転ナデ，外八の字形の高台を付し，体部はほぼ直線的に伸び，口縁端部に至る。坏蓋（305）は天井部に輪状つまみを有し，周辺にヘラ削りを施す。壺（306）は内面底部を円弧叩き，外面体部を平行叩き，底部付近を叩き後カキ目調整，他は横ナデ。307は底部静止糸切り。甕（308）は口縁部に１条の沈線を施す。309は内面円弧叩き，外面平行叩き調整。内面に継目痕有り。鉢（310）は底部回転ヘラ削り。311は全高の下３分の１までを回転ヘラ削り，口縁部は横ナデ。312は体部最大径付近に１条の沈線を施し，把手を付す。内面横ナデ，外面カキ目調整。313は竈の焚口部である。

＜Ｈトレンチ＞

池ノ奥窯跡とＦ区の中間に設定した15×２ｍのトレンチである。８～25cmで地山に至る。遺構，遺物は皆無である。

＜Ｉトレンチ＞

Ｈトレンチの上方，標高43ｍ付近に長方形の大きな隆起があり，表土に３×2.5ｍの岩が露出していたため，方墳を想定して，斜面に12×２ｍのトレンチを設定した。５～13cmで地山に至る。遺構は検出されなかった。

出土遺物について

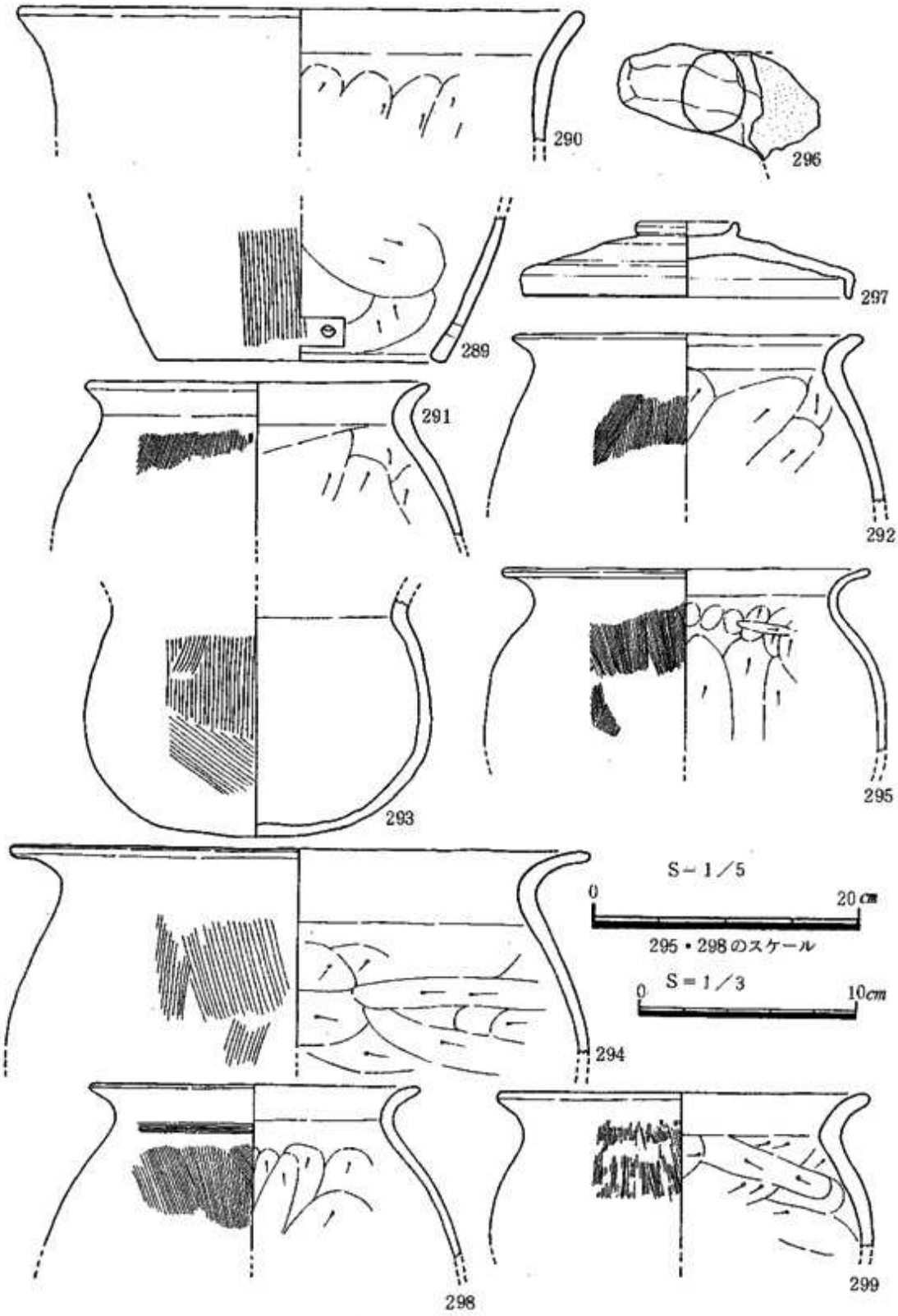
出土遺物は須恵器の甕，坏蓋，高台付坏，坏身の破片である。この内，図に示したものは高台付坏（314）で底部ヘラ切り，外八の字形の高台を付す，色調は内面青灰色，外面暗青灰色，胎土は密である。柳浦編年１式に属する。坏身（315）は底部回転糸切り，体部はほぼ直線的に伸び，口縁部はやや外反する。柳浦編年５式に属する。（第40図）

＜Ｊトレンチ＞

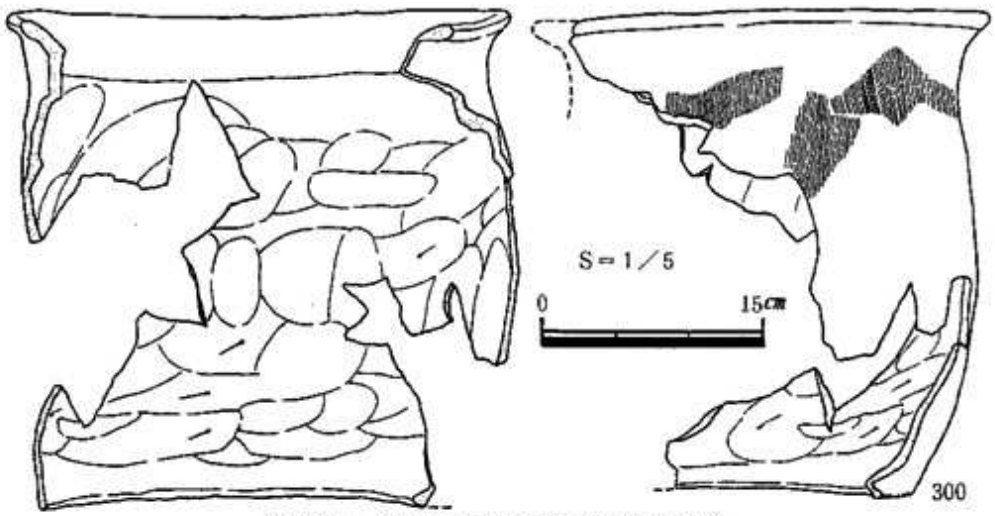
Ｉトレンチ上部西側に５×３ｍの拡張トレンチを設定した。４～38cmで地山に至る。遺構は検出されなかった。

出土遺物について

出土遺物は須恵器の坏身，坏蓋，甕の破片である。この内，図に示したものは，坏身（316）で底部ヘラ切り後回転ナデ，内彎して伸び，口縁部で内傾する。色調は灰色，胎土



第 38 図　F 西拡張区生活用具のみの土器群

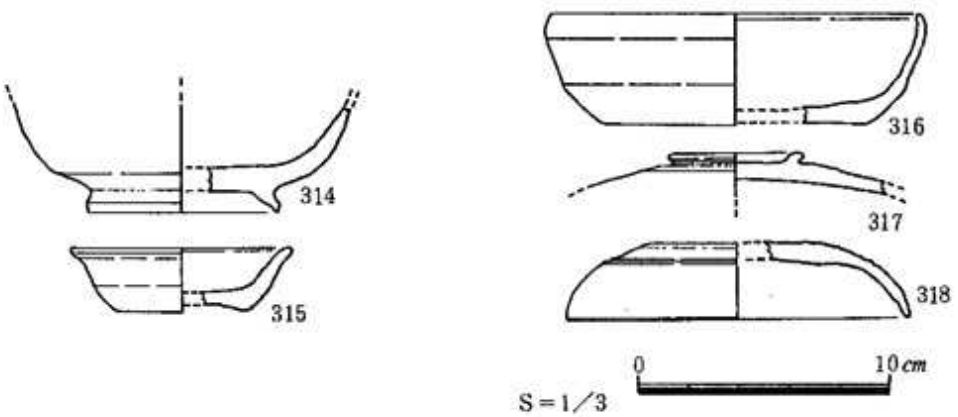


第 39 図　F 西拡張区生活用具のみの土器群

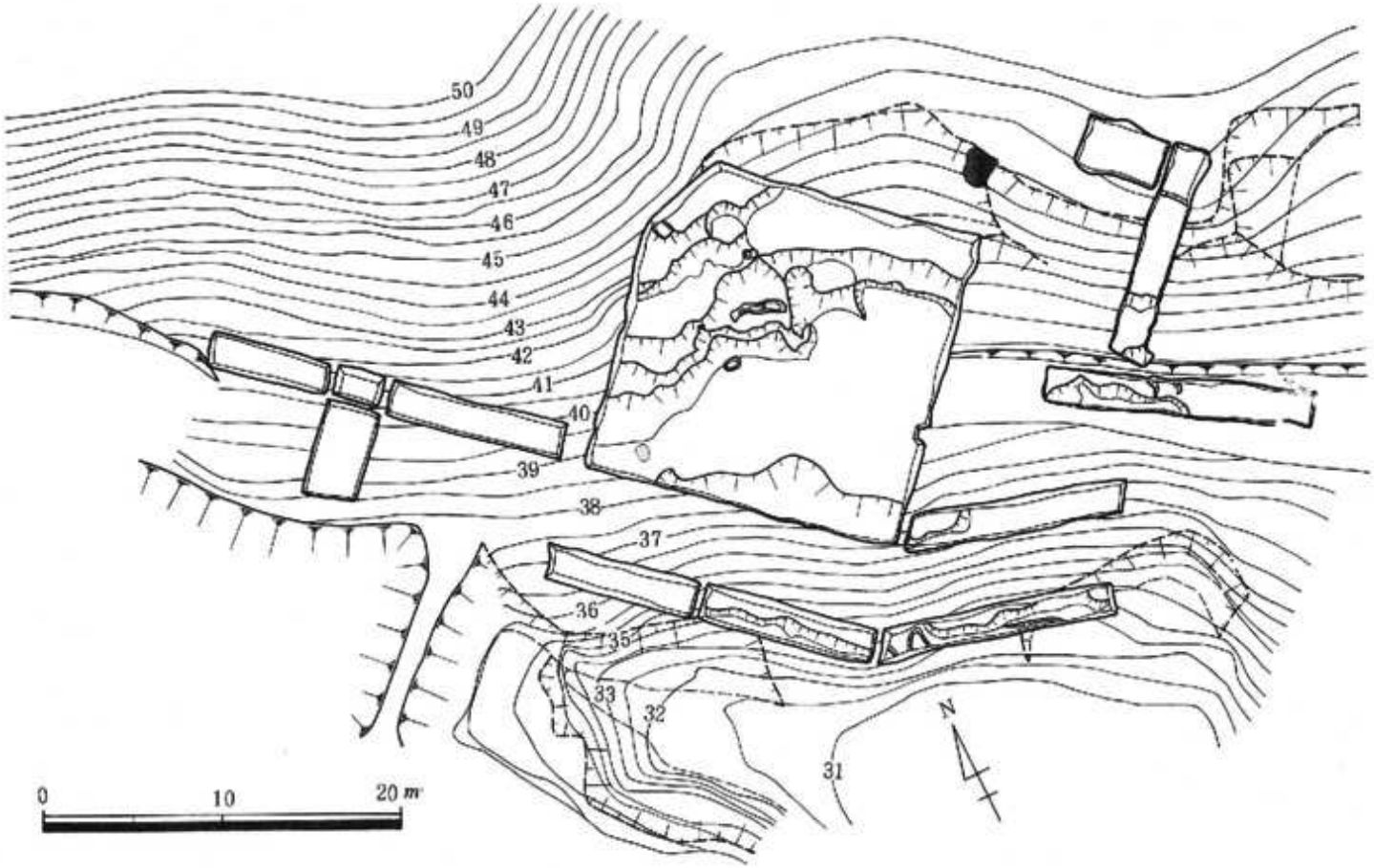
は密である。柳浦編年２式に属する。坏蓋（317）は天井部に輪状つまみを有し，つまみ周辺にヘラ削りを施す。（第40図）

出土地不明の須恵器の坏蓋（318）は口縁部と天井部との境に薄い沈線１条とU字形の沈線１条を施し，稜を作り出している。山本編年Ⅲ期に属する。

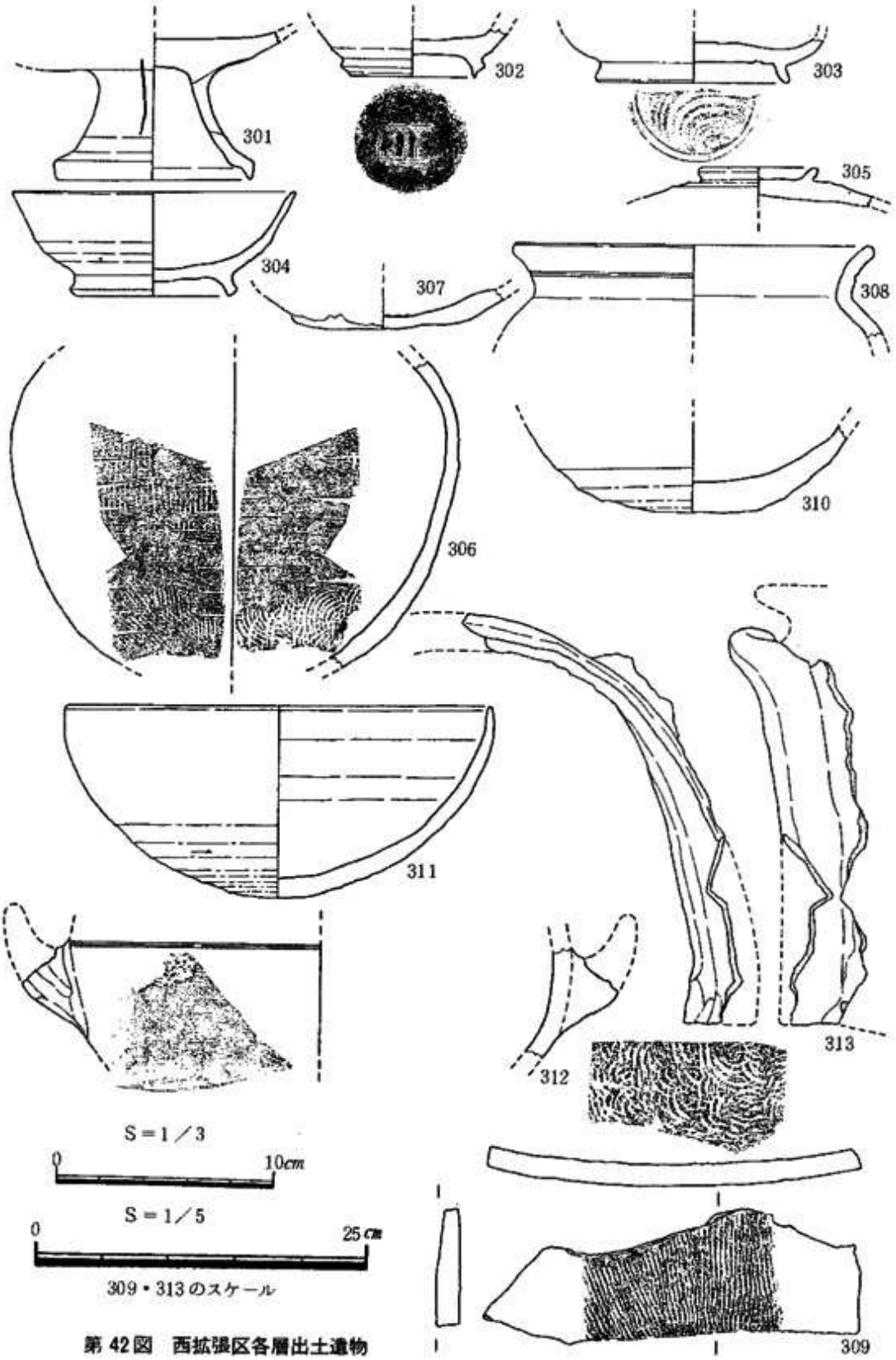
註１　柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器編年試論」（松江考古第３号1980年）
註２　「出雲国庁跡発掘調査概報」松江市教育委員会1970年
註３　山本　清「山陰古墳文化の研究」昭和46年７月25日（山本清先生退官記念論集刊行会）



第 40 図　出土遺物実測図



第41図　調査区成果図



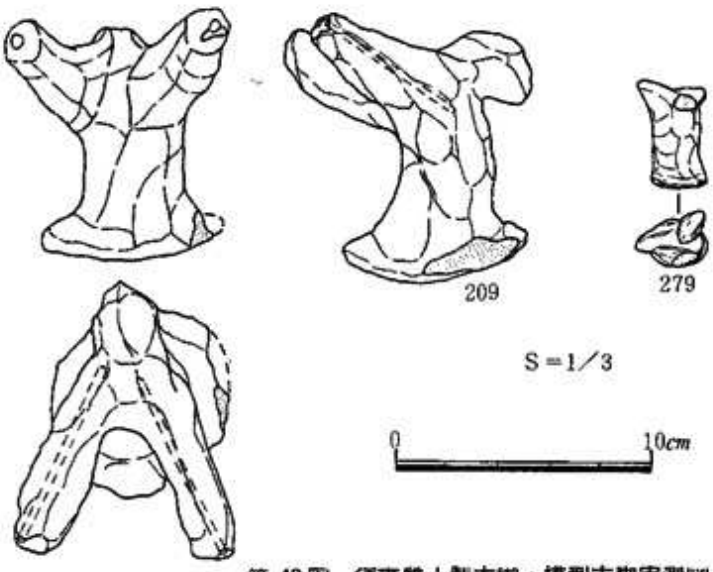
第42図　西拡張区各層出土遺物

3. 遺物の検討

(1) 須恵質の土製支脚について

本遺跡からは実測可能な土師質のもの11点，須恵質のもの２点（１点は模型支脚）が出土している。土師質のものは概ね15～20cmの器高を有し，頂部に太い２枝と細い１枝を持つもので，細い枝が横に伸びる型と屈曲して下る型と鉤のような把手状の型に分けられる。圧倒的に多いのは横に伸びる型で底部にアーチ状の窪みを合せて持つものである。２点平底のものもある。屈曲する型，把手状の型ともに器高は20cm前後と大型のものであり，同じく底部にアーチ状の窪みを持つ。例外として推定器高９cm前後の小形土製支脚は扁平な底をしており，中心軸がかなり一方に傾いている。３枝は消失しているので形態を分けることはできなかった。通常土製支脚と言えば，土師質のものを指すがG区南西隅の土器溜りより須恵質のものが出土し注目を惹いた。土師質以外のものとしては，壹岐加良香美山貝塚から「烏帽子形石」[註1]の例が見られるが，須恵質となると島根県内は勿論，他地方においても，今のところ類例を見ないものである。器高9.5cmと一般的な土師質のものより小形で，それに合わせて頂部の各枝も小振りである。太い方の２枝には製作工程上の都合なのか，或いは使用事に何かを突刺すためにつけたものなのか，枝の方向に添うように深さ7.2cmの穴が穿れている。底部は甚だ不安定な丸底を呈しており，従来の土師質のものとは著しく異にするところである。色調は青灰色，胎土は密である。ここでの関心事は煮沸用具である土製支脚を何故須恵質にしたのか，である。使って使えなくはないが，不自然さは否めない。非実用的とさえ思える。翻って詳細に観察して見ると使用痕が見られないので，その感がより一層強まる。そこで，日常頻繁に使用するものではなく，何らかの祭祀の時に使用したものではないかと考えた方が妥当であろう。

出土地点から東へ1.25mの地点から須恵質の模型支脚が出土している。



第43図　須恵質土製支脚・模型支脚実測図

器高4.1cm，頂部の1枝が欠落しており，底部は平坦である。島根県内では，オノ峠遺跡[註2]，イガラビ遺跡，中国地方では鳥取県米子市，石州府遺跡[註3]に類例を見い出せる。

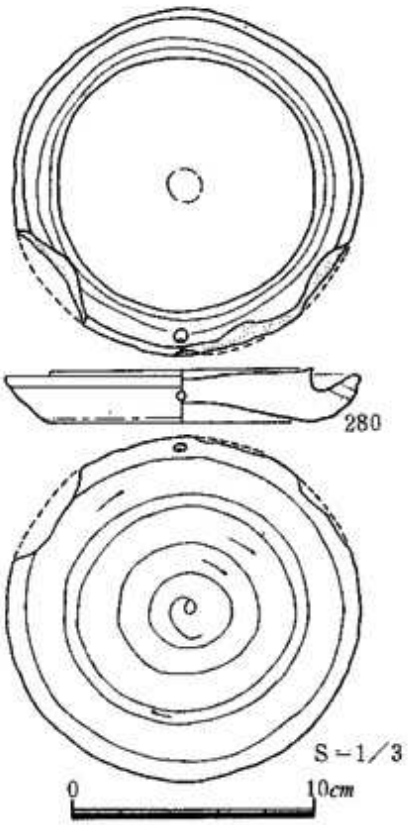
註1　小林行雄「土製支脚」考古学雑誌第31巻第5号　日本考古学会　昭和16年5月
註2　「オノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県教育委員会　昭和58年3月
註3　「石州府遺跡」報告書作成中

(2) 円面硯について

G区第5層位，急斜面より円孔の穿れた脚のない円面硯が出土した。底部は回転ヘラ削り，他は横ナデ，海部外堤に斜め下方に向って直径4.5mmの円孔が穿れている。陸部にはやや滑沢があった。脚のない円面硯と限定して出土例を探せば，尾根1つ隔てたイガラビ遺跡，松江市大草町，出雲国庁跡[註1]に類例を見い出せる。

この遺物は焼成前に海部外堤に円孔が1箇所穿れており，辛じて海部の底に墨汁が貯る程度で，実用性に乏しいものと言わざるを得ない。穿孔の理由であるが，何らかの祭祀使用の目的で行ったのか，廃棄のために行ったのか，墨汁の排出孔としたのか[註2]，3通り考えられるが，焼成前に行われていることから廃棄の考えには無理があり，祭祀使用か排出孔と考えた方が妥当であろう。なお円面硯が祭祀に伴う遺物として出土した例は島根県内では才ノ峠遺跡[註3]，中国地方では鳥取県，秋里遺跡[註4]に類例を見い出せる。

ところで，円面硯とは考えず，壺甕類の蓋とみなすことも，一考に値しよう。



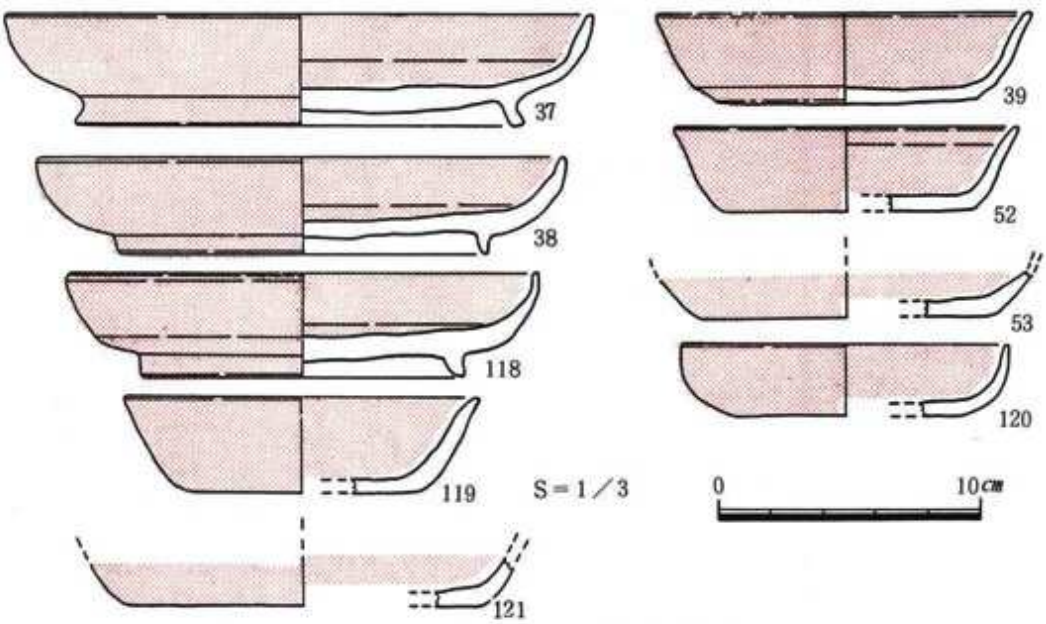
第44図　円面硯実測図

註1　「出雲国庁跡発掘調査概報」
松江市教育委員会 1970年
註2　内田律雄氏の御教示による
註3　「オノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県教育委員会　昭和58年3月
註4　「秋里遺跡発掘調査概要報告書」
鳥取市教育委員会　1983年3月

(3) 丹塗土師器について

正確な個体数は不明だが50片以上あり，E区から集中して出土した。口径12～14cm前後で無高台，体部が直線的なもの（3点），体部が内彎したもの（1点），底部が静止糸切りのもの（2点），糸切り痕を留めるもの（2点）である。盤は口径20～22cm前後，器高4cm前後，高台を付し，底部はヘラ切りのものと静止糸切りのものがある。これらを出雲国庁跡で分類されたものと比較してみると，丹塗りを施し暗文を欠く第3型式に該当する。しかし，大半の破片は磨耗が著しく判別できないものが多い。年代は出雲国庁跡出土例から考えると概ね8世紀半ばから末までの奈良時代に属するものと思われる。県下での出土例は，オノ峠遺跡[注1]，芝原遺跡[注2]，十王免横穴群[注3]，出雲国庁跡[注4]，イガラビ遺跡，堤廻遺跡[注5]，安来市・高広遺跡[注6]に類例を見い出せる。

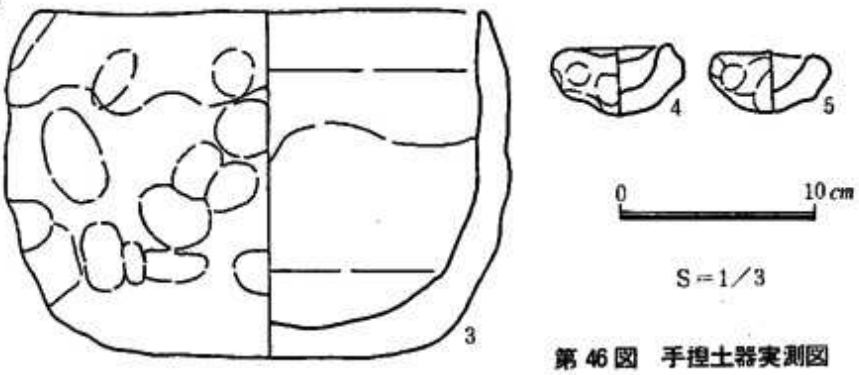
註1　「オノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会　昭和58年3月
註2　「芝原遺跡」松江市教育委員会　1989年3月
註3　「十王免横穴群発掘調査報告」島根大学考古学研究会　菅田考古第10号　1968年
註4　「出雲国庁跡発掘調査概報」松江市教育委員会　1970年
註5　「堤廻遺跡」松江市土地開発公社・松江市教育委員会　昭和61年3月
註6　「高広遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会　1984年3月



第45図　丹塗土師器実測図

(4) 小形粗製手捏土器について

小形粗製手捏土器は祭祀遺跡と呼ばれる場所から多量に集中して出土するものだが，本遺跡においては土壙（ＳＫ０３）の中より２点出土したのみである。出土状況は，俯伏せになった盌形手捏土器の中に小形粗製手捏土器２点が俯伏せで出土した。小形粗製手捏土器は元来自然神の鎮魂の呪具であった。当初の対象は巨岩・神奈備山を眺望できる地点，峠，磯と浜の接点にあたるような海岸であったものが，土着の自然神へと移行した。[註1] そこで，本遺跡においては周辺に神奈備山，峠等に該当するものはなく，土着の自然神をあてはめられるのではないだろうか。また古墳時代にみられる小形粗製手捏土器は，日本書紀神武天皇の条に記された「天手抉」にあたり，天手抉は潔斎して呪言を行う「厳呪詛」に関係があるとみられることから，天神地祇を祭る用具としなければならない[註2]とあることから，許されるならば土着の自然神＝天神・地祇＝天つ神・国つ神と解釈して，この地で天つ神か国つ神か，どちらかの鎮魂の祭祀を行ったと見ることはできないだろうか。出土状況からも封じ込めの祭祀の可能性も考えられなくもない。



第46図　手捏土器実測図

註１　森貞次郎「新・天手抉考」國學院雑誌第78巻第９号　昭和52年９月
註２　　同　　上

4. 小　　結

調査の結果，土壙３，土器群２，焼土遺構，生活用具のみの土器群，流れ込みによる土器溜りをそれぞれ検出した。この他，コンテナ18箱分の遺物が出土した。出土した遺物から池ノ奥Ａ遺跡の営まれていた時期は，７世紀半ばから８世紀末までと推察される。

ＳＫ０３からは小形粗製手捏土器が出土しており，この遺物が自然神の鎮魂の用具であることから祭祀の具体的な様相を知るうえで貴重である。両土器群からは祭祀色の強い丹塗土師器，須恵器の５段重ね等が出土しており，祭祀の種類を特定できなかったが，この場で祭祀を行った後，置き捨てられたものと思われる。なお両土器群では向い合わせに，大小の甕，

鉢2点，壺の順に並べられた遺物の組成にどういう意味があるのか，今後検討されなければならないだろう。生活用具のみの土器群については，ピットの検出はなかったもののG，F区が斜面であることと較べるとF西拡張区は平坦面であり，生活用具のみの出土から，住居を営まれていた可能性も考えられる。しかし，調査範囲が限られていたため，規模などを知ることはできなかった。流れ込みによる土器溜りからは生活用具に混って土玉，須恵質土製支脚，模型支脚，甑，坩，横瓶など祭祀を喚わせる遺物が出土している。須恵質土製支脚の出土例は県内はおろか，他地方にも見られない。また付近から海部外堤に円孔を穿った円面硯が出土しており，墨汁の排出孔か，祭祀に伴って奉納されたものであるのか，不明である。県内での円面硯の出土例は，出雲国庁跡[註1]，オノ峠遺跡[註2]，イガラビ遺跡，池ノ奥C遺跡，岩汐遺跡[註3]，蛇崩谷窯跡[註4]，カネツキ免遺跡[註5]があるが，円孔の穿たれたものの類例は見当らない。須恵質土製支脚，円面硯，土玉の出土状況から，本遺跡調査区域外の北斜面からの流れ込みと見られ，そこに住居址及び祭祀遺構を推定できるため今後の調査を期待したい。

註1　「出雲国庁跡発掘調査概報」松江市教育委員会　1970年

註2　「オノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県教育委員会　昭和58年3月

註3　「高沢A遺跡，高沢B遺跡，別所遺跡」『中国電力，北松江変電所造成予定地内発掘調査報告書』松江市教育委員会　1988年3月

註4　同　上

註5　「カネツキ免遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書，第XI集』
島根県教育委員会　昭和60年3月

附編

池ノ奥A遺跡G区出土（第5層）の黒曜石片の性質とその産地の同定

島根大学教育学部　三　浦　　清

池ノ奥A遺跡の標記地点から黒曜石片が出土した。

島根県下の遺跡から出土するものは隠岐産のほか，九州方面を原産地とする場合がある。その原産地を決定するためには岩石化学的手法が優れており，これには微量成分の特徴からと主成分，特に石基の主成分に関する変化曲線が有効である。後者は三浦(1986)によって示されたもので，ここではこれに従う。

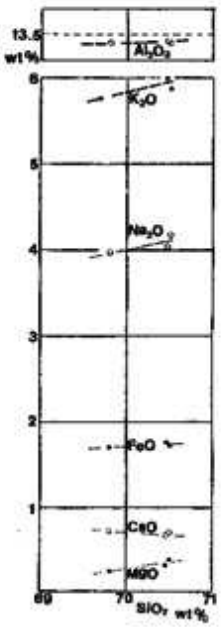
表には石基部分の三地点における化学組成が示され，これをSiO_2の変化に従って図示すると図のようになる。この図から原産地を読みとるわけであるが，筆者の前記論文によると隠岐島後男池附近に産するものといえよう。隠岐の黒曜石にはその岩石学的性格から二種のものがあり，一つは男池型と称したこの種のもので，他は久見型と称したものである。久美型はここに示した男池型のものに比してSiO_2成分が多く，Al_2O_3，K_2O成分がやや少ない。

(註)

三浦　清(1986)：黒曜石小考 — 島根県下の縄文遺跡から出土する黒曜石の原産地推定法をめぐって —，島根大学教育学部紀要(自然科学)，第20巻，45～61頁，(島根大学)。

池ノ奥A遺跡G区出土(第5層)の黒曜石片の分析値(石基部分)

成分＼試料	(1)	(2)	(3)
SiO_2	69.79	70.45	70.49
TiO_2	0.11	0.09	0.05
Al_2O_3	13.41	13.41	13.40
FeO	1.71	1.77	1.72
MnO	0.00	0.00	0.00
CaO	0.74	0.67	0.70
MgO	0.25	0.32	0.38
Na_2O	3.99	4.02	4.18
K_2O	5.75	6.00	5.87
P_2O_5	0.00	0.00	0.16
S	0.01	0.00	0.08
Cl	0.05	0.09	0.10
H_2O	4.20	3.16	2.87



遺　物　観　察　表

番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
1	A－1	2層	坏蓋（擬）	11.6	2.3	
2	A－3	2層	〃（輪）	14.8	1.8	ヘラ記号 ⅄
3	B－2	SK03	手捏土器	11.4	8.8	
4			〃	2.8	1.7	
5			〃	2.6	1.6	
6			甑	15	残 5.7	
7			壺		残 7.6	爪痕
8			土玉	3.1	3	24.75 g
9		4層	甕	28.4	残 9.2	
10		4層	黒曜石片			
11	B－2	表採	坏蓋（輪）	14.2	2.6	櫛状工具による刺突痕
12	D	2層	坩	5.8	残 2.8	ヘラ傷
13	E	SK02	甕		残31.9	
14		SK02	高台付坏		残 3.6	ヘラ記号 [illegible]
15		SK02	坏蓋（輪）	14.5	3	
16		A群	坏身	11.85 ～ 12.8	4.4	5段重ね(1)静止
17				13.6	4.35	静止
18				13	4.4	静止
19				13.8	4.7	爪痕　糸切り
20				12.4	4.1	静止
21				13.2	3.75	静止
22				11.6 ～ 14.4	4.9	5段重ね(2)回転
23				12.4	4.2	5段重ね(3)静止
24				15.7	5.2	回転
25				13.5	4.4	静止
26				13.3	4.15	回転
27				11.4 ～ 13.9	4.5	静止後ナデ
28				13.6	4.1	回転　ヘラ状工具による回転ナデ
29			鉢	18.6	6.1	5段重ね(4)
30				17.6	残 6	
31				16.2	6.6	
32	E			20	9.5	
33	E	A群	鉢	16.6	7	

番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
34			〃	26.6	9.3	
35			鉢	19.4	4.1	5段重ね5静止後ナデ
36			〃	脚13.6	残 3.6	
37			〃	22.2	4.2	赤色塗彩
38			〃	19.8	3.6	〃 静止
39			坏身	14.2	3.4	〃 〃
40			甑	34.6	38.5	脚16.8
41			〃	脚16.2	残 9.1	角孔
42			盌	10.6	残 8.1	
43			〃		残 9.1	
44			甕	22.8	残13	
45		B群	甑	脚19.6	残	
46			〃	16	残 7.8	
47			坩	10.2	残 5.7	波状紋
48			鉢	16.6	6.5	
49			〃	19.1	8.5	
50			盌	12	17.7	
51			高台付坏	16.4	4.5	
52			坏身	13	3.2	赤色塗彩 糸切り
53			〃	脚11	残 2.1	〃 〃
54		4層	坏蓋(輪)	10.2	残 4.1	Ⅲ期
55		2層		19.8	3.05	
56		2層		16.2	3.3	爪傷
57		4層		13.8	2.7	
58		4層		13.6	2.4	
59		4層		11.6	2.2	
60		2層		14.8	3.8	ヘラ記号 一
61		4層		14.2	3.1	ヘラ記号 #
62		4層		17.6	3.5	静止
63		4層			残 1.3	
64		4層			残 1.6	
65		4層			残 1.3	
66		4層			残 1.8	
67	E	4層			残 1.7	
68	E	4層	坏蓋		残1.8	
69		4層			残2	ヘラ記号内「一」外「×」

番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
70		4層		15.8	残 2.2	
71		4層		12	4	
72		2層	坏身	10.8	残 1.8	III期
73		4層		12.6	4.8	
74		4層		11.8	3.8	ヘラ記号〆
75		4層		11.6	3.8	沈線4条
76		4層		10.2	残 3.2	ヘラ記号〆
77		2層		11.6	5.1	静止
78		4層		13.25	4	静止
79		4層		12.5	3.4	回転
80		4層		11.8	4.2	回転
81		4層	高台付坏	16.8	5.4	
82		4層		13	4	
83		4層		14.6	4.3	
84		4層		14.8	5	ヘラ記号−
85		4層			残 2.1	ヘラ記号〆
86		3層			残 1.6	ヘラ記号−
87		4層		12.6	5.1	
88		4層			残 1.6	
89		4層			残 2.2	ヘラ記号／
90		4層			残 3.5	櫛状工具刺突痕
91		4層		14	残 4.4	
92		4層		14.7	5.1	
93		4層			残 3.4	静止後ナデ ヘラ記号七
94		4層			残 3.2	静止後ナデ
95		4層			残 2	ヘラ記号− 静止
96		3層			残 4.9	静止後ナデ ヘラによる掻き痕
97		4層		13.75	4.05	回転 ヘラ記号内七七 外七
98		4層		12.8	4	静止
99		4層			残 2.1	静止
100		4層			残 3.3	静止
101		4層	低脚坏	17.8	5.35	
102	E	4層	〃		残 3.1	
103	E	4層	低脚坏		残 1.8	
104		4層	高坏		残 4.5	
105		4層	〃	21.3	12.9	

番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
106		4層	〃		残 4.6	
107		4層	短頸壺	8.8	6.2	
108		4層		9.1	7.7	
109		4層		9.4	6.4	静止
110		4層		8.6	7.3	糸切り
111		4層	短頸壺の蓋	9.8	2.7	
112		4層	壺	19.8	18.8	
113		4層		19.4	23.9	
114		2層			残 2.2	ヘラ記号×
115		3層			残 3.4	
116		4層	甕		残 30.6	
117		4層	〃	18.8	残 7	
118		4層	盤	17.8	3.9	赤色塗彩
119		4層	坏身	13.4	3.6	〃
120		不明	〃	12.4	2.7	〃 静止
121		不明	〃			〃
122		4層	甕	16.2	残 5	
123		4層		12.8	残 6.2	
124		4層		11.9	残 6.6	
125		4層		24	残 11.8	
126		4層	壺	13.6	残 3.2	
127		4層	〃	19.4	残 8.2	
128		4層	土製支脚		17.2	
129		4層			残 15	
130		4層			残 8.9	
131		4層			20	
132		4層			16.4	
133		4層	甕	28.2	(推定) 40	
134		4層	〃		残 16.1	
135		4層	〃		残 6	
136		4層	土玉	3.4	3.2	29.35 g
137	E	4層	〃	2.8	2.6	15.25 g
138	E	4層	土玉	2.9	2.9	19.15 g
139	〃	4層	〃	2.8	3	20.1 g 円筒形
140	〃	3層	寛永通宝			
141	F	5層	坏蓋 (輪)	15.8	2.8	

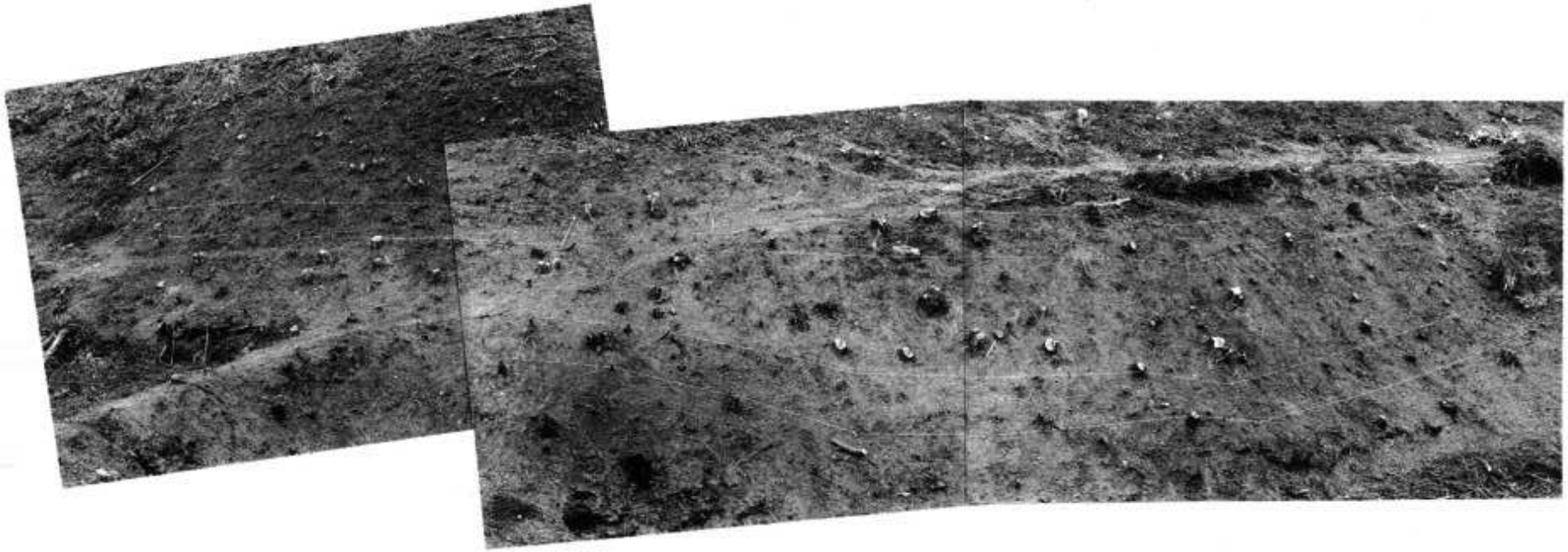
番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
142				19	3	
143				17.4	3.5	
144				13.4	2.7	
145				15	3.2	
146				14.6	3.1	
147			高台付坏		残 1.7	静止ナデ
148			〃		残 2.3	
149			坏蓋	17.6	3.2	
150			〃	16.4	残 3.5	
151		2層	紡錘車	上2.8，下5	3.3	
152		5層	高台付坏	9.5	3.95	静止後ナデ
153		5層		14.2	4.45	静止後ナデ
154		5層		17.4	5.3	ヘラ記号×
155		5層		13.8	5.1	ヘラ記号×
156		5層	坏蓋	15.3	2.8	
157		5層	盤		残 3.8	
158		5層	坏身	11.6	4.5	窯印＋
159		5層	〃	15.8	4.4	静止
160		5層	甕	体部最大径8.8	残10.9	
161		2層	壺	14.7	14.7	
162		5層	小形壺形土器	9.6	5.1	
163		2層	鉢		残 3.6	格子状叩き
164		5層	〃	26.8	残 8.2	
165		5層	盆	20.2	残 5.4	
166		5層	竈		残27.6	
167		5層	〃		残15.9	
168		2層	小形土製支脚		残 8.2	
169		5層	土玉	3	3	25 g
170		2層		2.8	2.6	16.35 g
171		2層		2.3	2.7	16.4 g
172	F	5層		3.3	3.2	33.95 g
173	F	5層	土玉	2.9	2.5	18.35 g
174		5層	〃	3.1	2.7	17.95 g
175		6層	〃	3	2.9	22.05 g
176		5層	黒曜石片			
177	G	4層上面	高坏		残 5.4	2段透し

番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
178					残 6.7	
179					残 7.5	
180			壺	9.2	残 2.2	
181			高台付坏	10.2	4.2	静止後回転ナデ
182				15.2	4.7	
183				16.6	4.5	静止後回転ナデ
184				14.2	4.2	ヘラ記号 ソ
185					残 2.1	ヘラ記号 ー
186			坏蓋（輪）	16	3.4	
187				17.4	3.2	
188				13.4	2.2	ヘラ記号ー
189				19	5.1	ヘラ記号×
190				17	2.7	ヘラ記号ー
191				11.8	残 1.7	ヘラ記号X
192			坏身	11.8	4.1	
193			〃	12.8	4.1	ヘラ記号X
194			壺	18.4	残 7	
195			土玉	3.1	3	28.75 g
196				3	3	24.95 g
197				3	2.6	18.65 g
198				残 3.1	残 2.9	20.2 g
199				2.7	2.6	14.45 g
200				3	2.4	15.3 g
201				3.2	3.3	27.75 g
202				3	2.7	20.85 g
203				3.4	2.7	25.2 g
204				2.9	2.7	20.1 g
205				3.2	3.1	25.8 g
206				3.3	3.3	28.05 g
207	G	4層上面		3.6	3	35.2 g 円筒形
208	G	4層上面	土玉	2.6	3.4	20.7 g 円筒形
209		4層下面	土製支脚		8.5	須恵質
210			横瓶	11.8～12.8	22.9～28.1	
211			坏蓋	14.4	2.8	ヘラ記号ー
212			高台付坏	15.8	4.5	ヘラ記号Ⅲ
213			〃	11.8	4.4	ひっかき傷ー

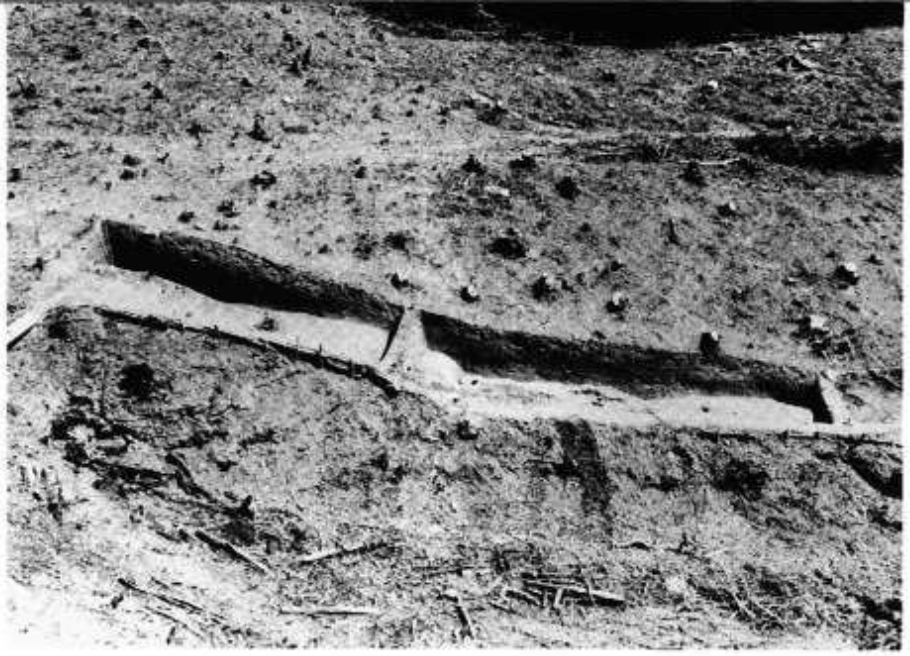
番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
214			甕		残 7	
215				27	残 5	
216				37	残 3	
217					残 3.6	
218					残 5.4	
219					残 6	
220			土製支脚		15.3	
221					16.3	
222					16	
223					14.8	
224					18.2	
225					19.4	
226			甕	20.1	残 7.6	
227			甕	23.2	残 17.9	
228				26.6	残 7.6	
229				25.4	残 7.8	
230				25	残 3.4	
231				31.4	残 5.2	
232				22.7	残 5	
233				20.2	残 7	
234				24.6	残 6	
235			壺	24.8	残 22.7	
236			土玉	2.9	2.7	19.85 g
237				2.7	2.7	18.75 g
238				3	3	25.2 g
239				3.2	3	22.95 g
240				3	2.9	16.3 g
241				3.1	3.4	26.55 g
242	G	4層下面	把手		残 5.4	
243	G	2層	坏身	11.4	4.1	回転
244		2層		13.2	5	回転
245		4層		12.6	5	
246		4層		14.4	4	いびつ
247		4層	坏蓋（輪）	16.4	4	静止
248		4層		15.6	4	
249		4層	〃（鍛）	13.2	3.1	

番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
250		5層		14.3	2.8	ヘラ記号－
251		2層		17.2	3.5	
252		4層		17.6	3.45	
253		4層		15.6	残 3.2	ヘラ記号－
254		2層		16.25	2.85	刺突痕
255		4層	高台付坏	13.8	4.6	
256		4層			残 3.7	
257		4層		15.6	4.6	
258		4層		13.2	4.4	
259		4層			残 1.8	
260		4層			残 2.7	ヘラ記号－
261		重機攪乱			残 2.8	ヘラ記号×
262		5層		15.2	4.9	
263		4層		13.6	4.5	
264		3層		13.6	4.2	爪傷
265		2層		9.2	3.9	ヘラ記号－
266		4層		15.6	5.3	
267		4層		16.	5.1	静止後ナデ
268		4層		16.2	5.1	
269		4層		14.4	4.7	静止 歪み有り
270		4層		15.8	4.8	静止
271		4層	高　坏	16.2(脚径) 9.	10.6(脚高) 6.8	
272		5層	〃	16.6(〃) 8.6	10.6(〃) 6.9	
273		5層	〃	18.8(〃)10.4	8.8(〃) 5.4	
274		4層	短頸壺の蓋	9.2	2.9	
275		4層	長頸壺	10	残 15.4	
276		4層	盤	16.2	4.1	静止
277	G	4層	〃	15.6	4.4	〃
278	G	4層	低脚坏	15.2(脚径) 8.8	5(脚高) 2.6	ヘラ記号－
279		4層	横形支脚		4.1	
280		5層	円面硯	14.4	2.1	
281		5層	坩	5.7	3.3	
282		5層	甕	体部最大径8.4	11.6	
283		5層	鉢型土器	14.8	11.5	
284		5層	壺	28.6	残 19.4	
285		4層	〃		残 30.8	

番号	地区	層位	形態	口径	器高	備考
286		2層	〃		残 4.9	
287		4附	甕		残 5.4	墨跡
288	G	2層	土玉	2.8	3.2	19.2g
289	F 西	3網	甑	底径 13.2	残 6.9	
290		3層	〃	26	残 6	
291		3附	壺	15.6	残 7	
292		3層	〃	15.8	残 7.8	
293		3附	〃		残 11.3	
294		3層	甕	26.4	残 9.6	
295		3層	〃	27.8	残 14.3	
296		3層	土製支脚		残 5.6	
297		3附	坏蓋（輪）	14.8	3.5	
298	F 西	地山面より浮いて出土	甕	24.6	残 12.8	
299	E 西	地山面より浮いて出土	壺	16.8	残 7.3	
300	F 西	地山面より浮いて出土	竈	34.6	31.9	
301	E 西	2層	高坏	底径 8.8	残 7.5	
302	F 西	3附	高台付坏		残 2.3	ヘラ記号四
303	〃	3層	〃		残 2.1	
304	〃	3附	〃	12.8	4.85	
305	E 西	3附	坏蓋		残 1.3	
306	〃	2層	壺		残 14.2	
307	F 西	2附	〃		残 1.9	静止
308	E 西	2層	甕	16.4	残 4.2	
309	F 西	2附	〃			縄目痕
310	E 西	3層	鉢		残 4.1	
311	F 西	2附	〃	19.4	9	
312	〃	2層	把手付鉢		残 5.3	
313	F 西	2附	竈		残 31.6	
314	I		高台付坏		残 4.4	
315	〃		坏身	8.6	2.55	回転
316	J		〃	14.4	4.4	
317	〃		坏蓋（輪）		残 1.8	
318	不明	不明	坏蓋	13.7	3.2	Ⅲ期

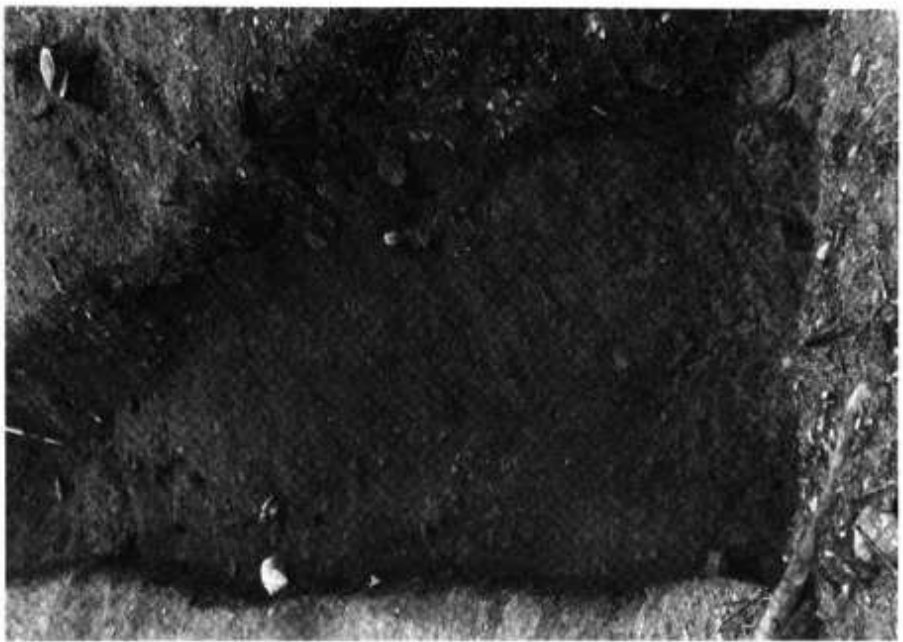


池ノ奥A遺跡調査前（南側堤から見る）



A－2，3トレンチ
完掘状況

A－1トレンチ作業風景



A－1トレンチ完掘状況

B－1トレンチ作業風景

B－1トレンチ完掘状況

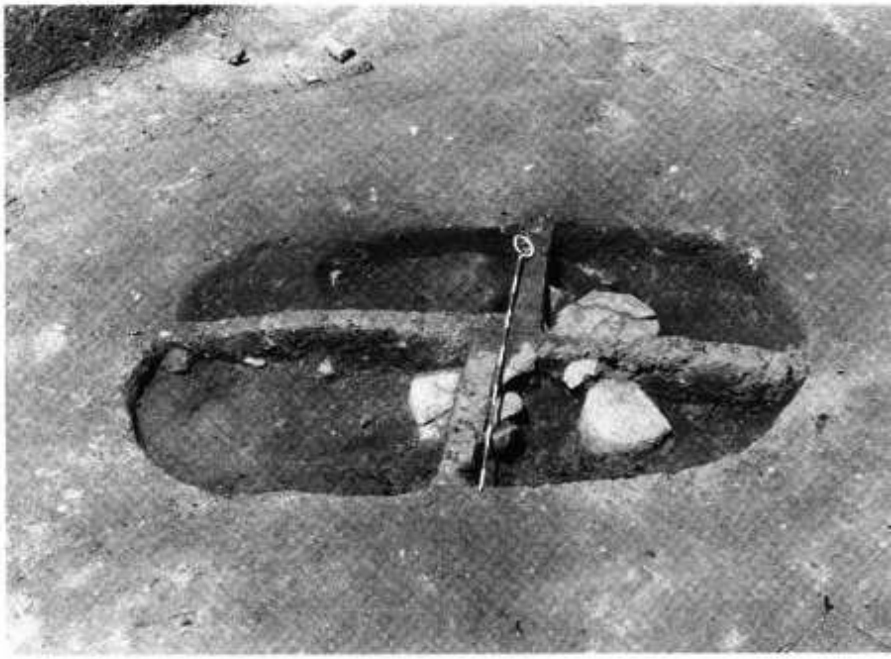
C，Dトレンチ完掘状況

B－2トレンチ
西壁セクション

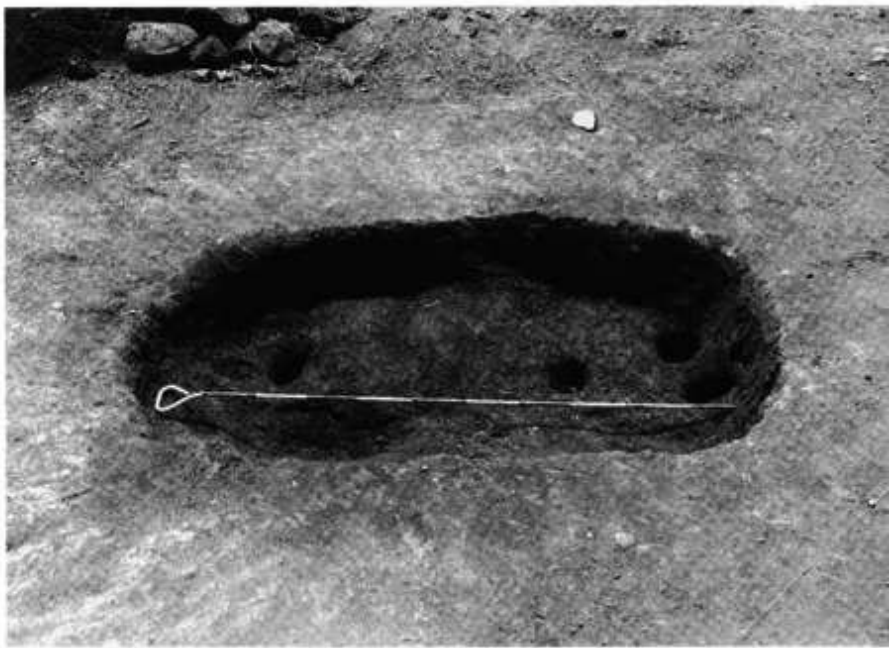
SK03

SK03出土手捏土器

SK03出土手捏土器
（逆さに見る）



SK01調査中



SK01完掘状況

ＳＫ０２出土遺物

土器群Ｂ

土器群Ａ

F区出土遺物

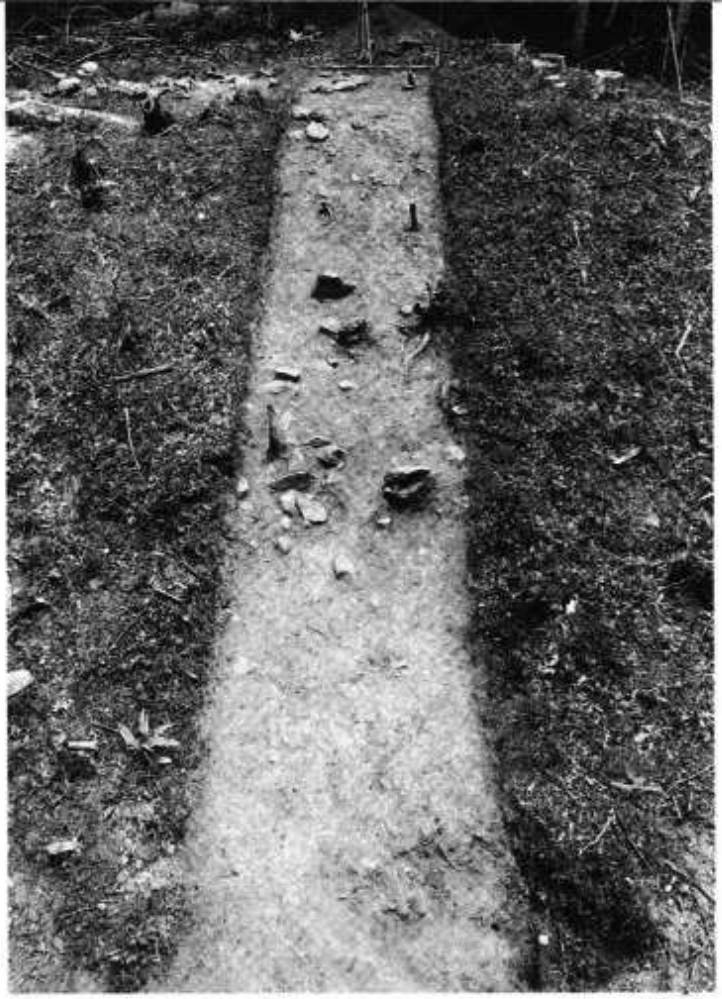
G区土器溜り出土遺物

G区出土模型支脚

G区出土円面硯

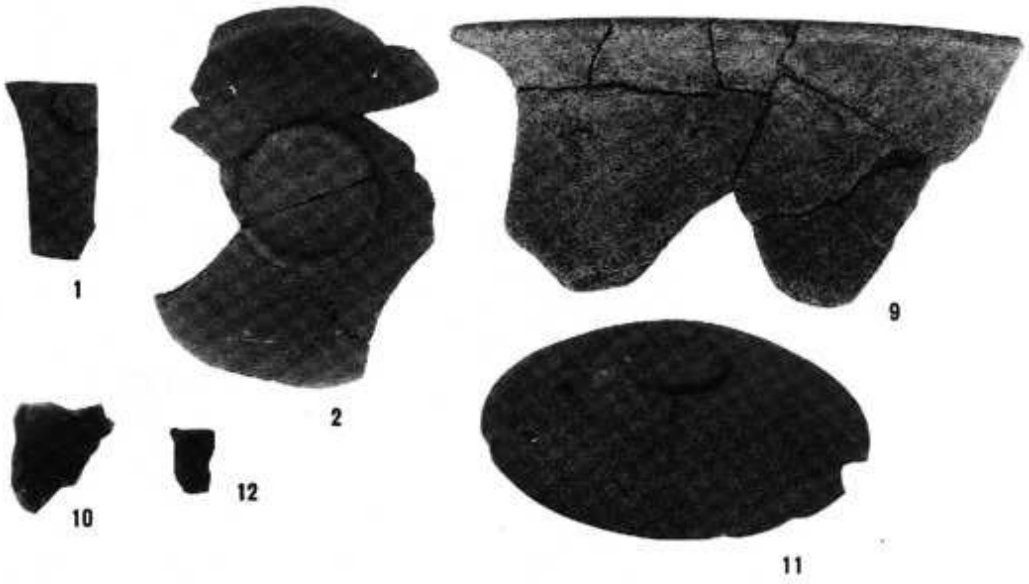
F西拡張区
生活用具のみの土器群

Jトレンチ完掘状況

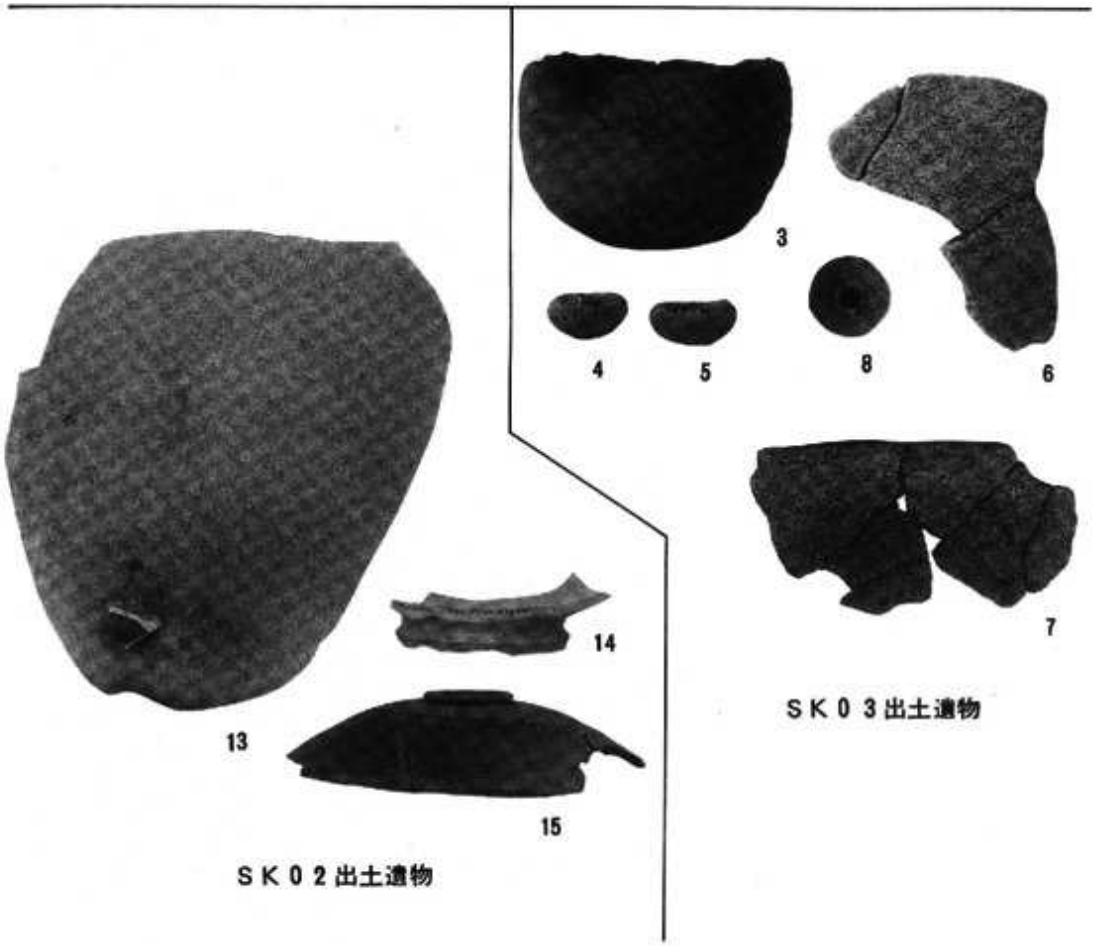


Iトレンチ完掘状況

Hトレンチ完掘状況

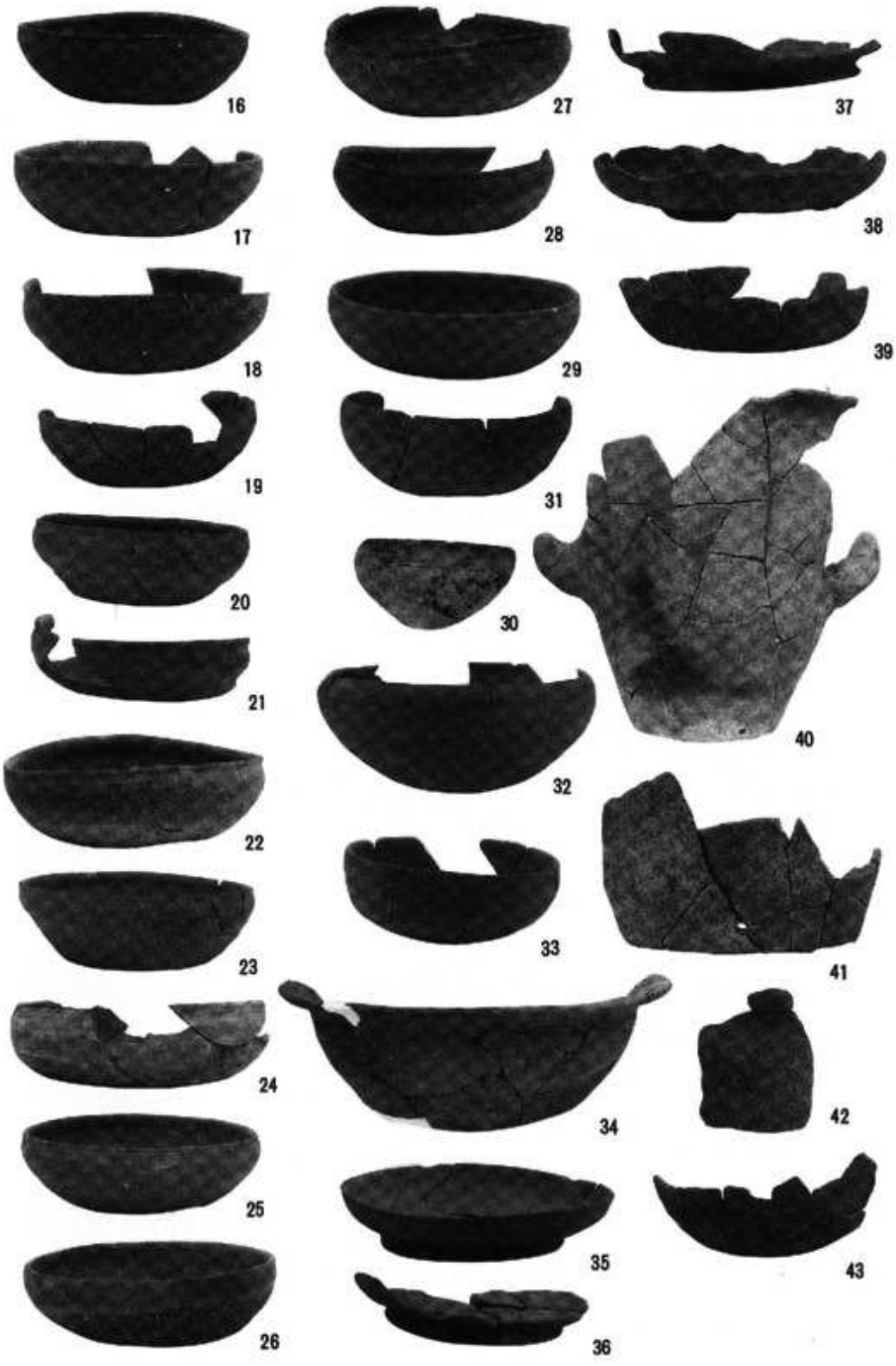


A，B，Dトレンチ各層出土遺物



SK03出土遺物

SK02出土遺物

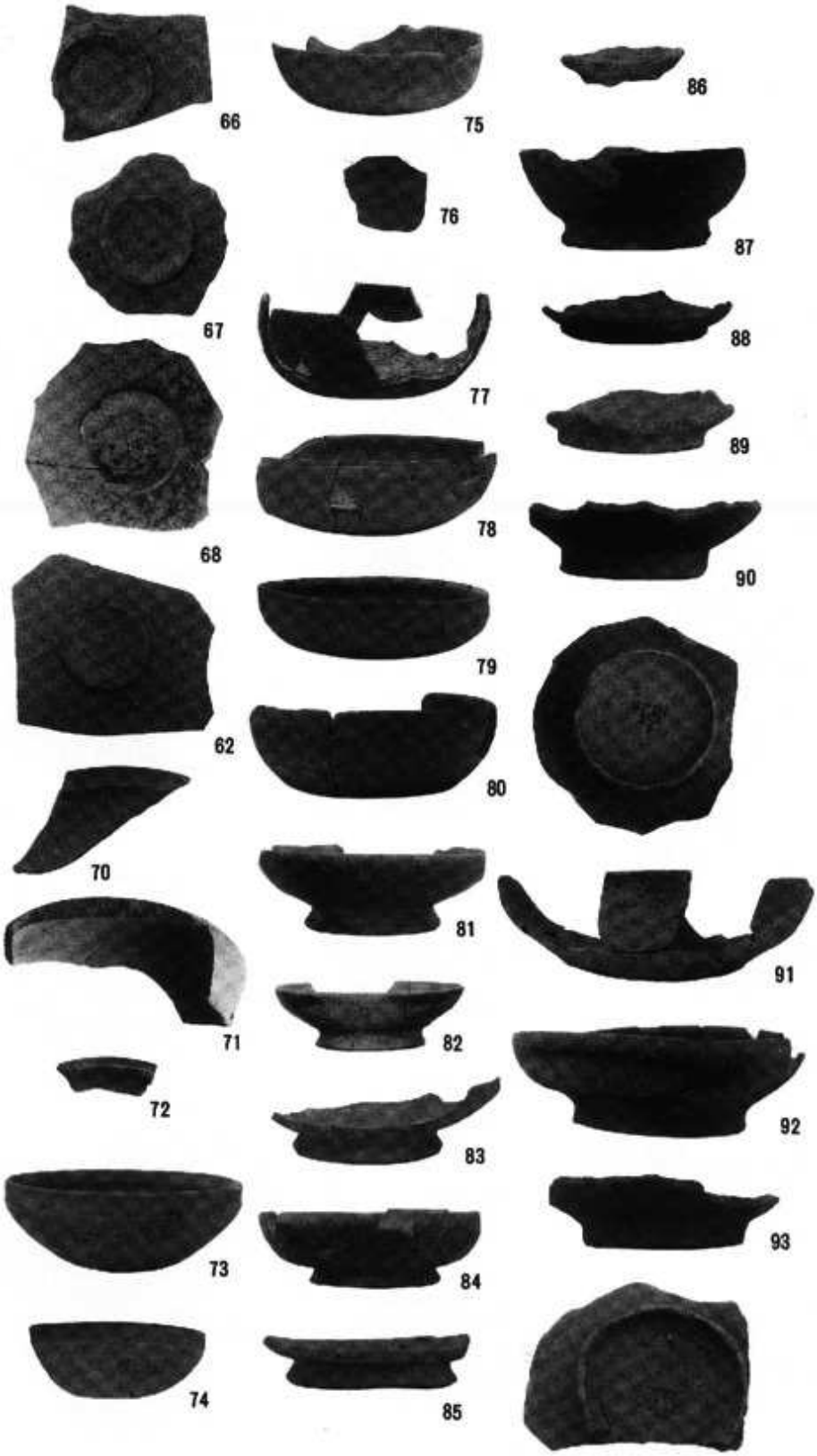

16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
31
30
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43

土器群A出土遺物

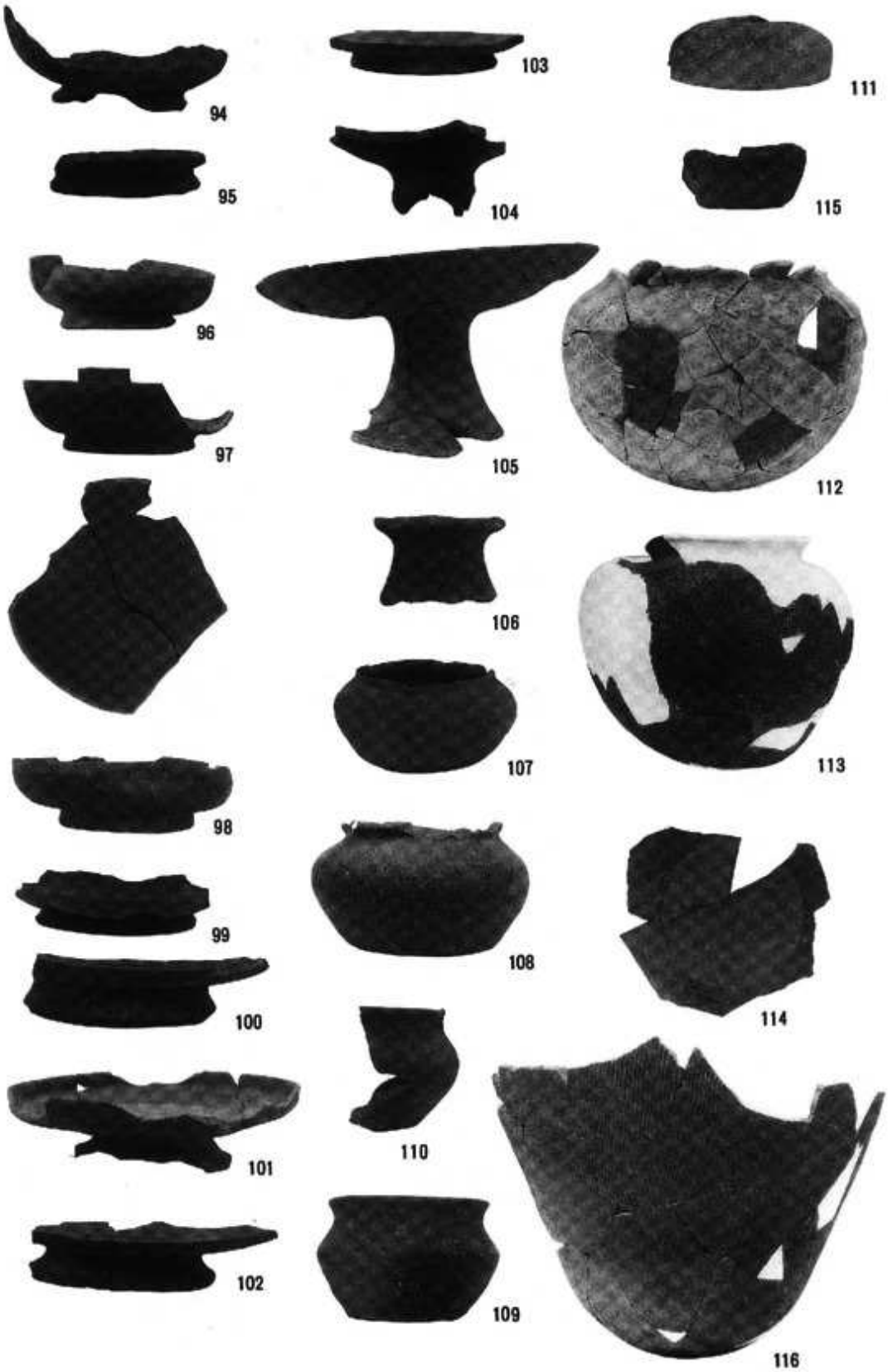
土器群A

土器群B出土遺物

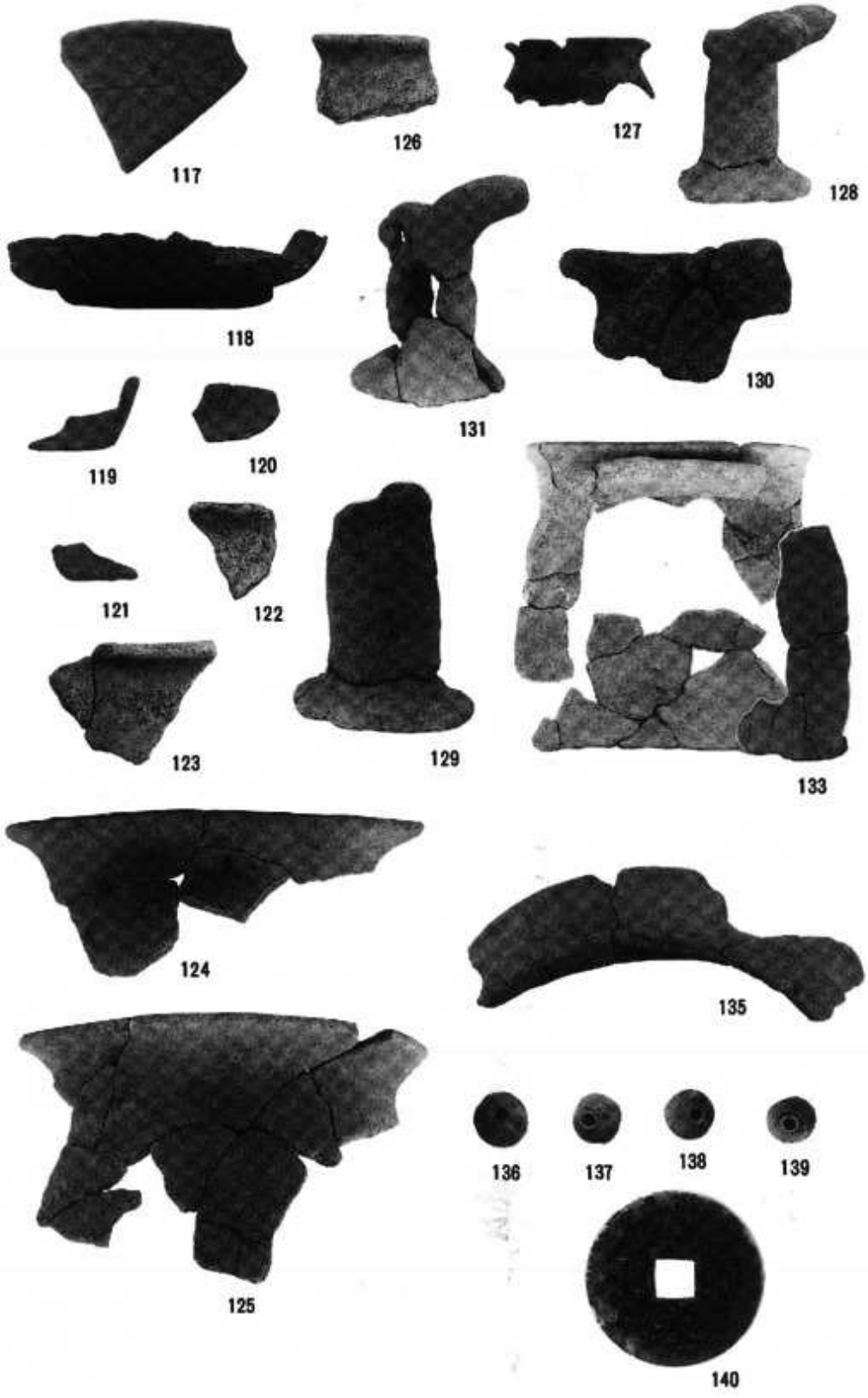
E区各層出土遺物


66
75
86
76
87
67
77
88
68
78
89
62
79
90
70
80
81
91
71
82
72
92
83
73
84
93
74
85

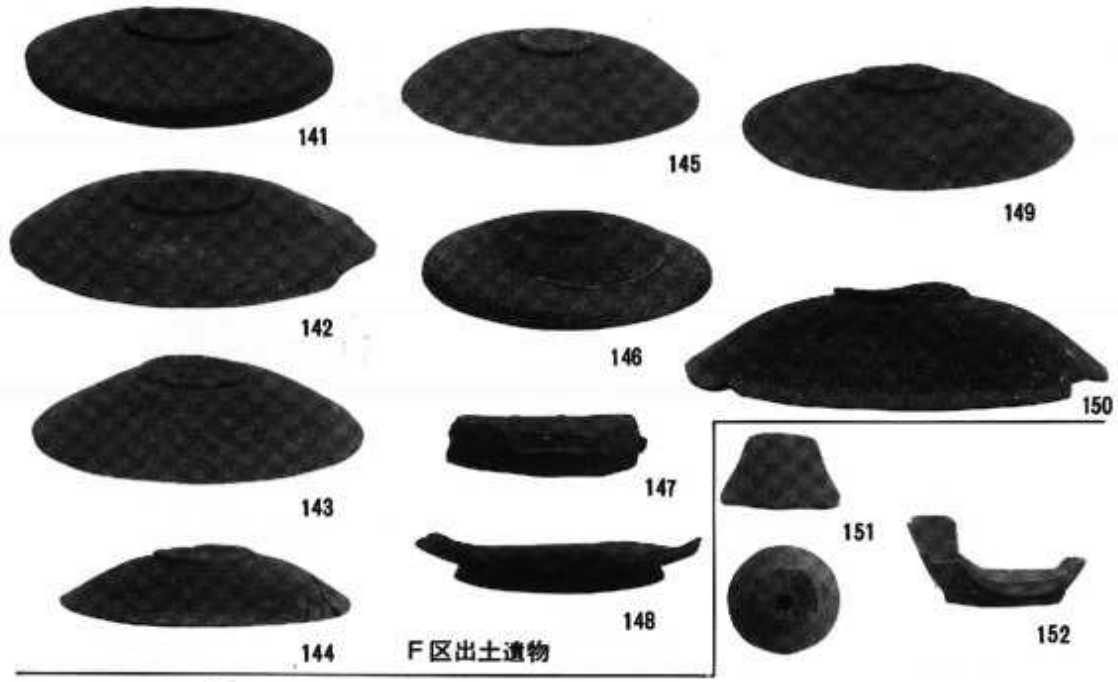
E区各層出土遺物


94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
115
112
113
114
116

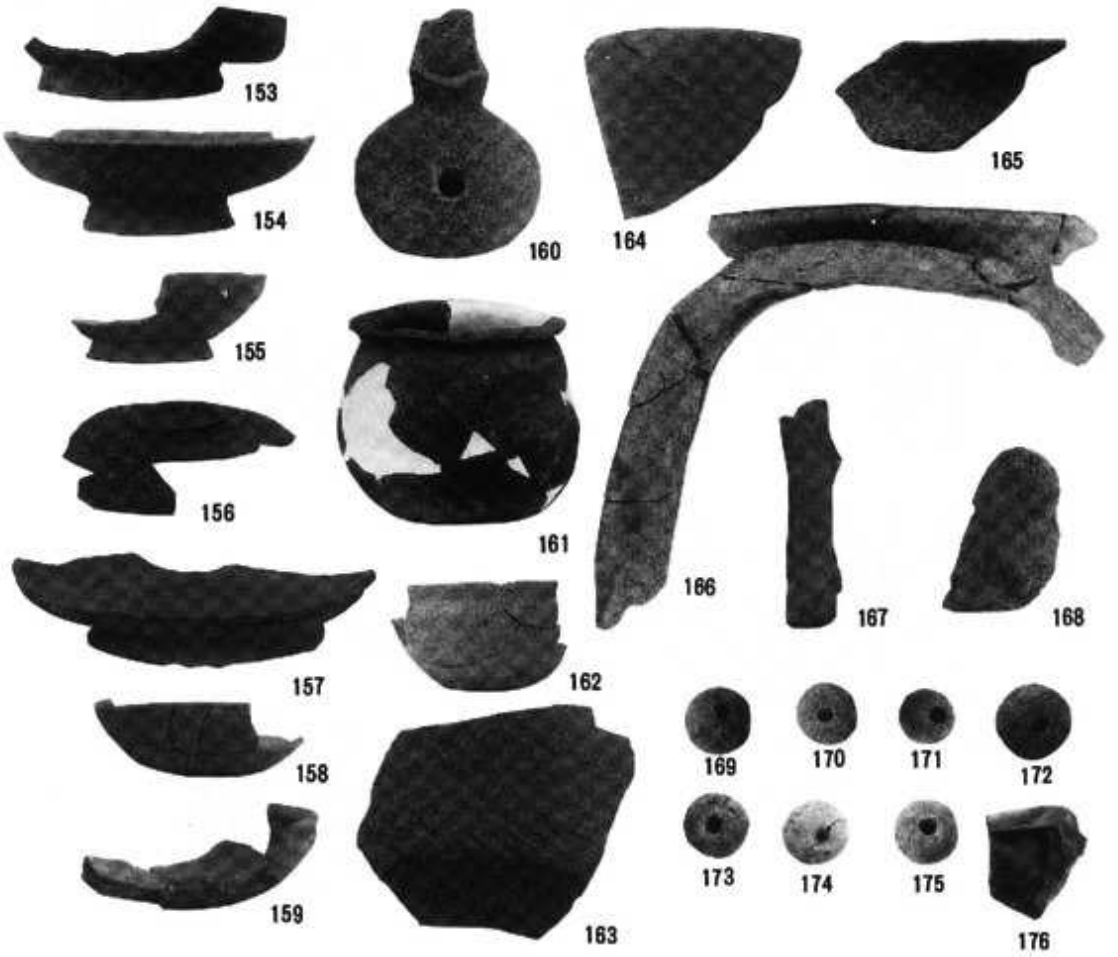
E区各層出土遺物


117
126
127
128
118
131
130
119
120
121
122
129
133
123
124
135
125
136
137
138
139
140

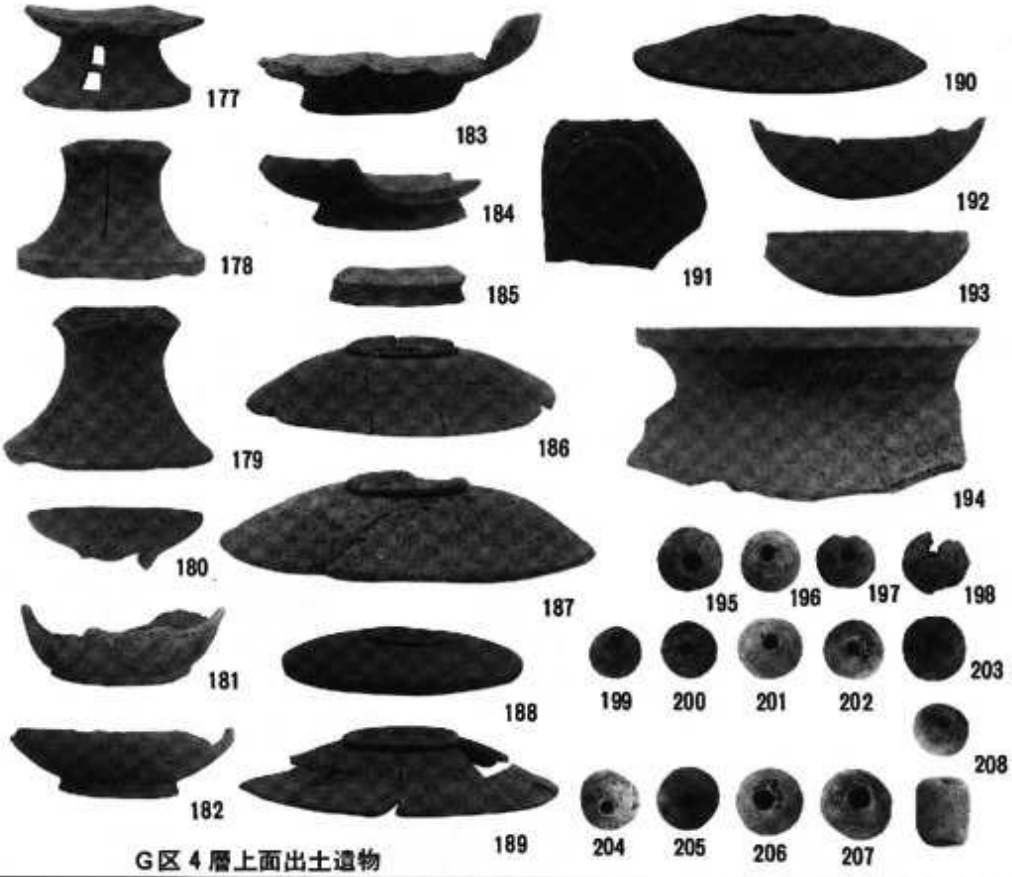
E区各層出土遺物



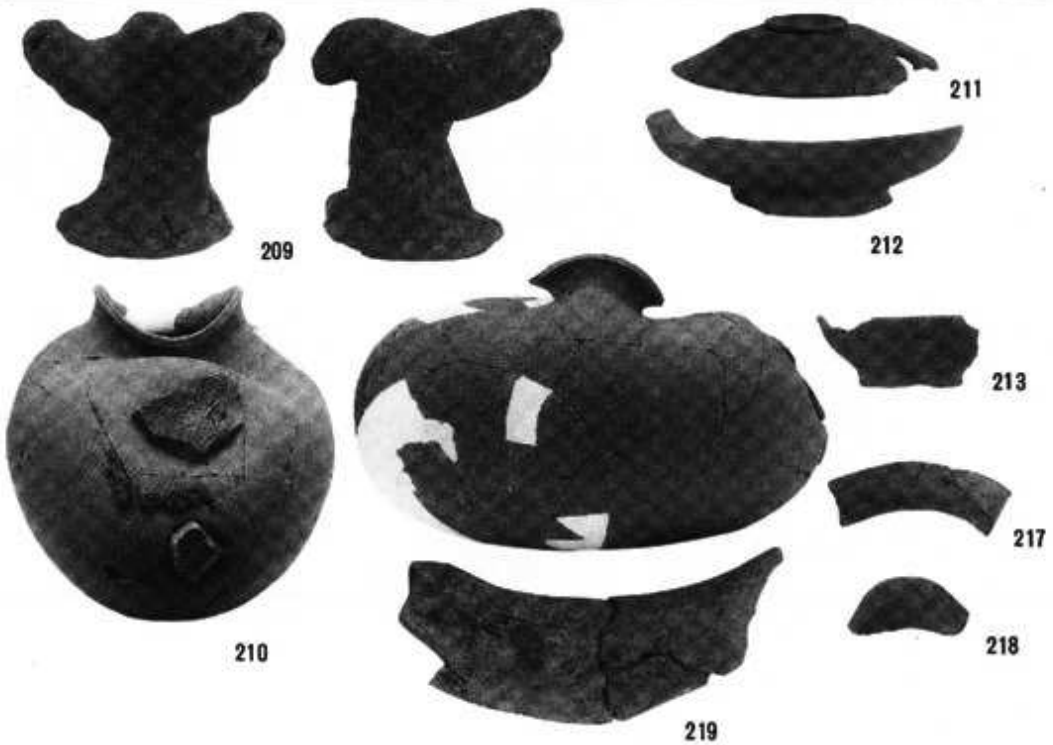
F区出土遺物



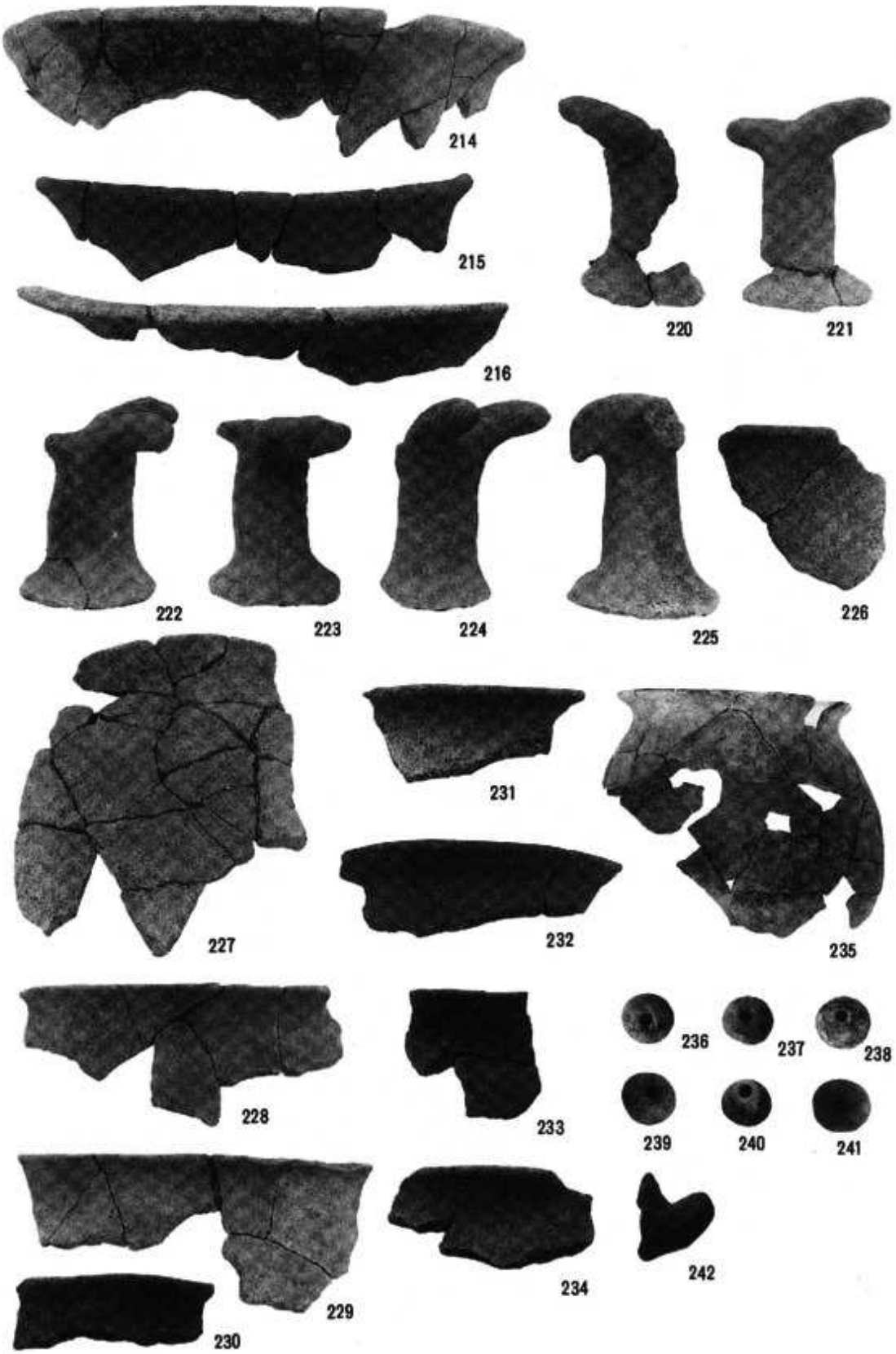
F区各層出土遺物



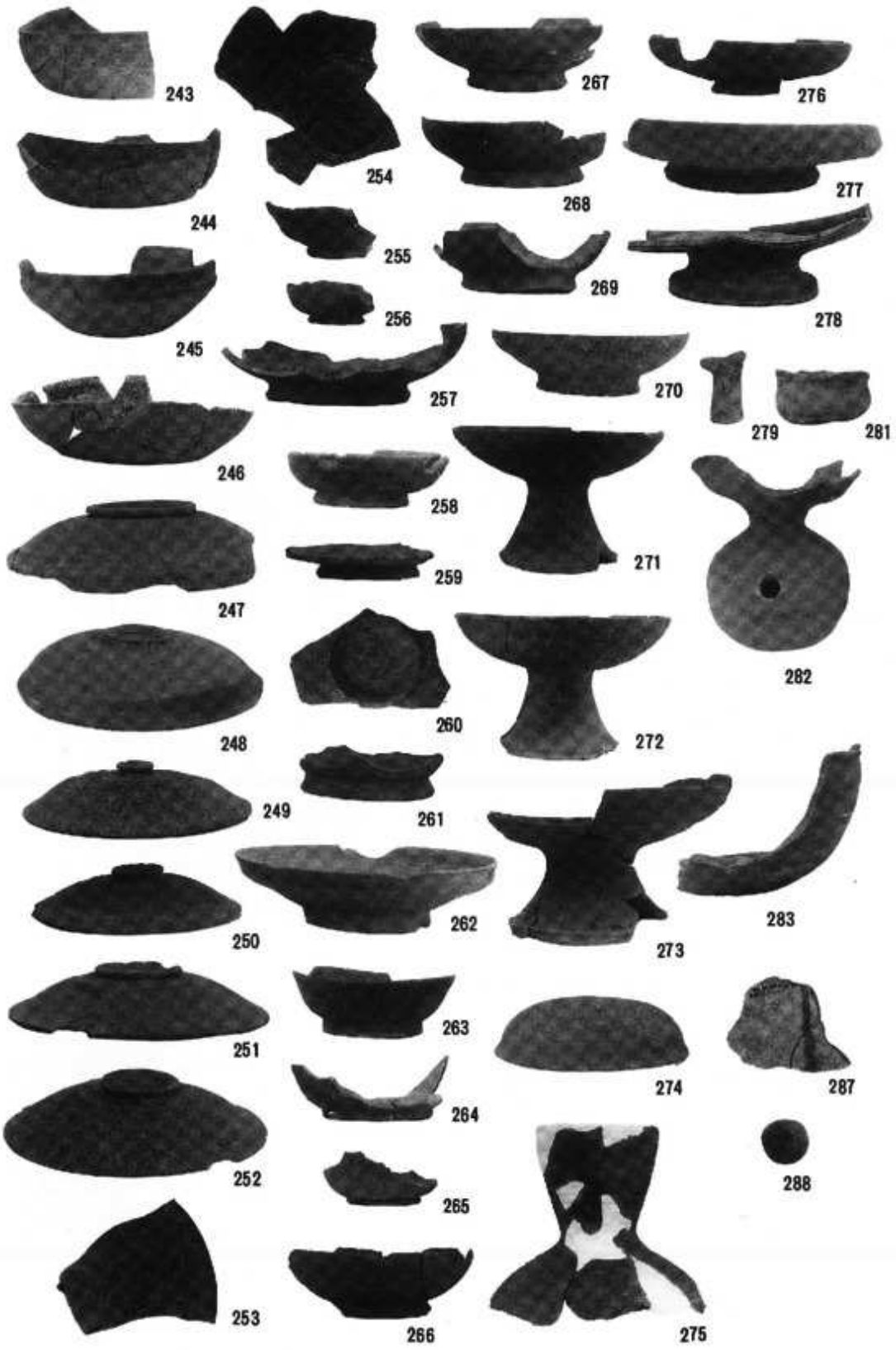
G区4層上面出土遺物



G区4層下面出土遺物


214
215
216
220
221
222
223
224
225
226
227
231
232
235
228
233
236
237
238
239
240
241
229
230
234
242

G区4層下面出土遺物


243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
281
282
283
287
288

G区各層出土遺物

280

285

G区各層出土遺物

284

286

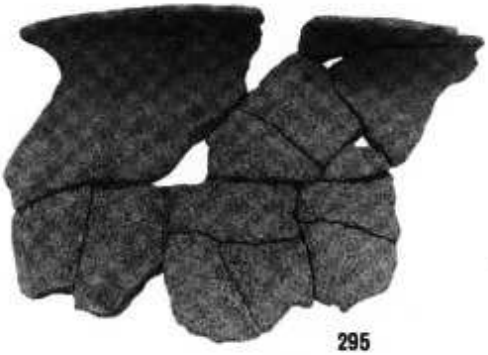
289

290

291

292

294



295

296

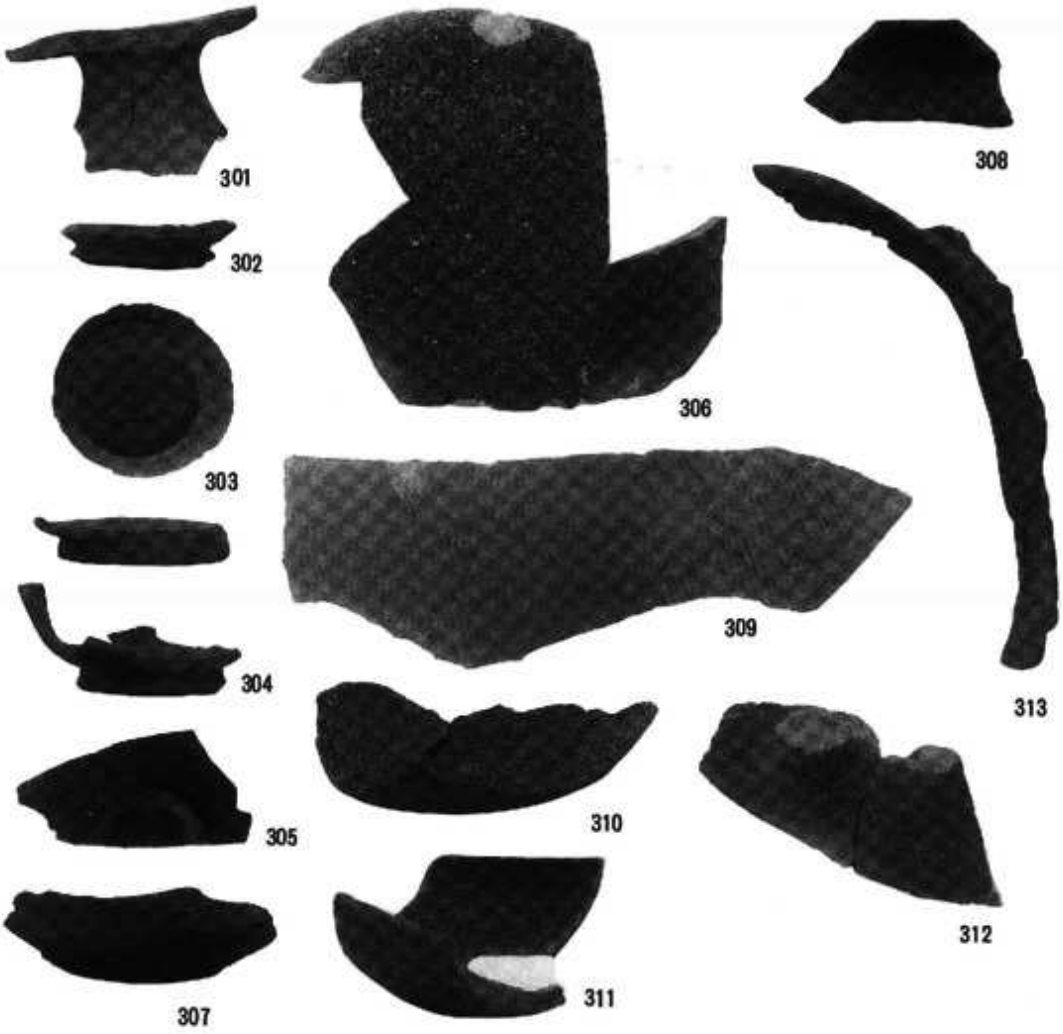
297

298

300

299

下西拡張区生活用具のみの土層群



西拡張区各層出土遺物

Ⅰ，Ｊトレンチ各層出土遺物

池ノ奥窯跡群

池ノ奥窯跡群

1. 調査の経過について

池ノ奥窯跡群の地番は，松江市大井町字池ノ奥904～908である。調査は第1次と第2次に分かれ，窯本体の位置，基数，規模，範囲等を確認することを主たる目的とした。また，これに関連して，灰原や周辺の遺構の確認をおこなった。

(1) 第1次調査

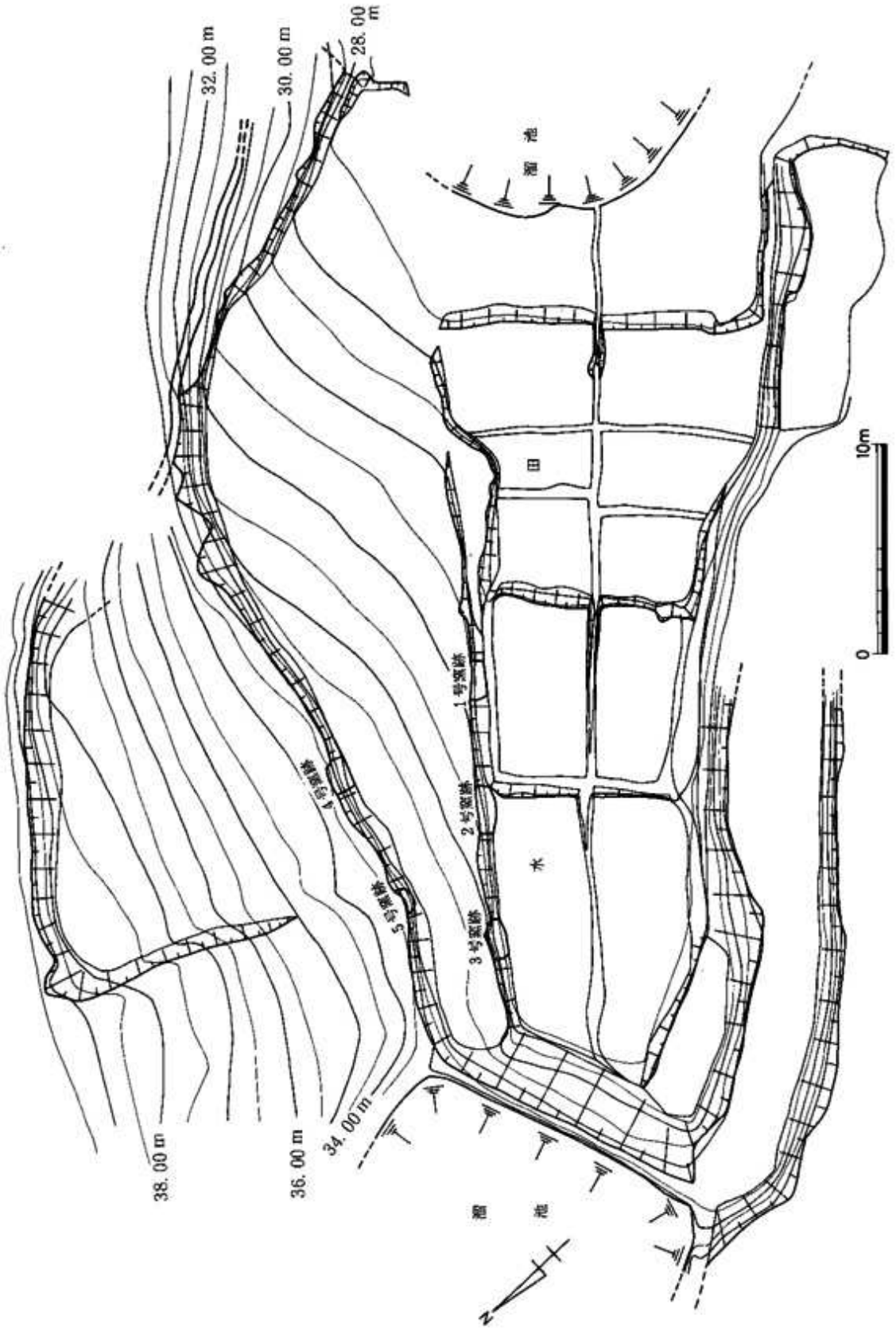
第1次調査は，昭和61年9月18日から昭和62年1月16日までの期間，計77日間を費やして実施した。今次の調査対象区域は二つの丘陵に挟まれた谷間の水田平坦地とその北側に段をもって画されているうちの下段の緩斜面からなる（第1図）。

9月18日より地形測量を始め，遺物散布地と想定した水田平坦地の東側に5×10mの調査区を二ケ所設け，掘削を開始した。当初は全体を5×10mの調査区をもって覆う予定であったが，調査の途中水田のすぐ北側の下段の崖断面に二ケ所，窯体の破片と多数の遺物を伴った黒色炭化物層を検出し，またちょうど翌年度の調査区との境の上段の崖断面で二ケ所，窯体の露出を確認した。よってこれらを下段東から1・2・3号窯跡，上段東から4・5号窯跡と呼称することとした。この状況を受けて，各々の状況をより正確に把握するべく，不定形ながら，第2図に示すように調査区を再編成した。

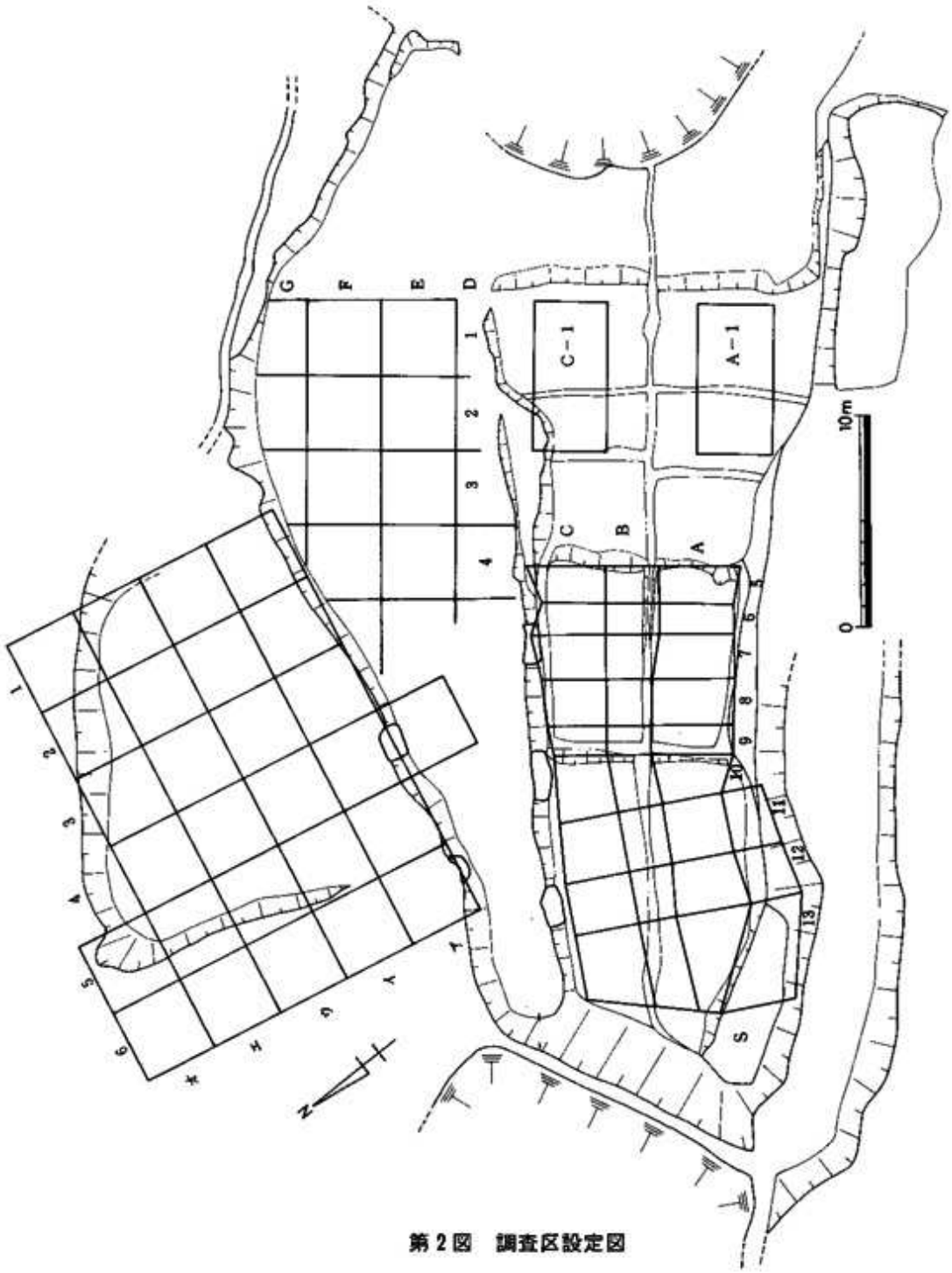
調査の過程で，灰原調査区である水田平坦地の中央を東西に走る排水路より北側の大部分で，後述する“2次堆積層内の灰原層”を検出した。一部南側でも同様な“2次堆積層内の灰原層”が検出されたが，北側とは出土遺物の趣が異なり別の窯跡があったことを窺わせた。またC－5区で6号窯跡を検出したが，これは後述する“灰原層”の直上に構築されていた。本窯跡はかなり削平され天井も崩落し，床面長3.1m程しか残存していなかった。また島根大学理学部の伊藤晴明氏と時枝克安氏に協力を願って，考古地磁気の測定を実施した。

これら一連の動きと平行して，各窯跡の遺存状態を確認する作業をおこなった。その結果，既述の1・2・3号窯跡は窯跡ではなく，1・2号窯跡は灰原の一部，3号窯跡はその形状や出土遺物から別の性格の遺構，であると思われた。4号窯跡は崖断面で確認したところ天井は既になかったが，両側壁は内傾しつつ高さ0.7m，窯体幅2.0mを計った。今次調査で焚き口・燃焼部分の範囲確認調査を実施した結果，焚き口部分を含め長さ6.4m以上を計る堅緻な窯跡であることが分かった。

5号窯跡は4号窯跡の西側に約9mを隔てて位置しており，崖断面に側壁高0.6m，窯体



第1図　調査前地形測量図



第2図　調査区設定図

幅1.8mを計る窯体が露出していた。天井とこれより前面に本来検出されるはずの窯体は後世の削平により消失していた。4号窯跡と比べて，窯体の厚みはそれほどなく脆い印象を受けた。

4号窯跡東側に広がる緩斜面を東部調査区とした。窯跡に隣接しているため，当初工房

跡か工人の生活関連の遺構があるのではないかと予想された。調査の結果，建物とするには至らなかったが20穴以上の柱穴と思われるピットが検出され，出土した遺物に鞴片や土製支脚，土師器の甕などがあること，また東端部分で3基の焼土壙を検出したことと併せて，何らかの生活跡とする可能性が高まった。

今次の調査では特に水田平坦地の調査区で相当の出水に悩まされた。このために灰原と6号窯跡のより深い部分での調査を断念せざるを得なかった。また一部の畦の崩壊により，土層を十分に観察できなかった。これらのことは裏を返して言えば、土器作りに不可欠の水の供給には事欠かなかったという証左と考えることができよう。

(2) 第2次調査

第2次調査は昭和62年4月2日から9月7日までの期間，計100日間を費やして実施した。今次調査は，既にその存在が確認されている4・5号窯跡の精査と窯跡周辺の遺構の有無・性格を確かめることを目的とした。調査区域は，袋とじ図①に示すように第1次調査で4号窯跡を検出した緩斜面とその上段の緩斜面からなり，4号窯跡主軸方向に合わせて5×5mの調査区を設定して掘削を開始し，両窯跡とも覆土を除去してその遺存状態を確認した。

4号窯跡は全長14.3m，最大幅2.0m，窯体の厚みは最大で12～14cmを計った。天井は既に崩落しており，床面上からは須恵器の甕片・蓋坏・高坏等が1,700片以上出土した。遺物を除去して床面を精査した結果，全体的に補修の跡が見られ，燃焼部から焼成部にかけては部分的に二重構造であった。ただし煙道部付近には何らかの原因で穴があいており，この周辺の床面と焚き口・燃焼部の天井は後世の削平により失われていた。窯の周囲には上屋の存在を窺わせる柱穴が，また煙道部上方には溝状の遺構が検出された。

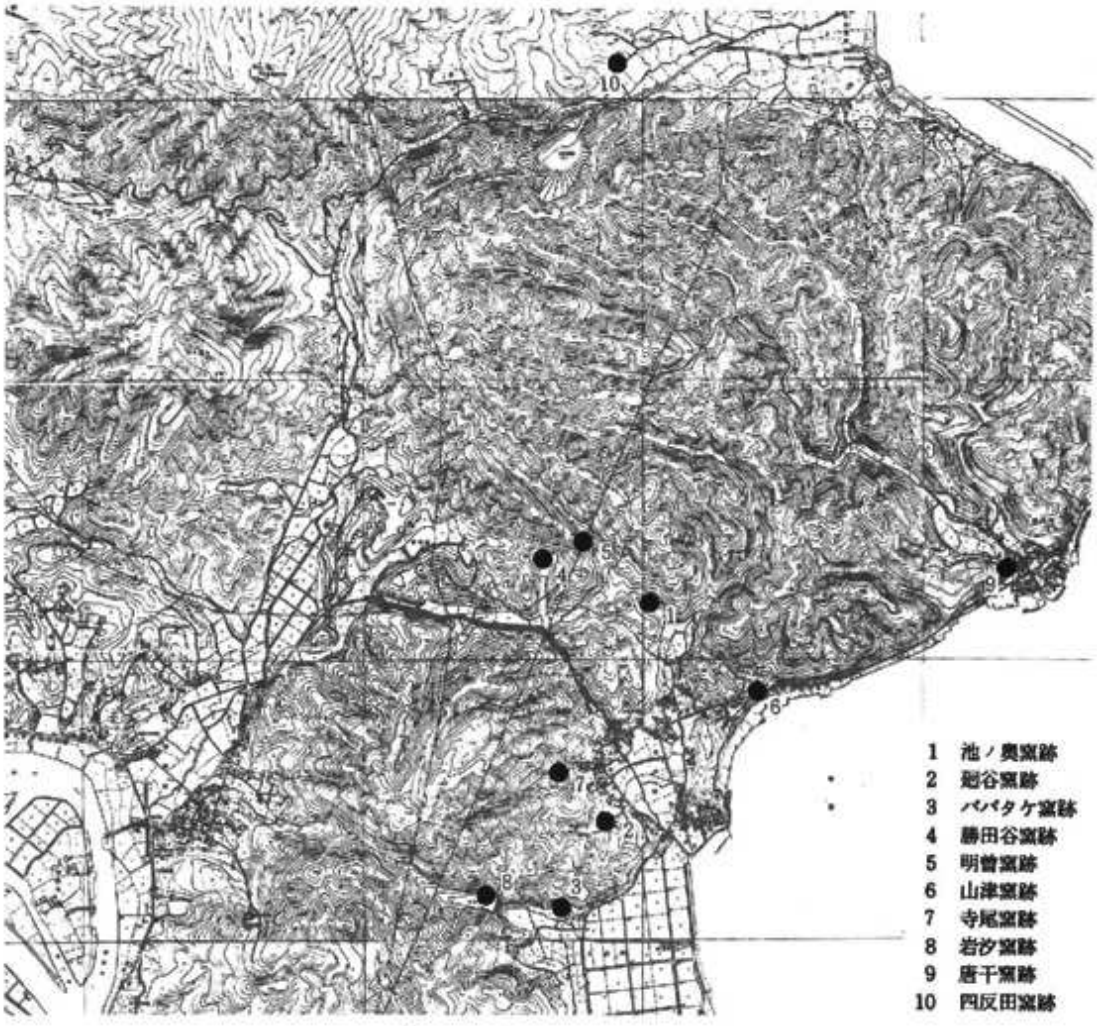
5号窯跡は焼成部から煙道部にかけて残存し，その長さは6.1m，最大幅1.8m，厚み4～10cmを計り，天井の殆どは後世の削平によって消失しており，床面は一重であった。また，両窯跡とも考古地磁気の測定を実施した。

さて，上段の緩斜面地域を北部調査区として調査を実施したところ，北端部では住居址と思われる遺構が認められ，工人集団との関連も想起された。また4号窯跡東側では広範囲に遺物が散布しており，5号窯跡上方では焼土や祭祀用の遺物を検出したが，この他には遺構は認められなかった。

以下に各遺構・遺物の概要を詳しく述べるが，その前に本窯跡群周辺の窯跡について若干紹介しておきたい。

2. 遺跡の立地と周辺の窯跡について

池ノ奥窯跡群は，通称“不動山”（標高 162 m）から南西に派生する丘陵の南向き斜面に位置する。この丘陵は急斜面を呈しながら中海沿岸までせり出し，その所々に狭く細長い谷間を形成しており，本窯跡群はこのうちの一つの谷の南向き斜面に所在していた。そして本窯跡群が所在する谷を“池ノ奥谷”としてより仔細にみると，谷の北と南側に上下二段の緩斜面が，中央部に水田が，東（谷の入り口）と西（谷の奥）側に溜池が，存在する。南北の緩斜面は共に畑のために開墾されていたり，上下二段の緩斜面の間や斜面と水田の間には各々崖断面があり，以前にかなり削平されたことを物語っており，元々の地形を呈してはいない。この谷の北側の南向き緩斜面に 4 ・ 5 号窯跡がほぼ平行して同じ標高に，また 6 号窯跡が谷中央部の北側水田の真下に，構築されていた。



第 3 図　須恵器窯跡分布図

翻ってより巨視的に見ると，通称“不動山”の南側にも独立した通称“城山”（標高114m）があり，これから派生する丘陵も中海沿岸までせり出し，その所々に狭く細長い谷間を形成している。また通称“不動山”の西側には，『出雲国風土記』の“女岳山”と推定されている和久羅山（標高262m）があり[註1]，これから派生する丘陵も急な谷間を形成している。つまり本窯跡群の北・南・西側は三つの山に囲まれ，今Hでもこの谷間を縫うように細い道が通っており，陸路交通の不便な所である。しかしこの東側には中海が広がっており，古代からかなり海路の交通には適していたようである。

このような地形の「大井」地域は，天平5年（西暦733年）2月30日勘造の『出雲国風土記』の島根郡の条に「大井社」とか「大井浜。則ち海鼠・海松あり。又，陶器を造れり。」等と紹介されているように，古代においては一大須恵器生産地域，現代風に言えば一大先進工業地域であったと言え，かなり昔から開けていたことが知られる。そしてこの『出雲国風土記』の記載どおり，現在大井周辺地域ではこれらの狭く細長い谷に点在する8ヶ所の須恵器窯跡群の存在が知られており[註2]，今回報告しようとする池ノ奥窯跡群を加えると9ヶ所になる（第3図）。つまり，この本窯跡群（第3図①）は大井古窯跡群の一支群であると言え，今後も新たな支群が発見される可能性は強いと思われる。

さて大井古窯跡群については，大正14年に野津左馬之助氏が紹介したことに端を発し[註3]，次第に研究成果が蓄積され，今日では廻谷支群（第3図②）で山陰須恵器編年I期[註4]の蓋坏・壷・甕が採集されたり，ババタケ支群（第3図③）・勝田谷支群（第3図④）・明曽支群（第3図⑤）・山津支群（第3図⑥）で奈良時代の須恵器が採集されていることから，本古窯跡群は5世紀末頃から8世紀前半頃まで操業していたと思われていた[註5]。しかし今回の調査の結果，詳しくは後に報告するように，池ノ奥6号窯跡で9世紀～10世紀代[註6]の須恵器を出土したことにより，大井古窯跡群ではさらにその操業期間が長くなり，5世紀末頃から10世紀頃までの約400年以上もの間，操業していたことが分かった。

しかし，これらの各支群の大半が県道敷設工事などによって偶然に発見され，本格的な発掘調査は今回まで実施されなかった。このため従来の研究は各支群から表採された須恵器を手掛かりに進められることが多く，その説得性は弱く，かつ本古窯跡群の実態は未だ解明されていなかった。

さて今までに島根県内で須恵器窯跡の本格的な発掘調査が実施されたのは，益田市の芝・中塚窯跡群[註7]，同市の本片子（ほんかたご）窯跡[註8]，浜田市の日脚（ひなし）窯跡[註9]，松江市の古曽志（こそし）平廻田窯跡[註10]の四ヶ所しかなく，須恵器窯跡研究においては後進県と言わざるを得ない。このような状況の中で今回，出雲地方の古墳時代後期の窯跡の発掘調査が，しかも一支群とは言え当地方の須恵

器生産の中心地域の大井古窯跡群内で実施された。この結果幾つかの新事実が判明したことは，今後の大井古窯跡群の研究や出雲地方の須恵器の研究，ひいては当地方の古墳時代後期の実態の解明にとって新たな指針を与えるものであり，非常に有意義と思われる。

以下，今回の調査の概要を述べ，幾つかの問題点について触れてみたい。

註

註1　加藤義成『修訂　出雲国風土記参究』

註2　大井周辺地域の窯跡群を総称して，「大井古窯跡群」と呼称しているが，この概要を記したものに，
東森市良「大井・大海崎窯跡群」（『島根県大百科事典』　1982）
島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ　窯業関係遺跡』　1985
柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」（『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』1986）
島根考古学会『島根考古学会誌　第6集』　1989
などがある。

註3　島根県内務部島根県史編纂掛編『島根県史　一』　1925

註4　山本清「山陰の須恵器」（『島根大学開学十周年記念論文集　人文科学編』　1960）

註5　佐々木稔・正司健太郎「池ノ奥窯跡」（『考古学ジャーナル』　267号　1987）

註6　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』　1984

註7　大川清・田中義昭・西垣丹三「島根県益田市西平原窯址」（『古代』29・30合併号　1958）

註8　益田市教育委員会『本片子遺跡・木原古墳』　1982

註9　丹羽野裕「島根県日脚遺跡」（『日本考古学年報』36　1986）

註10　島根県教育委員会文化課主事　丹羽野裕氏の御教示による。

3. 調査の概要

(1) 4号窯跡

ア，現　　状

本窯跡は前述のように標高31～35mの南向き斜面に位置しており，本窯跡の西方約9mには5号窯跡が位置する。さて本窯跡は既述のように調査以前から確認されていたが，上下二段の緩斜面が畑として開墾されたり，上段の緩斜面には家畜の牛馬を埋めた墓標が建っていたり，この北側の少し離れたところには穴が一穴開口していたことなどからみて，本窯跡の遺存状態は悪く，かなりの攪乱・削平を受けているものと思われた。また開口していた穴は，窯に関係するものか，後世の攪乱によるものか，全く判断がつかなかった。

イ，窯構造と層位

本窯跡は半地下式無段登窯で，主軸を等高線にほぼ直交させその方向はN－6°48′40″－Eであった。規模は全長14.3m，床面最大幅2.0m，窯体の厚さ12～14cm，床面傾斜角度は18～21°を計り，全体的に“ウナギの寝床”状の細長い平面形を呈していた。

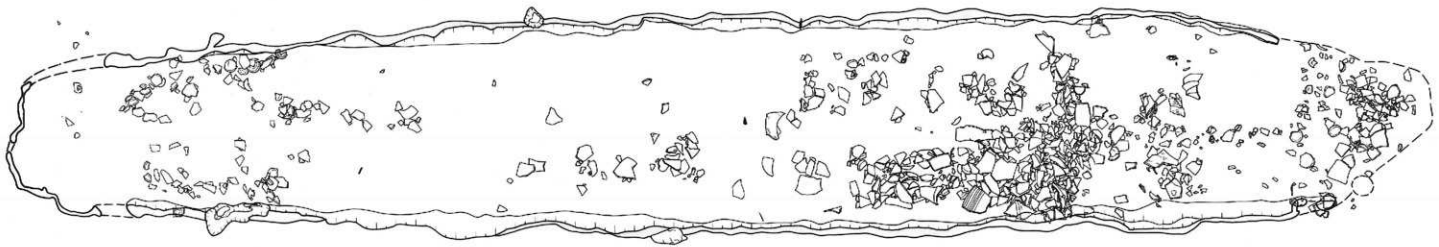
調査前に確認していた穴は，本窯跡の天井の一部の崩落箇所であった。そして天井はすべて崩落していたものの，焚き口部分と煙道部分以外は殆ど攪乱は受けておらず，天井の崩落過程を推定できる程に遺存状況は良好であった。

床面を見ると，煙道部付近に1.7×1.3m，深さ0.8mの楕円形を呈する穴が開いており，ここには床面は存在しなかったが，全体的に補修痕が認められ二重構造になっていた。

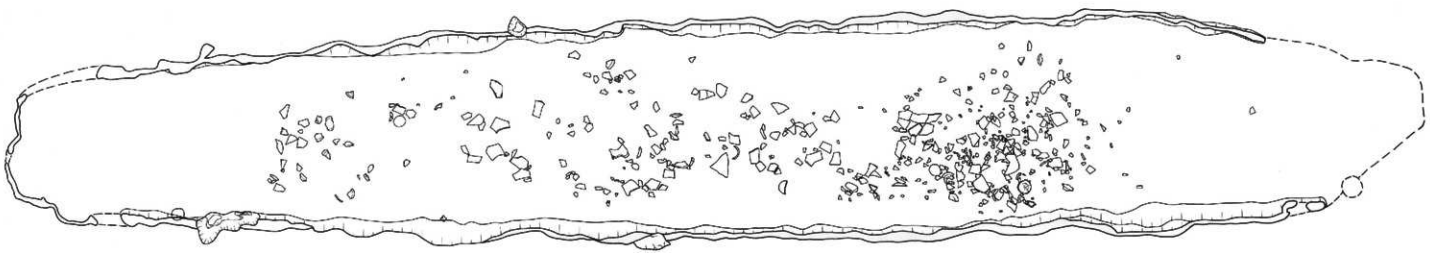
一方，本窯跡の付属施設としては，本窯跡の北側に隣接するように総延長13.2m，上端幅2.2m，深さ30～60cmの“コの字”状を呈する溝状遺構が認められたが，これは雨水などから本窯跡を守るために設けられた“排水溝”と考えられる。そしてこの“排水溝”を詳細に調査した結果，本窯跡の主軸延長線上の地山面に密着した状態で焼土が集中して検出された。このことから，この“排水溝”は“排煙口”をも兼ねたものであったと思われる。また左右の窯体に隣接するように径20cm程の柱穴と思われるピットが10穴程認められたが，これもやはり雨水などから本窯跡を守るために設けられた“上屋”と考えられる。さらに，本窯跡周辺の地形は緩やかな段状を呈していた（袋とじ図②）。

焚き口・燃焼部

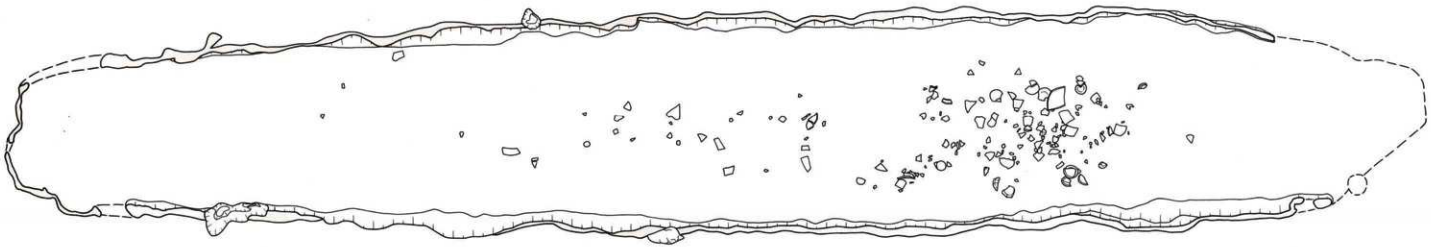
焚き口から3.6m程奥にいった所で窯体が狭まり，また床面の傾斜角度も変わっている。よってこれまでを焚き口・燃焼部とする。長さ3.6m，床面幅は2.0m，傾斜角度は4°程を計り，床面はほぼ平坦である。床面上に柱穴と思われるピットが7穴あり，内2穴は削



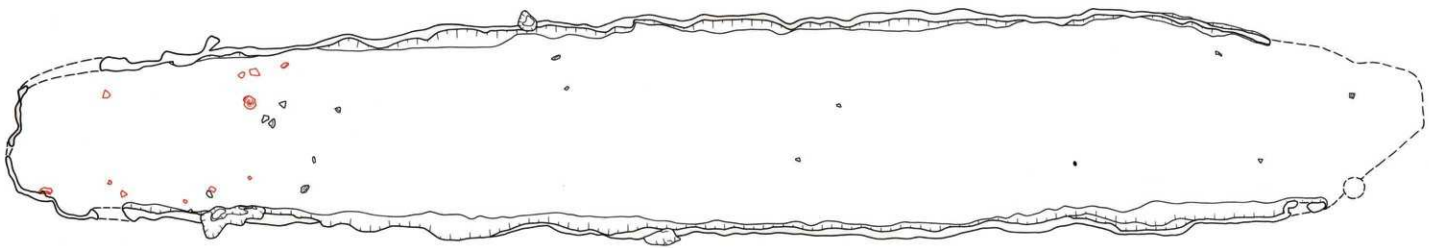
第４図　４号高跡遺物出土状況図①（浮き）



第４図　４号高跡遺物出土状況図②（密着）



第４図　４号窯跡遺物出土状況図③（潜り込み）



第４図　４号窯跡下の床面遺物出土状況図④（密着のものは赤，潜り込みのものは黒）

平面から掘り込まれている。また床面は，一部に黒色炭化物層の中間層を挟む上下二層からなっており，焚き口での厚さは12cmを，燃焼部での厚さは16cmを計る。床面の上に，須恵器・焼土・炭化物を多く含む暗赤褐色土が16cmの厚さで堆積していた。

天井は削平され，焼成部近くに12cm程の厚さをもつその一部が残存していただけで，他には残っていなかった。

焼　成　部

主軸長は10.3m，床面幅は2.0m，傾斜角度は18～21°を計り，燃焼部と比べ若干の広がりを見せるものの，ほぼ“ウナギの寝床”状の細長い平面形を呈していた。焼成部下半の長さ4m余りの床面は厚さ10cm程の一層からなっているが，9ケ所程床面が急速に落ち込みそこに青灰色に還元された砂層が入り，その上からこの落ち込みを補修した形で新たな床面が作られているのが確認された。焼成部上半の長さ2.8m余りの床面は，暗赤褐色土の中間層を挟む上下二層からなっている。また煙道部付近には既述の大穴が開いており，ここには床面は存在せず深く陥没していた。

堆積土をみると，下半部は上から順ににぶい黄橙色土・にぶい褐色土・にぶい赤褐色土がきれいに堆積していたが，上半部は攪乱されたように，にぶい褐色土・褐色土・にぶい赤褐色土・赤褐色土・オリーブ灰色土が天井の窯体片とともに複雑に入り乱れて堆積していた。

天井はよく焼け，還元状態で濃青灰色を呈しており，崩落していたにも拘らずよく残っていた。しかし崖断面付近ではヒビ割れや割れ目の溝が縦横に走っており，床面上まで上下逆転した天井が多くの塊となって落ち込んでいた。このことから焼成部上半の天井に大きな力が加わり天井全体に歪みが生じて，崖断面の方に向かって斜めにずり落ちる形で崩落したものと思われる。そしてE－E'の横断面で天井の復元を試みると，高さ1.6m程になりかなり高い天井であったと思われる。また天井の破片を注意深くみると，天井の内側に竹か木と思われる凹みや藁のような痕跡が認められたことから，従来知られているように，天井・窯壁を構成するための骨組が作られたのちに天井・窯壁用のスサ入粘土が塗られたと思われる。さらに煙道部近くになると，調査以前に確認した天井の一部以外は残存しなかった。

煙　道　部

長さ36cm，床面幅1.1m，残存高19cmを計るが，床面より上は削平されており詳細は不明であった。ただし床面は厚さ12cm程の一重であり，この上には厚さ4cm程の焼土が堆積していた。

ウ，出土遺物

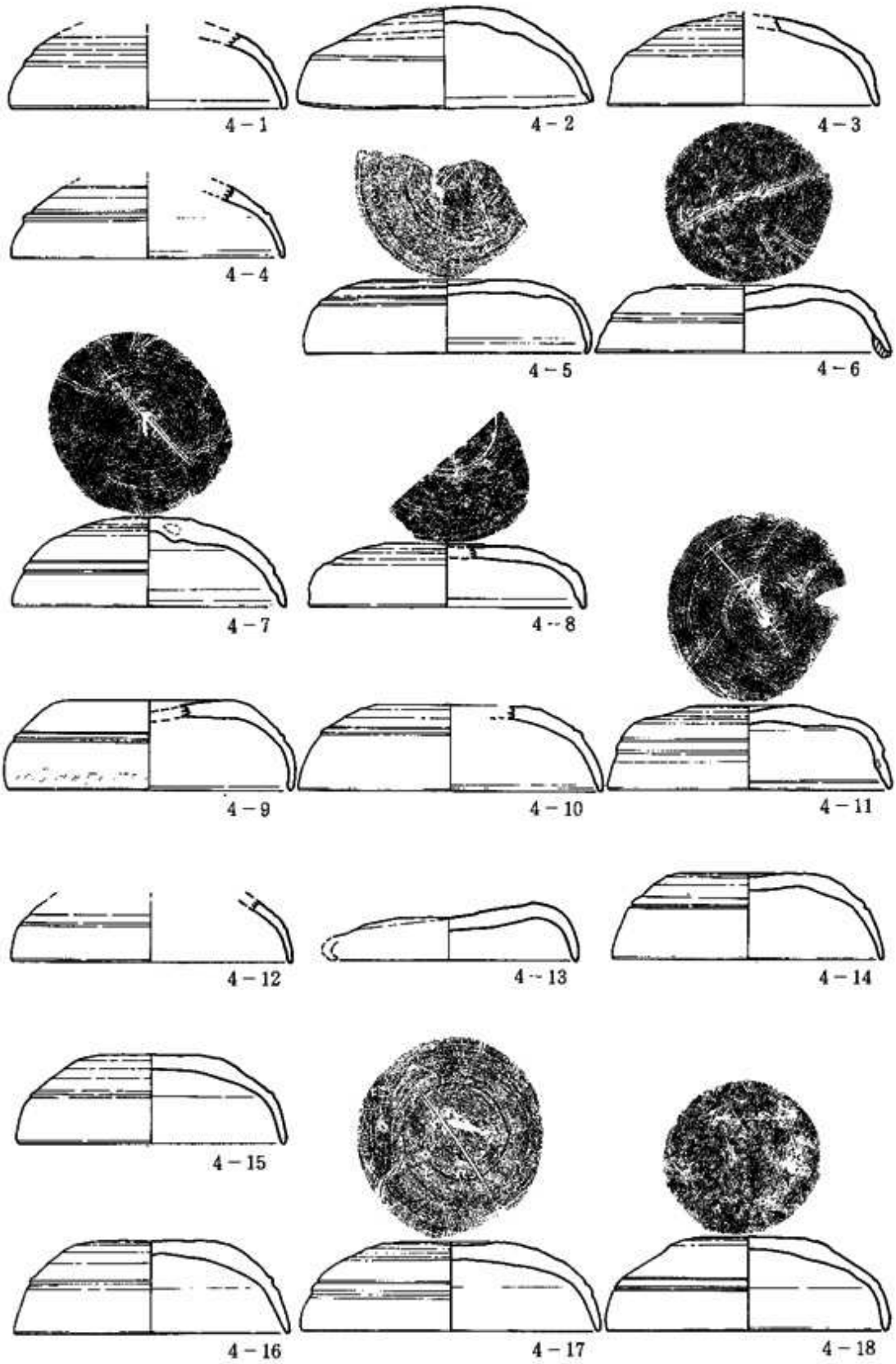
本窯跡から出土した遺物は殆どが破片状態で計1,732片程を数え，これらの器種の割合は，甕が53%，蓋坏が43.6%，高坏が3%，壷が0.3%，提瓶が0.1%であった。

さてこれらの遺物の出土状態を見ると，焚き口・燃焼部と焼成部のちょうど境目あたりにあたかも上の方から転げ落ちて関止まったかのように，器種には無関係に多量の破片が集中して出土した。

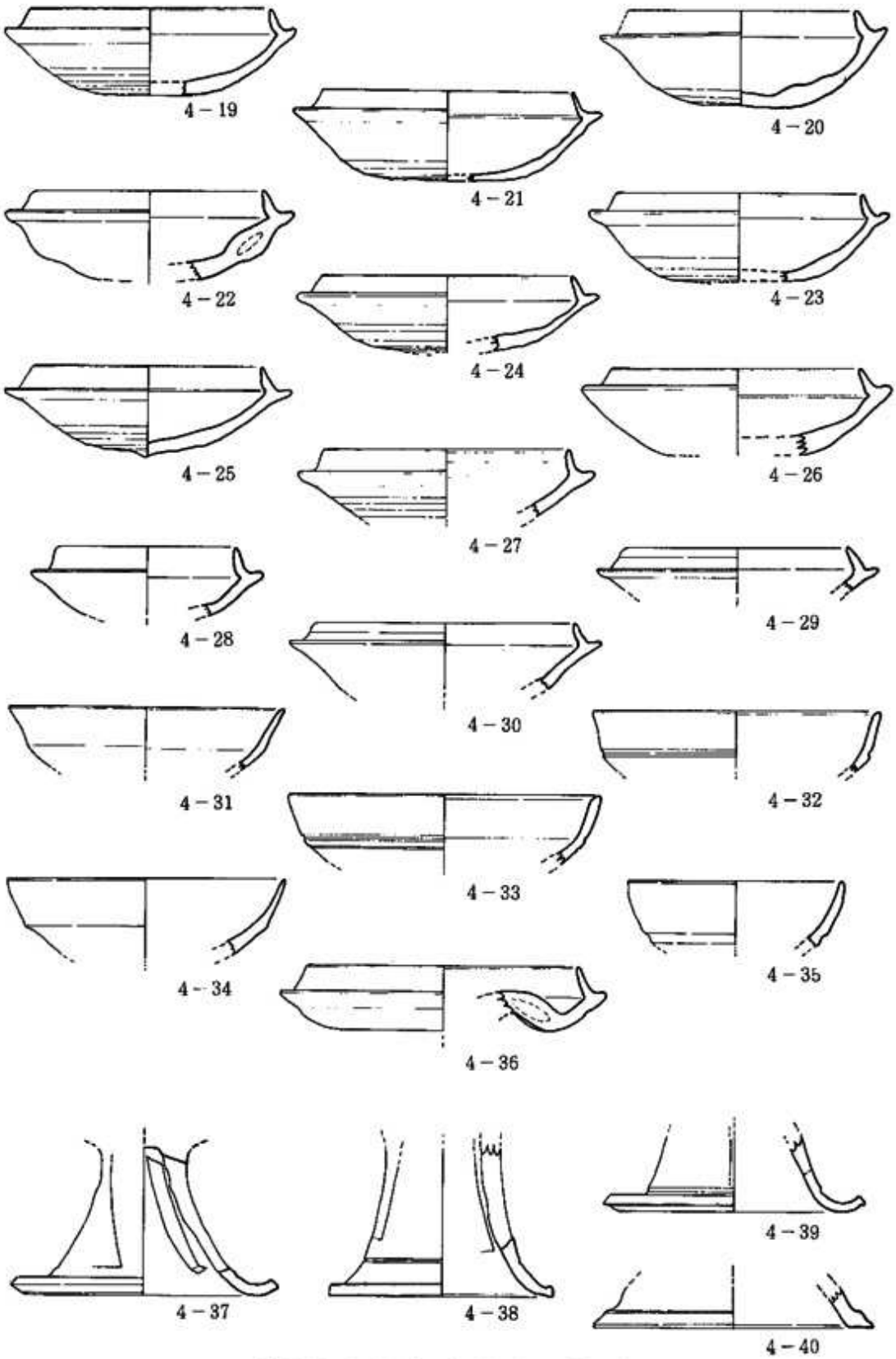
一方，調査時において本窯跡内の全遺物は一点ずつ番号を付け図面に出土位置を落として，「床面より浮いたもの（以下「浮き」とする）」・「床面密着のもの（以下「密着」とする）」・「床面に潜り込んだもの（以下「潜り込み」とする）」と三区分して取り上げたが，上述のことは三区分共に言えることである（第4図①・②・③）。これと共に焼成部の床面に密着した状態で，径30cm程の粘土塊が3個出土した。これは，壷や甕の破片を利用した窯道具（焼き台）と同じ用途をもつものと思われる。また煙道部付近の大穴の周囲からもやや集中して出土したが，この殆どは「浮き」のものであった（第4図①）。更に，出土須恵器の割れ目が二次的な焼成を受けて自然釉が付着していたり，器表面がボロボロの状態を呈するもの（以下「二次」とする）とそうでないもの（以下「非二次」とする）とに注目しながら，遺物の破片接合作業を行った結果，既述の三区分，「二次」・「非二次」や出土位置には無関係に接合したものが多かった。一方，下の床面関係の遺物も既述のようにして取り上げたが，若干の破片しかなかった（第4図④）。

これらのうち実測できたのは計239点であった。上の床面関係の内訳は，浮きの非二次では，坏蓋が18点，坏身が12点，高坏が10点，横瓶・壷が各2点，提瓶の把手・直口壷・壷の蓋・陶棺が各1点，甕が19点，の計67点で，浮きの二次では，坏蓋が24点，坏身が12点，高坏が6点，壷が4点，壺の蓋が1点，壷や甕の破片を利用した窯道具（焼き台）が9点，甕が12点，の計68点で，密着の非二次では，坏蓋が8点，坏身が4点，高坏が1点，直口壷が1点，甕が4点，の計18点で，密着の二次では，坏蓋が16点，坏身が9点，高坏・横瓶が各2点，壺・壺の蓋が各1点，壷や甕の破片を利用した窯道具（焼き台）が1点，甕が11点，の計43点で，潜り込みの非二次では，坏身が1点，高坏が1点，甕が1点，の計3点で，潜り込みの二次では，坏蓋が13点，高坏が2点，壺・壷の蓋が各1点，甕が5点，の計22点であった。

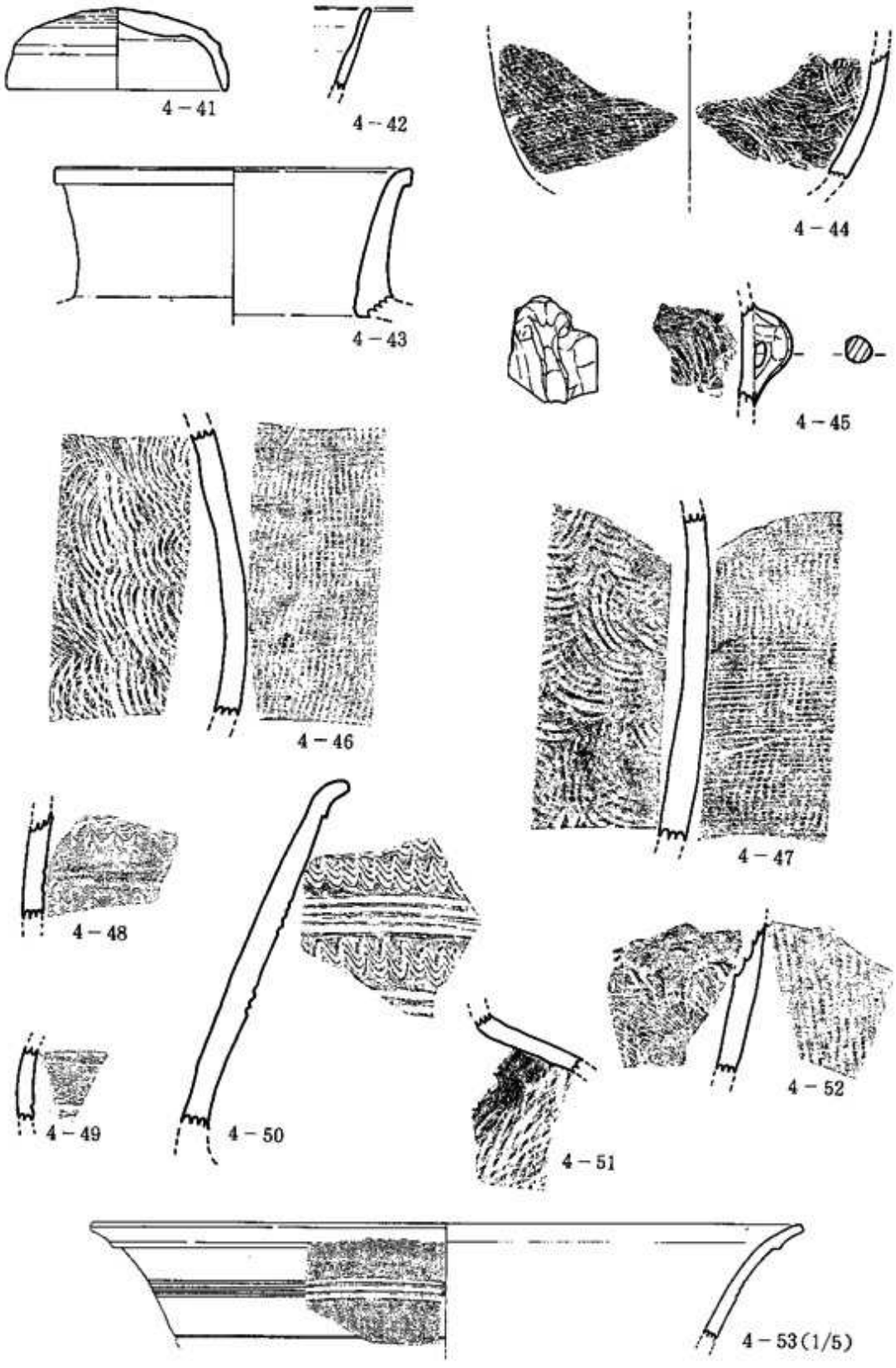
一方，下の床面関係の内訳は，浮きの非二次で甕が3点，浮きの二次で壷や甕の破片を利用した窯道具（焼き台）が1点，甕が3点，密着の非二次で坏蓋が1点，密着の二次で坏身が1点，甕が2点，潜り込みの二次で坏蓋が3点，坏身が2点，高坏が1点，の計17点



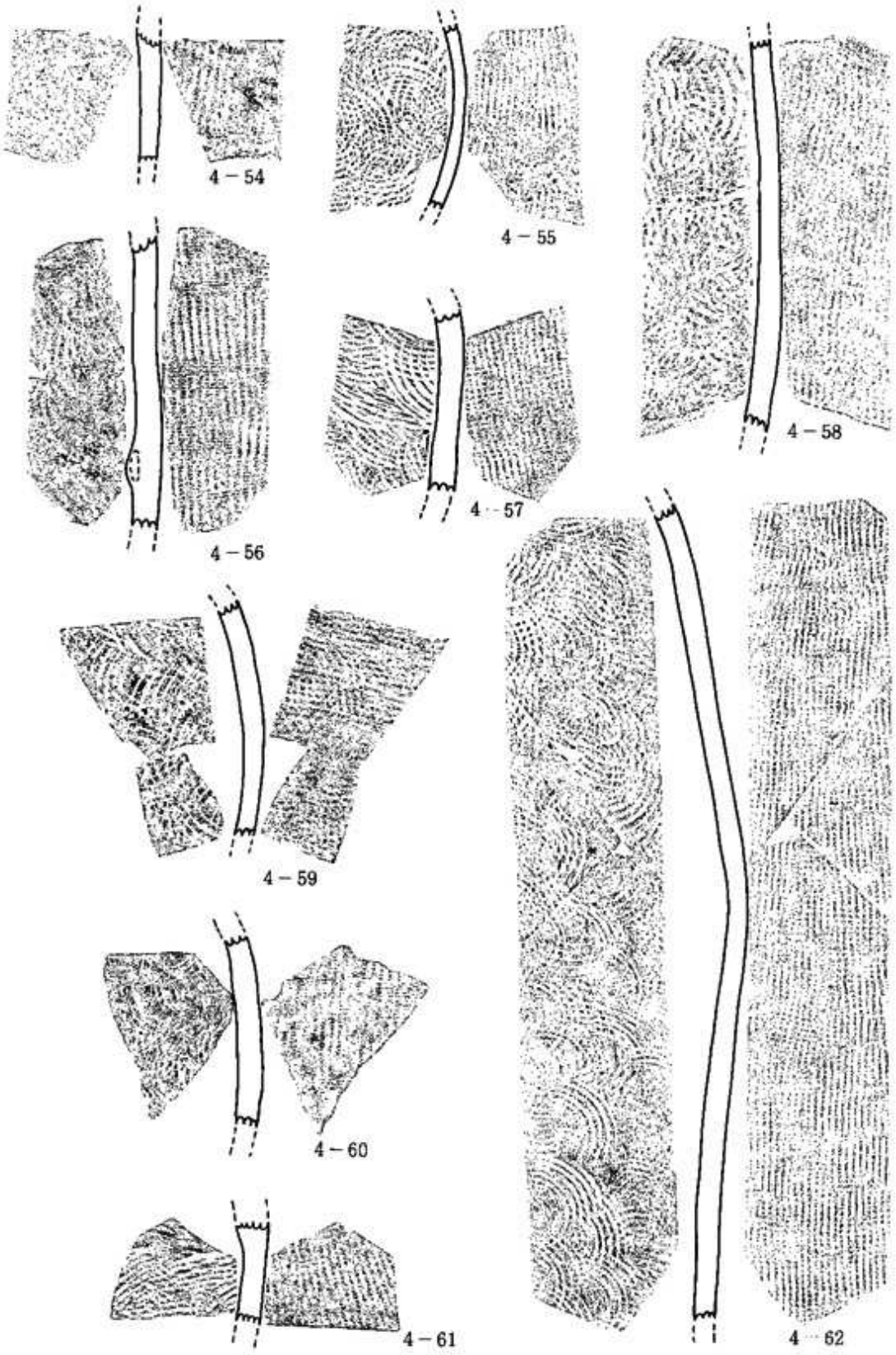
第5図　4号竪跡出土遺物実測図①（1/3）



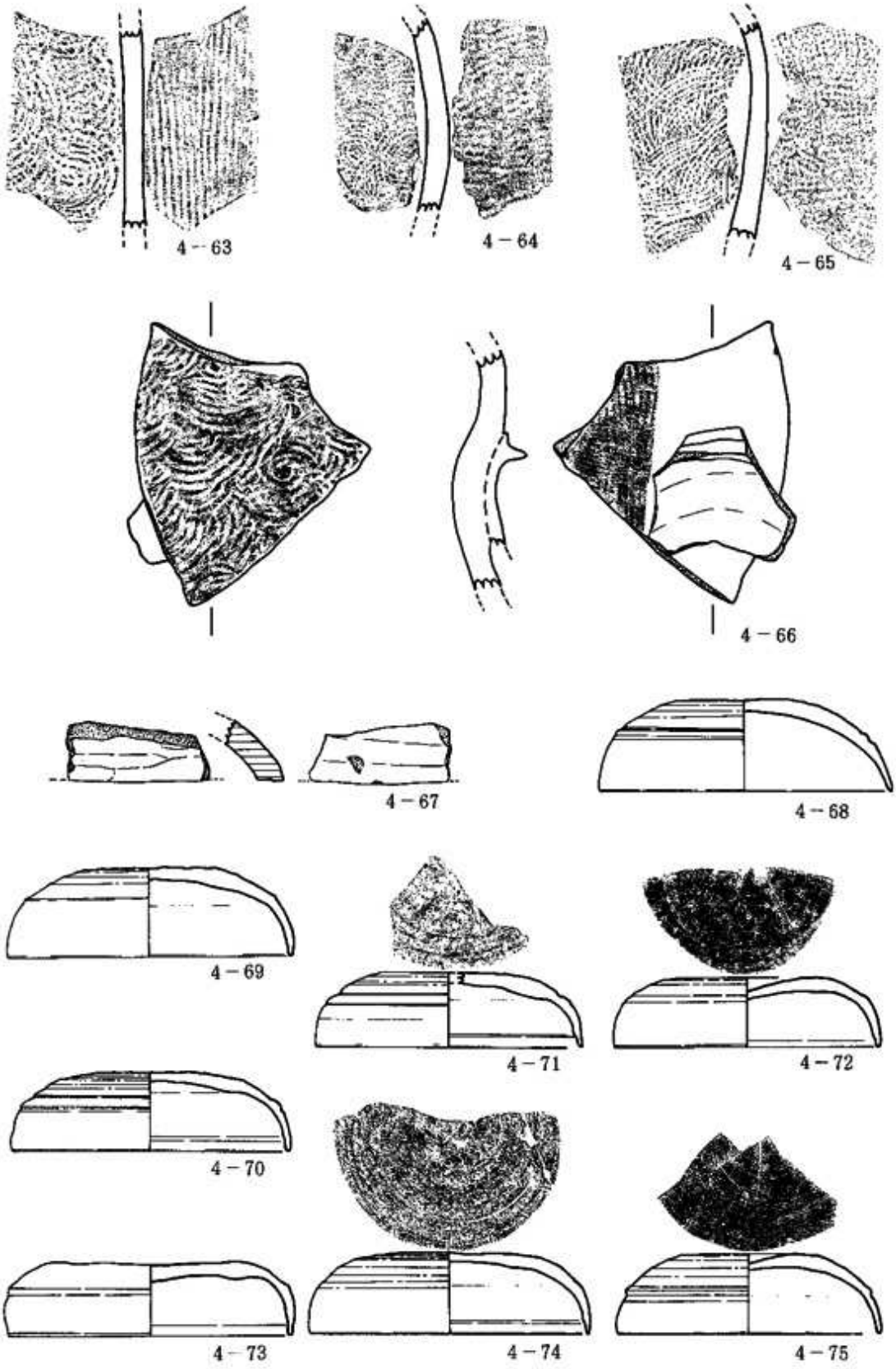
第6図　4号竪跡出土遺物実測図②（1/3）



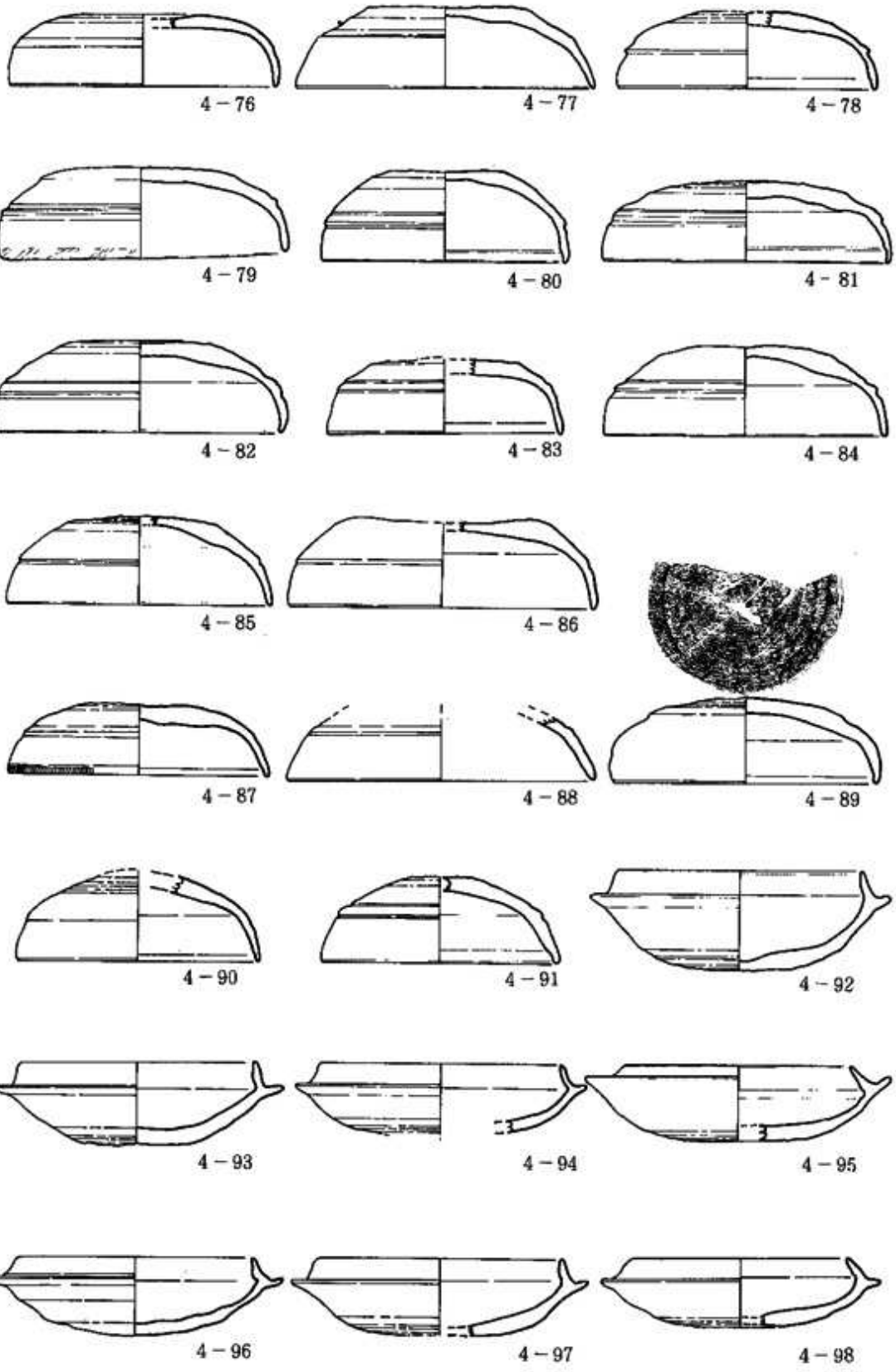
第７図　４号窯跡出土遺物実測図③（1/3）



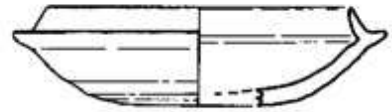
第8図　4号窯跡出土遺物実測図④（1/3）



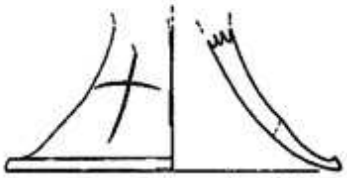
第9図　4号窯跡出土遺物実測図⑤（1/3）



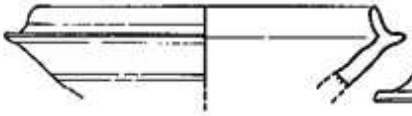
第10図　4号竪跡出土遺物実測図⑥ (1/3)

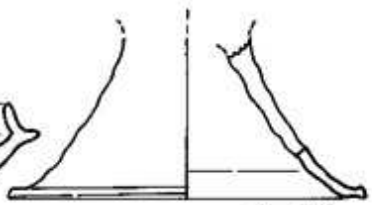

4－99

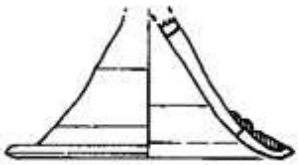
4－104


4－105

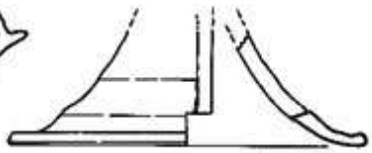
4－100

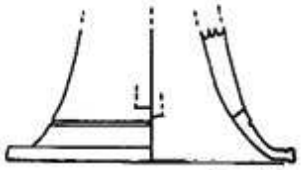

4－101

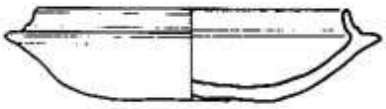

4－106

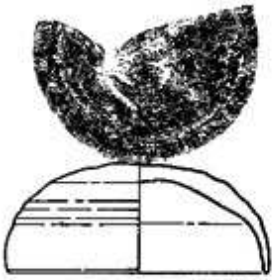

4－107

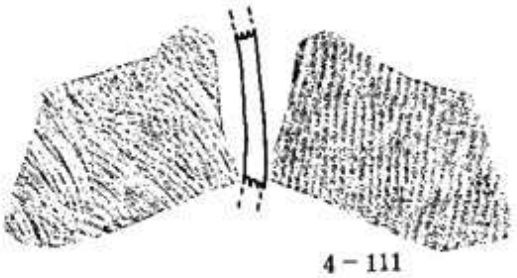
4－102

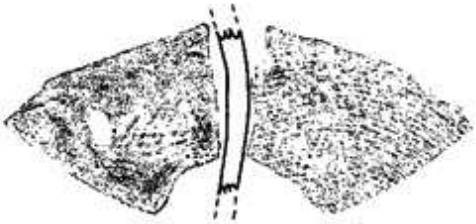

4－108

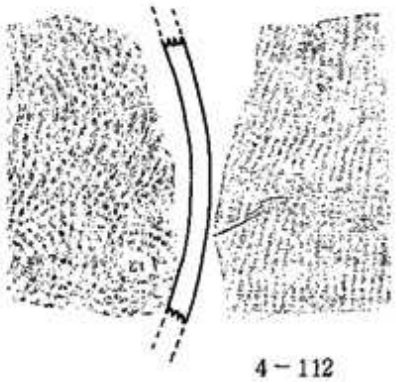

4－109

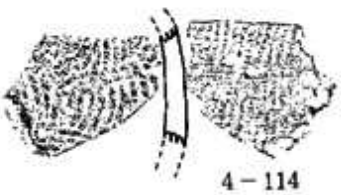

4－103

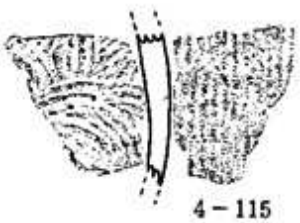

4－110


4－111

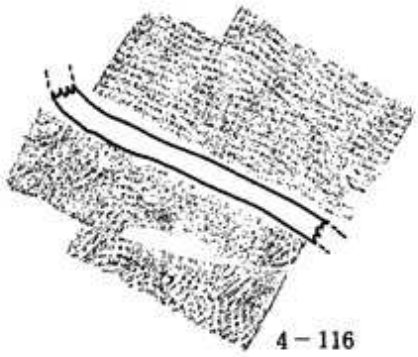

4－113

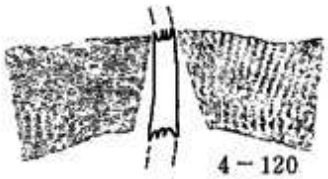

4－112

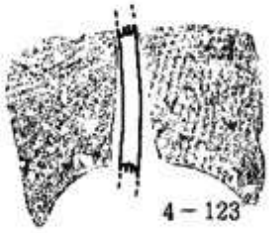

4－114

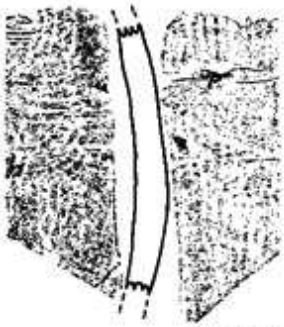

4－115

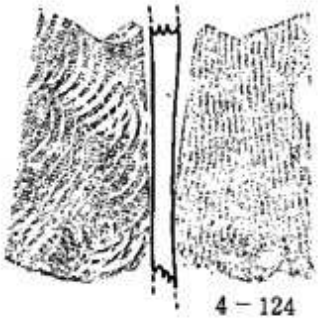
第11図　4号窯跡出土遺物実測図⑦ (1/3)

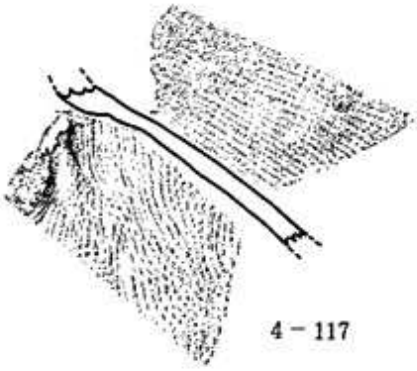

4－116


4－120

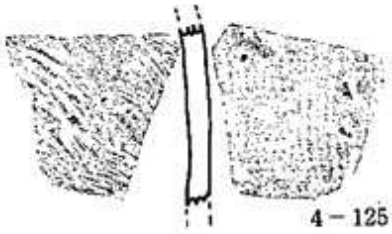

4－123

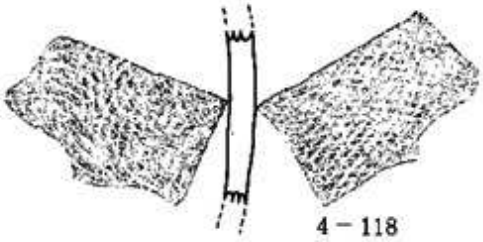

4－121

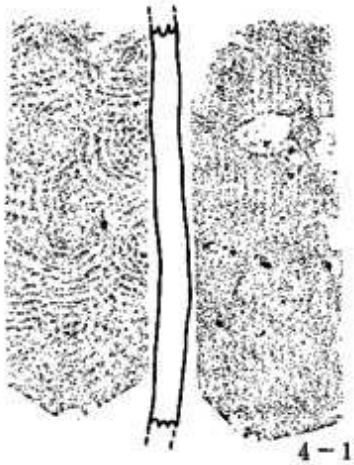

4－124

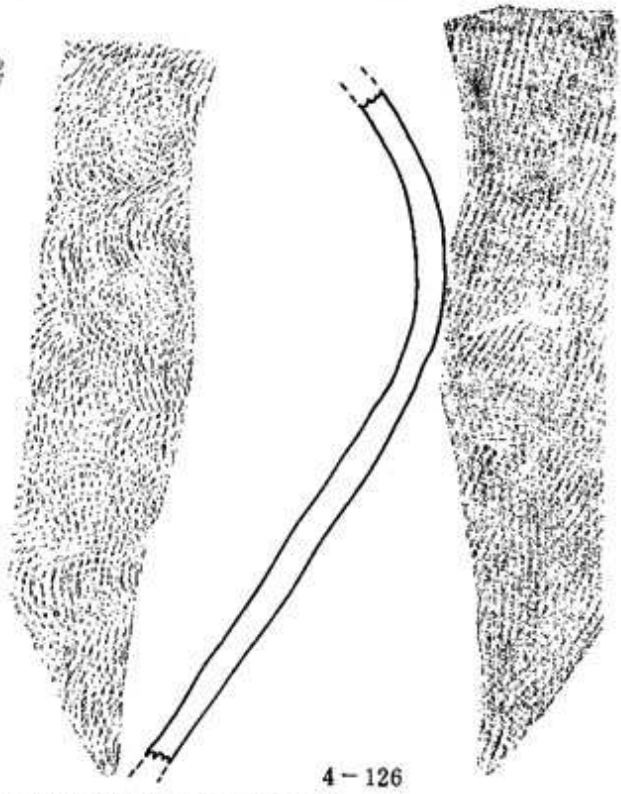

4－117

4－122

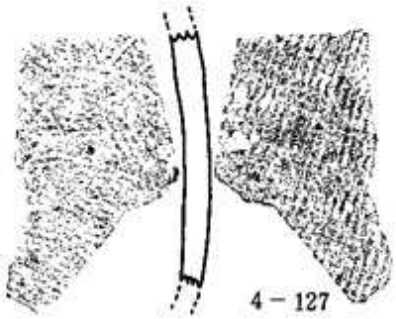

4－125


4－118

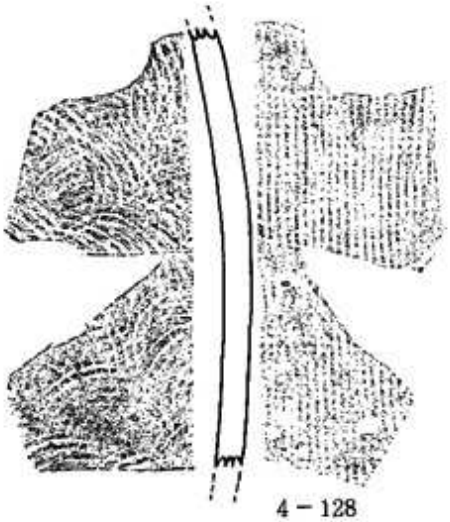

4－119


4－126

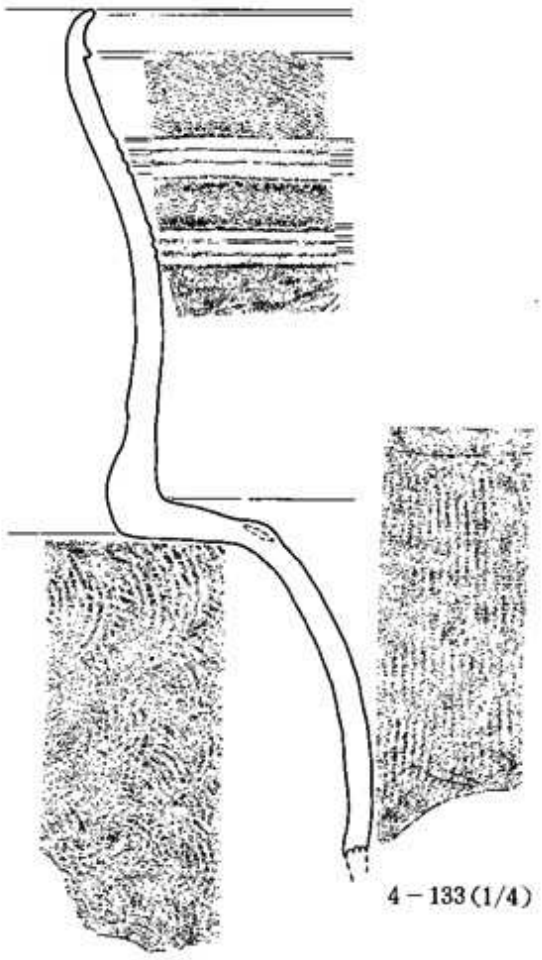
第12図　4号竪跡出土遺物実測図⑧（1/3）



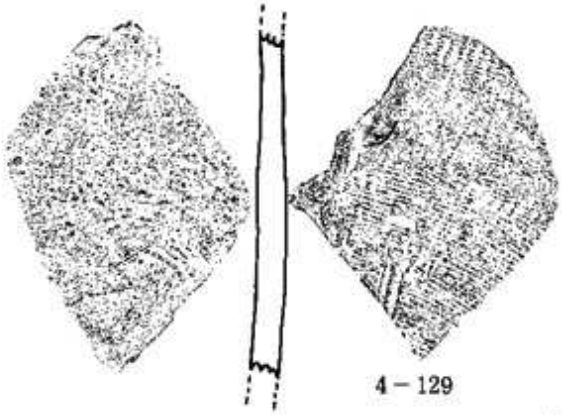
4－127



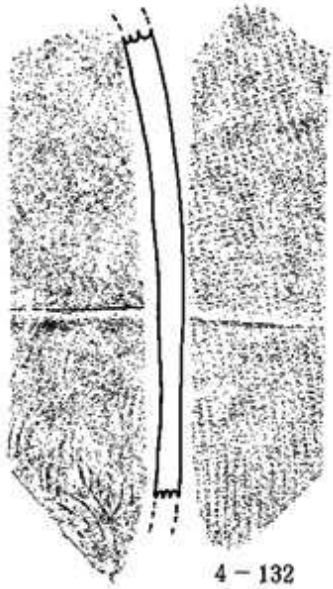
4－128



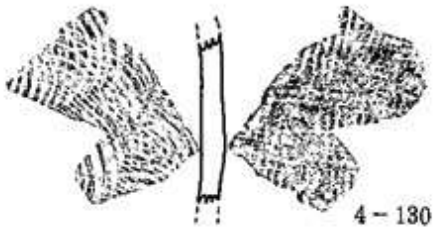
4－133(1/4)



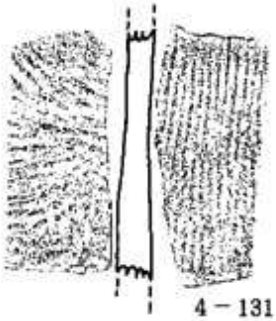
4－129



4－132

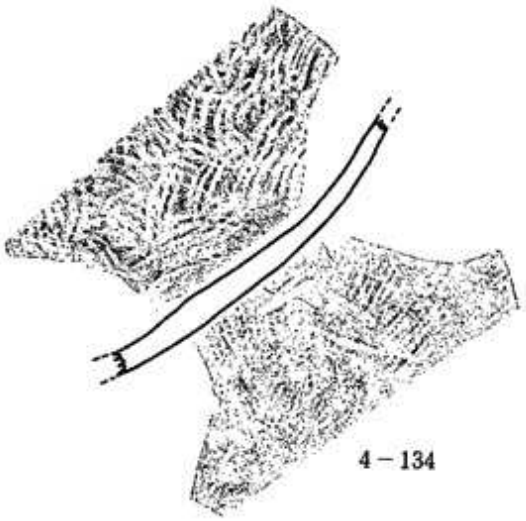


4－130

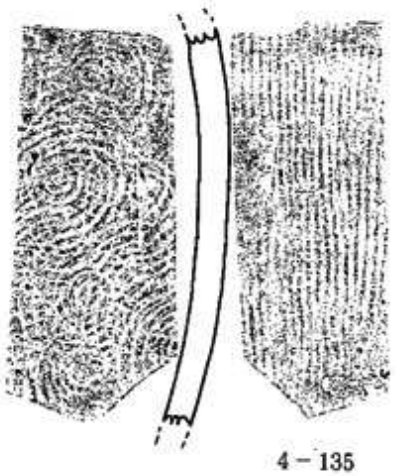


4－131

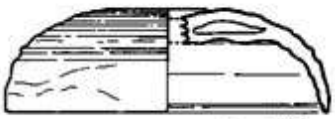
第13図　4号窯跡出土遺物実測図⑨(1/3)



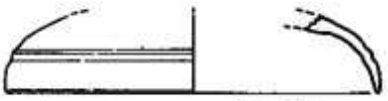
4－134



4－135

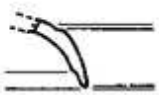


4－136

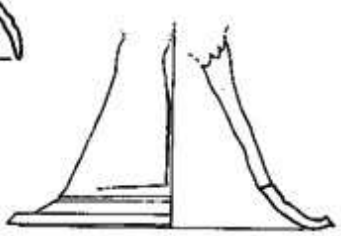


4－142

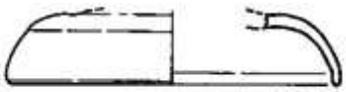
4－137



4－143

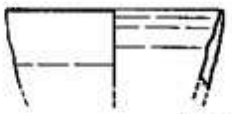


4－148



4－138

4－144

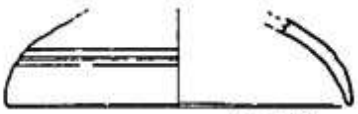


4－149

4－139

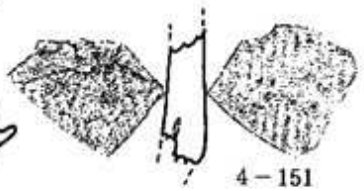
4－145

4－150

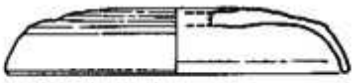


4－140

4－146



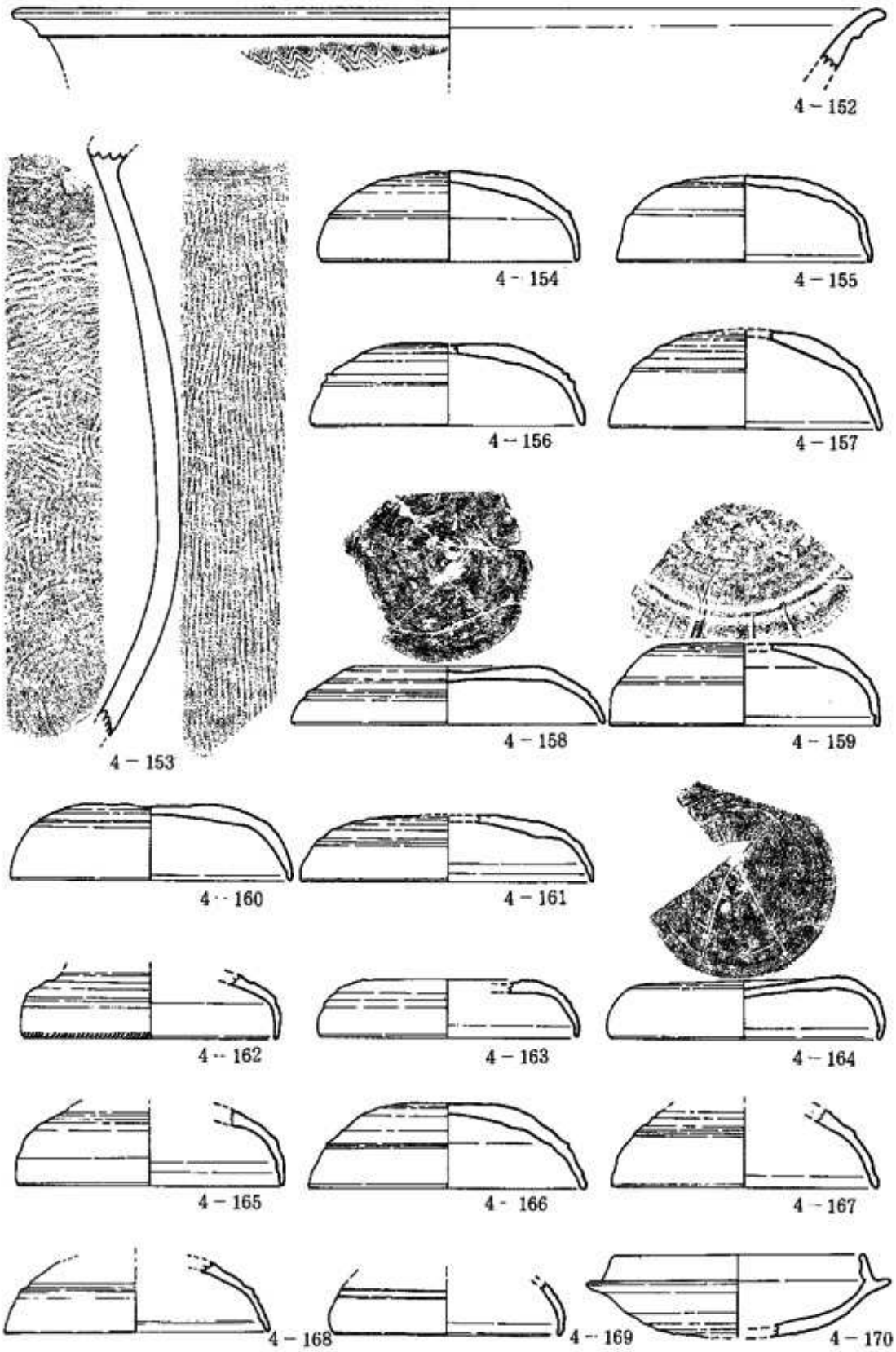
4－151



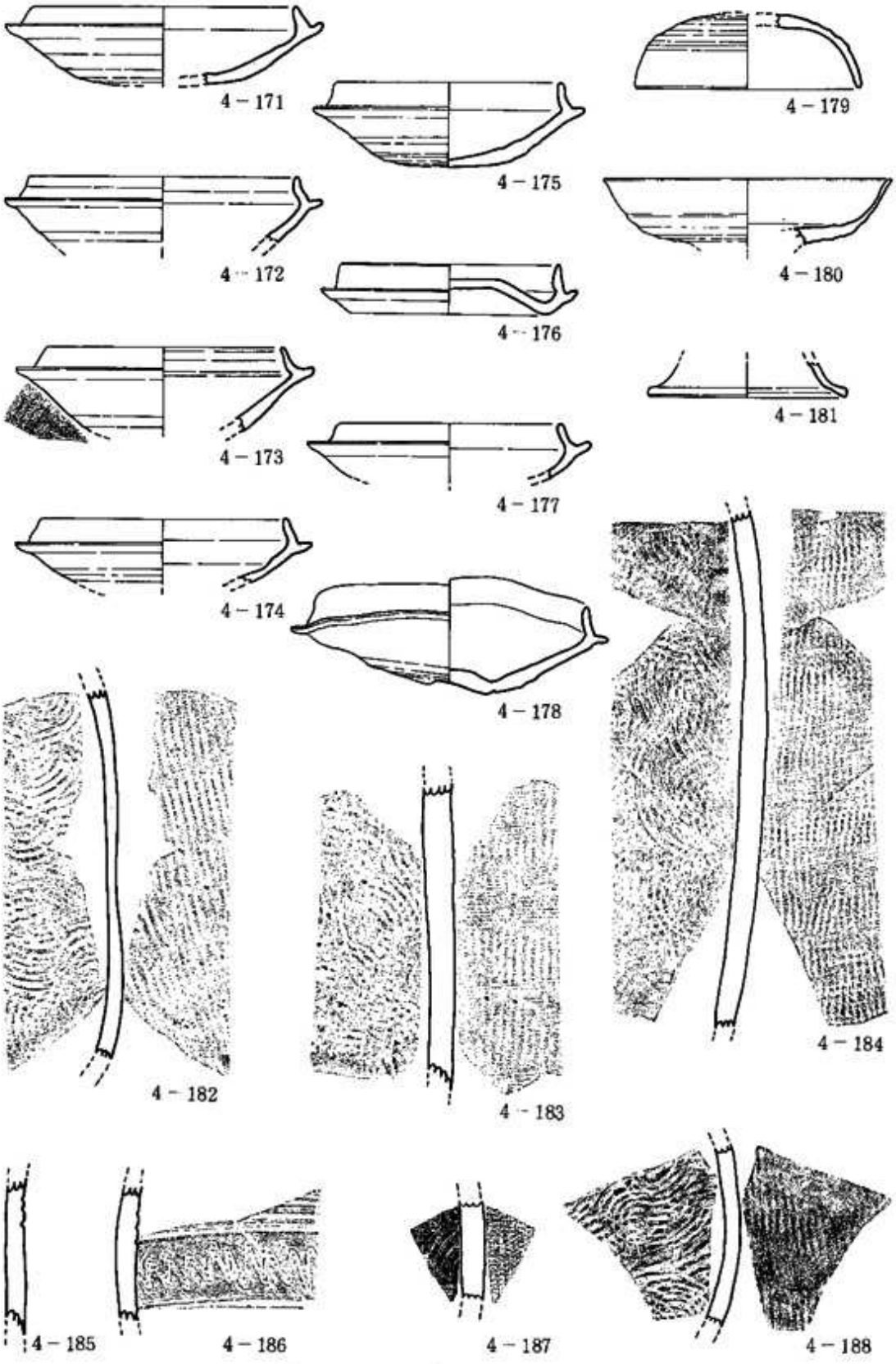
4－141

4－147

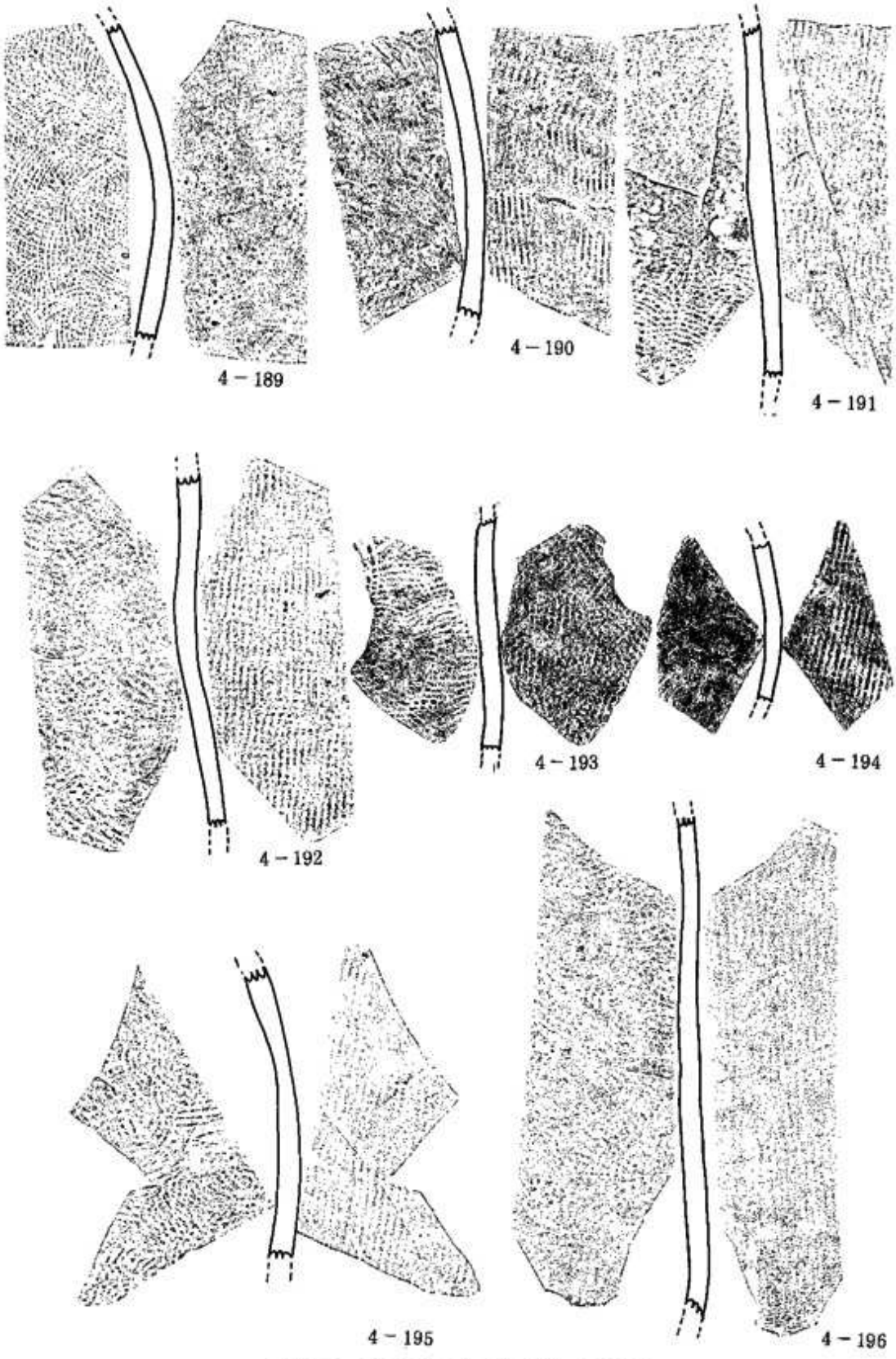
第14図　4号竪跡出土遺物実測図⑩（1/3）



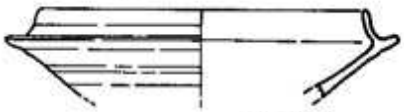
第15図　4号窯跡出土遺物実測図①（1/3）

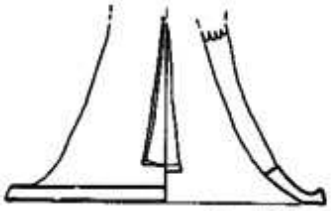


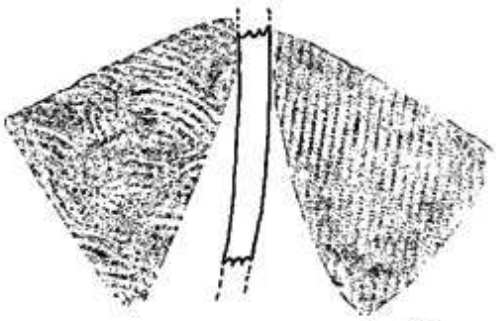
第16図　4号窯跡出土遺物実測図⑫（1/3）

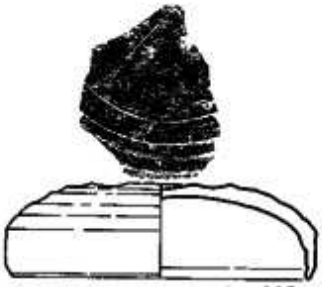


第17図　4号竪跡出土遺物実測図13(1/3)

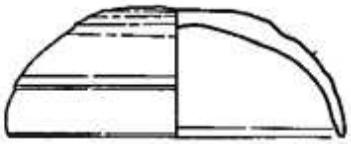

4－197

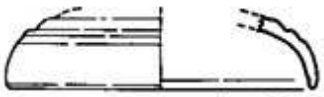

4－198

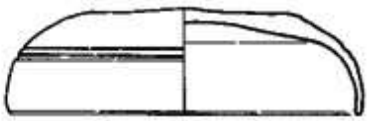

4－199

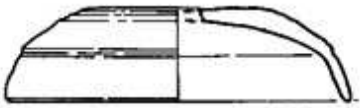

4－202

4－200

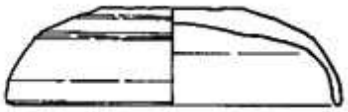

4－201

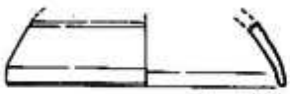

4－203


4－204

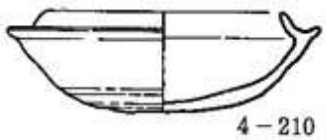

4－205

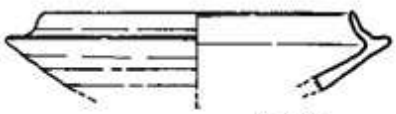
4－206

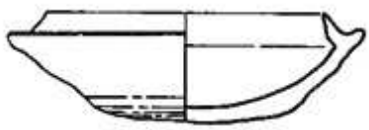

4－207

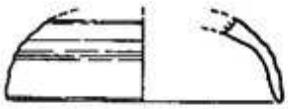

4－208

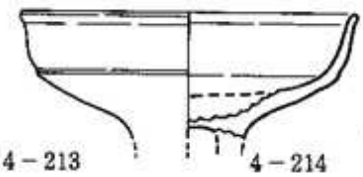
4－209


4－210


4－211

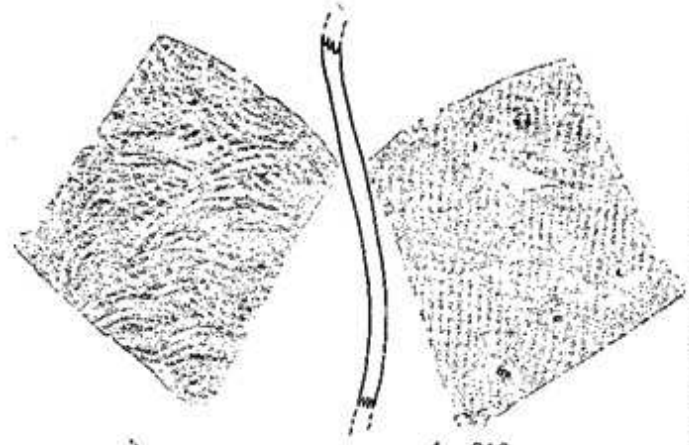

4－212


4－213

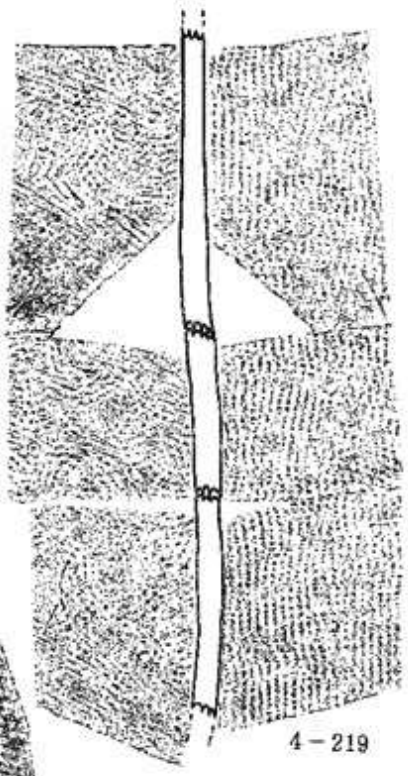

4－214

4－215

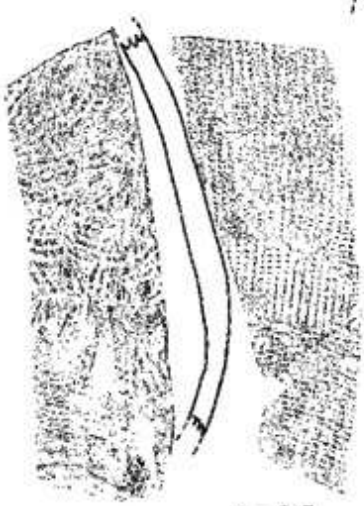
第18図　4号竪跡出土遺物実測図⑭(1/3)



4－216

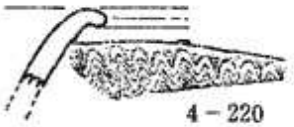


4－219

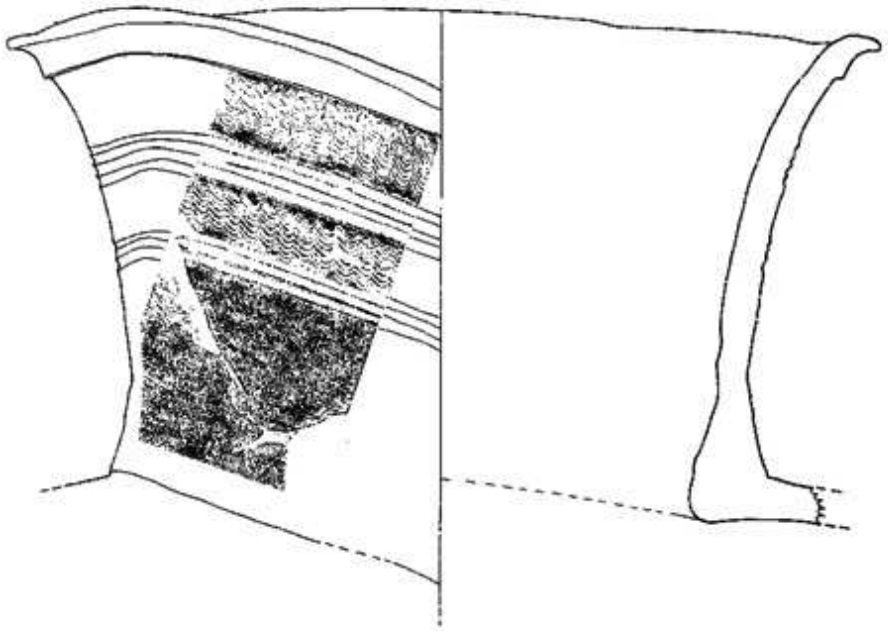


4－217

4－218

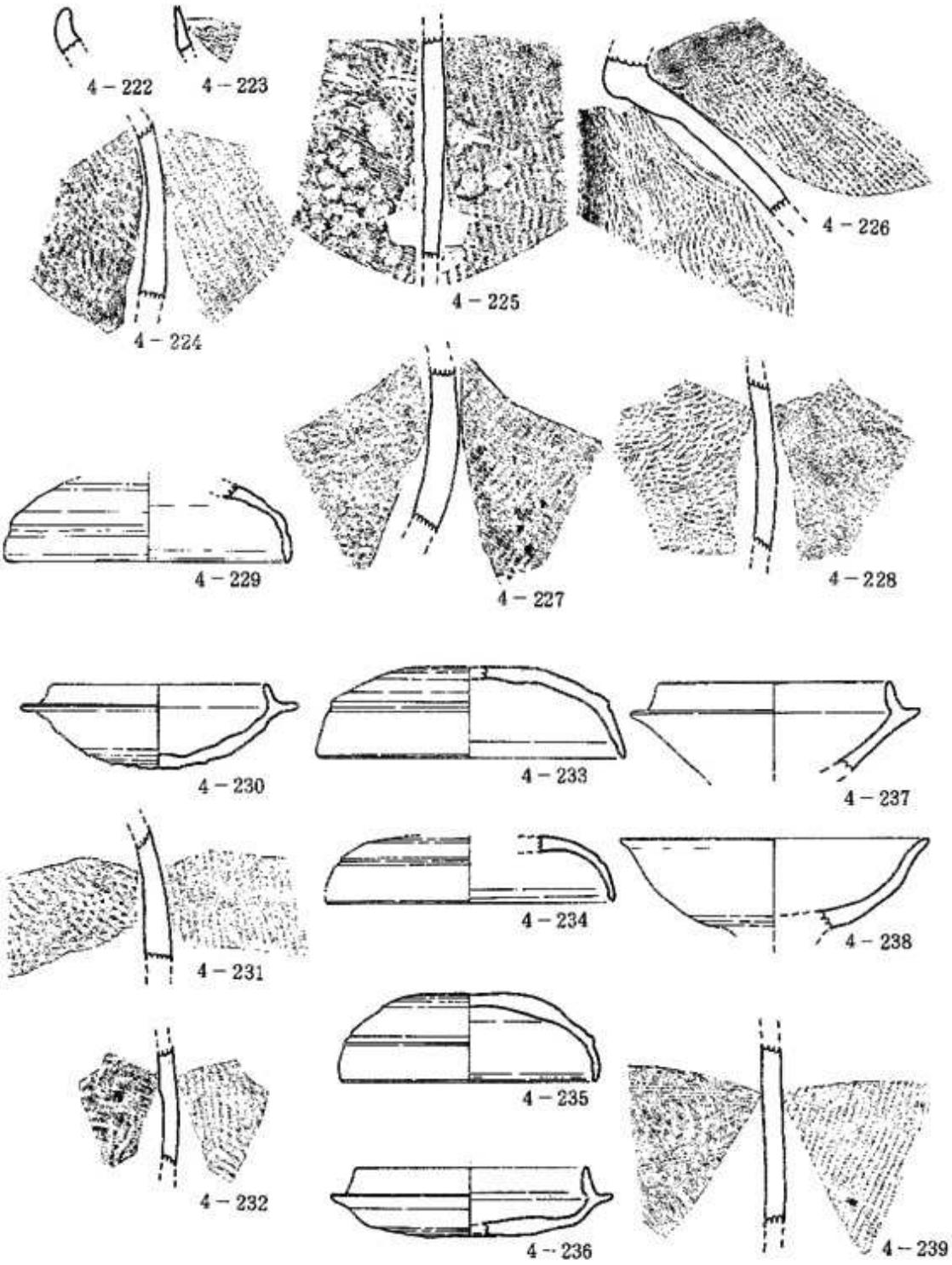


4－220

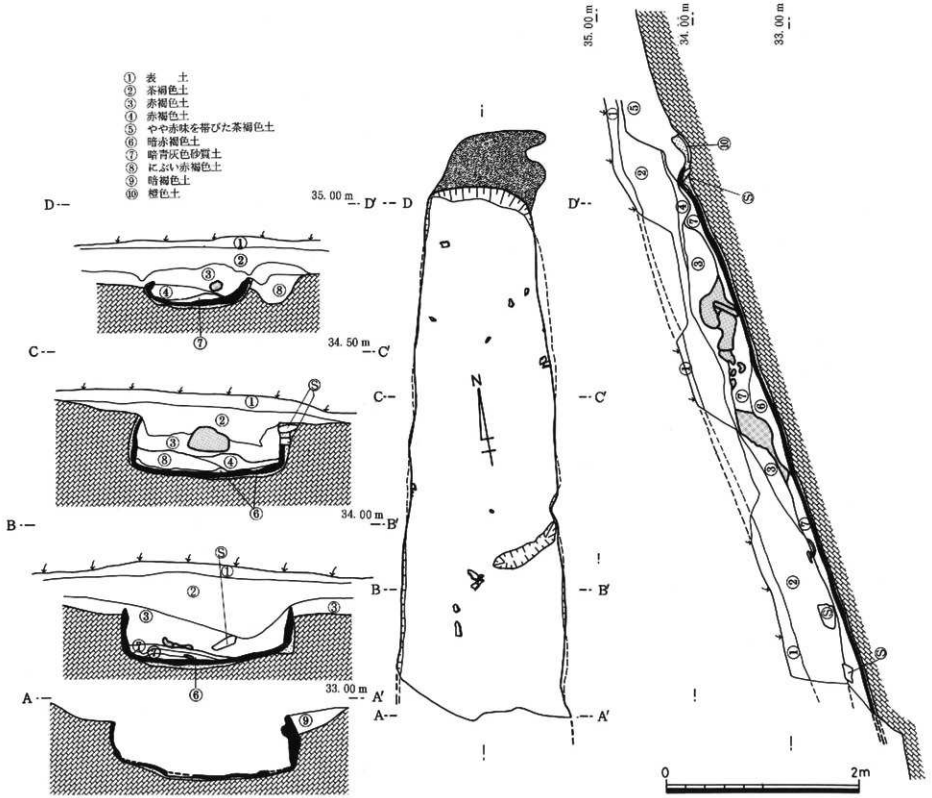


4－221(1/4)

第19図　4号窯跡出土遺物実測図⑮(1/3)



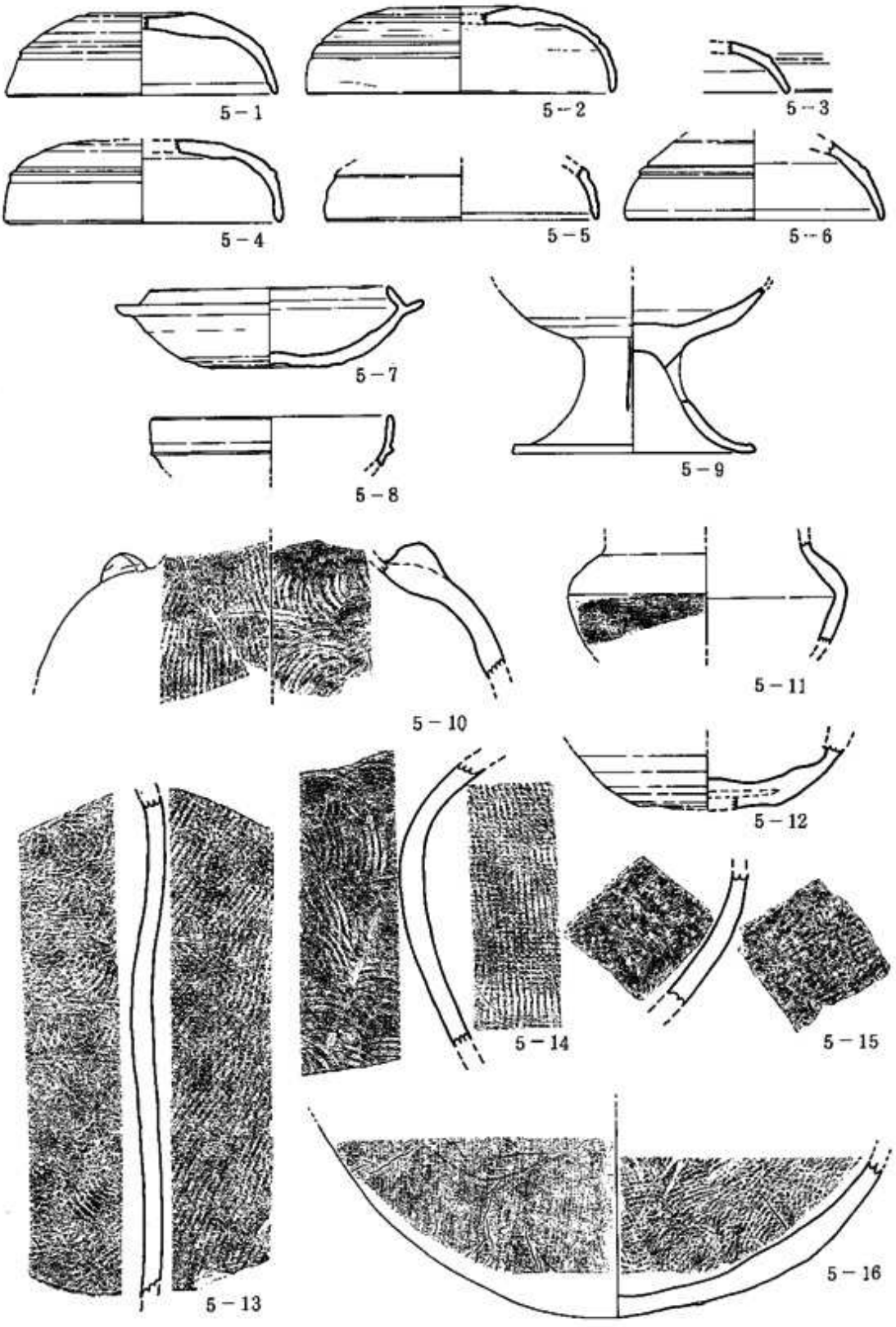
第20図　4号竪跡出土遺物実測図⑯（1/3）



第21図　5号窯跡実測図

であった。更に，下の床面直下の熱変化層（極暗赤褐色土）より出土した甕の胴部片が1点であった。そして，これらの遺物は全体的にほぼ同様な特徴を持っていると思われるので，ここではまとめてその特徴の概要を紹介することにする（第5～20図）。

坏蓋は天井部外面に篦削りを施すが，天井部が高くかつ丸味を帯びる（4－3），天井部が低くかつ平坦である（4－8），器肉がほぼ均一である（4－72），器肉が天井部と口縁部の変換点付近でやや厚くなる（4－18），肩部に稜を持つ（4－78），稜が退化して殆どない（4－13），口縁部内面に沈線を周回させたり段状を呈する（4－136），口縁部が単純である（4－200），等の特徴を持っていた。坏身も底部外面に篦削りを施すが，底部が球形で深い（4－92），平坦で浅い（4－209），器肉がほぼ均一である（4－93），器肉が天井部と口縁部の変換点付近でやや厚くなる（4－212），口縁部がやや外反しながら直立し単純である（4－144），口縁部がやや短く直線的に立ち上がり単純である（4－95），等の特徴を持っていた。そして，天井部が高くかつ丸味を帯び，器肉が天井部と口縁部の変換点付近でやや厚くなり，肩部に稜を持ち，口縁部内面に沈線を周回させる特徴を有する坏蓋（4－201）と平坦で浅く，器肉が底部と口縁部の変換点付近でやや厚くなり、口縁部がやや外反しながら直立し単純である特徴を持つ坏身（4－212）はセットで出土した。よって，これらの特徴を持つ坏蓋と坏身は確実にセットをなすことが言えるはずである。高坏は有蓋（4－36）と無蓋（4－180）とがある。前者は坏身と同様な特徴を有していた。後者は坏部と口縁部の境付近に稜を持つもの（4－33）とそれがないもの（4－238）とがある。脚部は大きく広がり端部外面に平坦面を持つが，三角形の三方あるいは二方透かしの下側に一条の沈線を周回させるもの（4－148）とそれが無いもの（4－107）とがある。（4－43）は，やや外方に緩やかに立ち上がり端部で屈曲し外面に平坦面を持つ壺の口縁部である。壺の蓋は4点あるが，口径が10～11cm，器高3.7～4cmを計り，稜はやや不明瞭で口縁部は単純である。直口壺は2点あるが，外方に直線的に立ち上がる口縁部のみである。横瓶は4点あるが，胴部の破片である。（4－45）は提瓶の把手と思われるが，まだ退化していないものである。（4－67）は陶棺の蓋と思われる口縁部である。窯道具（焼き台）は通常の壺や甕の破片を利用したものであり，割れ目に二次焼成を受けている。甕の口縁部は6点あるが，頸部から緩やかに外方に立ち上がり口縁端部を丸く仕上げその下方に稜を持ち（4－221），3条を一単位とする沈線を周回させその上下に波状文を施している。他は胴部の破片である。また（4－239）は熱変化層より出土した甕であるが，外面に格子状のタタキを，内面に当て具痕を半すり消し状態にした後カキメを，施すものである。



第22図　5号竈跡出土遺物実測図（1/3）

(2) 5号窯跡

ア，現　　状

本窯跡も4号窯跡と同じ斜面に位置しており，本窯跡も調査以前から確認されていたが，天井とこれより前面に本来検出されるべき焚き口・燃焼部の窯体は後世の削平により消失していた。また4号窯跡と比べて窯体の厚みはそれほどなく，後述するように一回の窯入れ・焼成・窯出しの後に何らかの理由で廃棄されたと思われる。

イ，窯構造と層位

本窯跡も半地下式無段窖窯と思われるが，主軸の方向は4号窯跡と少しずれてN－9°37′28″－Eであった。規模は残存長6.1m，床面最大幅1.8m，窯体の厚さ4～10cm，床面傾斜角度は18.5～20.5°を計り，焼成部の一部から煙道部にかけて残存していた。また天井はすべて崩落しており，削平もひどく殆ど残ってはいなかった。床面を見ると4号窯跡と大きく異なり，厚み3～6cmを計る程非常に薄く全体的に一重構造であった。

さて本窯跡の主軸延長線上にも集中的に焼土が認められ，4号窯跡と同様な排煙口があったと思われる（第21図）。

焼　成　部

主軸残存長は5.9m，床面幅は1.8m，床面の厚さは3～6cm，床面傾斜角度は18.5～20.5°，側壁の厚さは4～10cmを計り，煙道部に向かって少しずつ狭まっていく細長い平面形を呈していた。床面は前述のように非常に薄く，窯入れ・焼成は一回であったと思われる。床面上には，窯体ブロックを多量に含む暗青灰色砂層と暗赤褐色土が4～16cmの厚さで堆積していた。天井は前述のように崩落していたが，所々に天井の塊が床面上まで落ち込んでいたのが確認された。

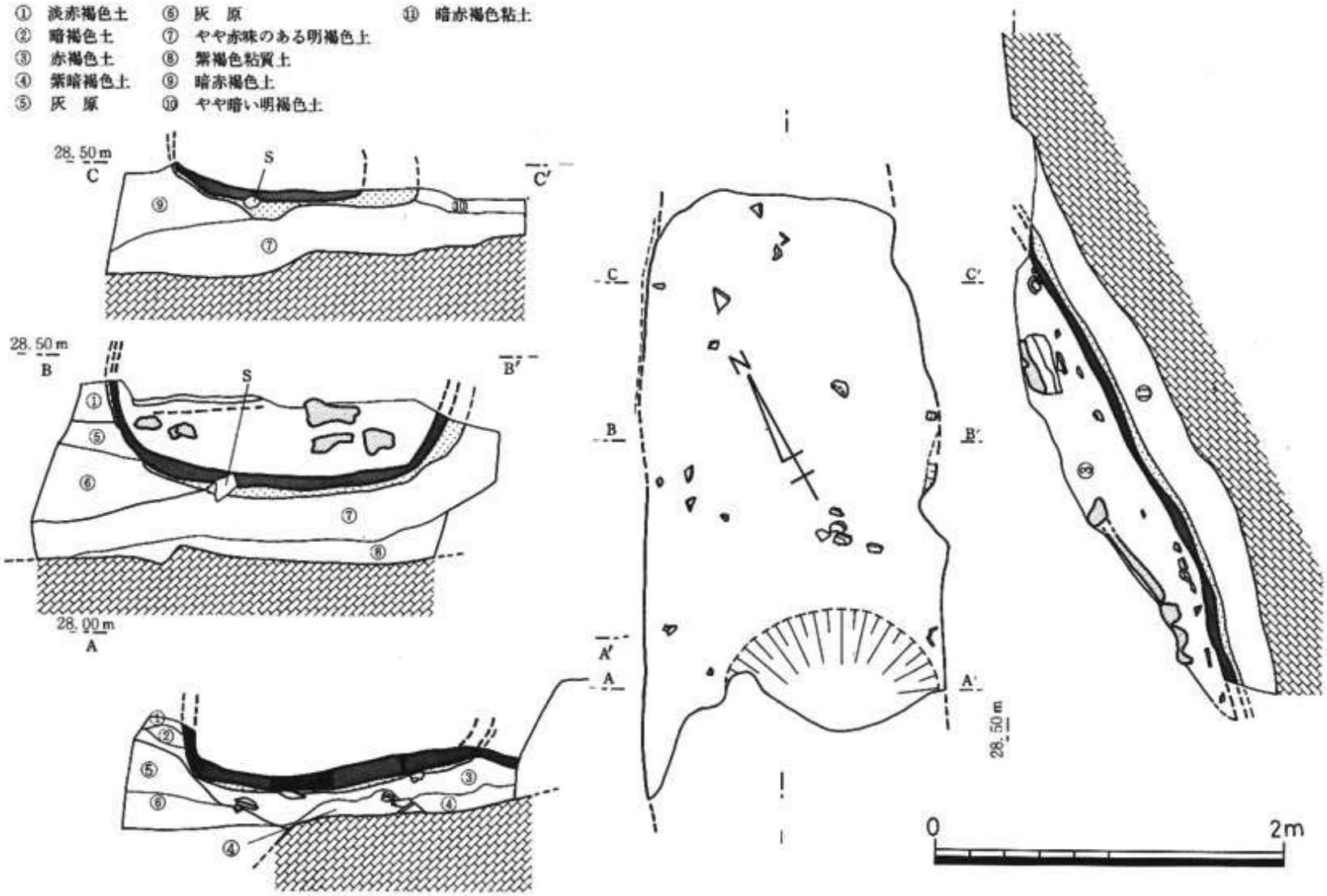
煙　道　部

長さ14cm，床面幅1.1m，残存高10cmを計るが，床面より上は削平されており詳細は不明であった。ただし床面は厚さ6cm程の一重であり非常に薄くかつ脆く，また焼成の影響を受け赤く変色していた。

ウ，出土遺物

本窯跡から出土した遺物は全て破片で，蓋坏が8片，高坏と甕が各3片，瓮と横瓶が各2片，提瓶が1片，の僅か計19片を数え，4号窯跡に比べ非常に少なかった。このうち実測できたのは，坏蓋が6点，高坏・横瓶・甕が各2点，坏身・提瓶・短頸壺・瓮が各1点，の計16点であった（第22図）。

坏蓋（5－1～6）は，天井部が低くかつ平坦である，器肉が天井部と口縁部の変換点付



第23図　6号竪穴実測図